埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第465集

飯　能　市

向原A／芦苅場

株式会社秀拓飯能地区開発事業予定地に係る
埋蔵文化財発掘調査報告
（第２分冊）

２０２０

株式会社　秀拓
公益財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目　次

（第１分冊）

巻頭図版
序
例言
凡例
目次
Ⅰ　発掘調査の概要 …… 1
　1　発掘調査に至る経過 …… 1
　2　発掘調査・報告書作成の経過 …… 5
　　（1）発掘調査 …… 5
　　（2）整理・報告書の作成 …… 5
　3　発掘調査・報告書作成の組織 …… 6
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 7
　1　地理的環境 …… 7
　2　歴史的環境 …… 10
Ⅲ　遺跡の概要 …… 16
　1　向原Ａ遺跡 …… 20
　2　芦苅場遺跡 …… 21
Ⅳ　向原Ａ遺跡の調査 …… 28
　1　縄文時代の遺構と遺物 …… 28
　　（1）住居跡 …… 28
　　（2）集石土壙 …… 61
　　（3）グリッド出土遺物 …… 65
　2　中・近世の遺構と遺物 …… 70
　　（1）地下式坑 …… 70
　　（2）土壙 …… 70
　　（3）ピット …… 72
　　（4）グリッド出土遺物 …… 72
Ⅴ　芦苅場遺跡の調査 …… 81
　1　旧石器時代の遺構と遺物 …… 81
　2　縄文時代の遺構と遺物 …… 83
　　（1）住居跡 …… 83
　　ａ）Ⅰ区 …… 83
　　ｂ）Ⅱ区 …… 92

（第２分冊）

　　ｃ）Ⅲ区 …… 437
　　ｄ）Ⅳ区 …… 675
　　（2）集石土壙 …… 704
　　ａ）Ⅱ区 …… 704
　　ｂ）Ⅲ区 …… 741
　　ｃ）Ⅳ区 …… 777
　　（3）土壙 …… 779
　　ａ）Ⅱ区 …… 779
　　ｂ）Ⅲ区 …… 788
　　ｃ）Ⅳ区 …… 798
　　（4）特殊遺構 …… 799
　　ａ）Ⅰ区 …… 799
　　ｂ）Ⅱ区 …… 799
　　（5）グリッド出土遺物 …… 804
　　ａ）縄文土器 …… 804
　　ｂ）土製品 …… 807
　　ｃ）石器 …… 811
　　ｄ）石製品 …… 817
　3　中・近世の遺構と遺物 …… 821
　　（1）地下式坑 …… 821
　　ａ）Ⅱ区 …… 821
　　（2）土壙 …… 829
　　ａ）Ⅰ区 …… 829
　　ｂ）Ⅱ区 …… 829
　　ｃ）Ⅲ区 …… 836
　　（3）井戸跡 …… 836
　　ａ）Ⅱ区 …… 836

（4）溝跡 …… 836
a）Ⅱ区 …… 836
b）Ⅲ区 …… 837
（5）ピット …… 837
a）Ⅰ区 …… 845
b）Ⅱ区 …… 845
c）Ⅲ区 …… 845
（6）グリッド出土遺物 …… 847
Ⅵ 自然科学分析 …… 856
1 材同定 …… 856
2 放射性炭素（^{14}C）
年代測定（AMS法） …… 859
3 レプリカ・セム法による
土器圧痕分析 …… 861
Ⅶ 調査のまとめ …… 866
1 発掘調査の成果 …… 866
2 縄文時代中期の環状集落変遷 …… 866
3 縄文時代中期の土器群について …… 875
4 縄文時代中期の石器群について …… 886
5 芦苅場遺跡の集石土壙について …… 886
6 集石土壙の礫分析について …… 890

（第３分冊）

写真図版

挿　図　目　次

（第２分冊）

第355図　第21号住居跡（１）…… 438
第356図　第21号住居跡（２）
・出土遺物（１）…… 439
第357図　第21号住居跡出土遺物（２）…… 440
第358図　第22号住居跡（１）…… 442
第359図　第22号住居跡（２）…… 443
第360図　第22号住居跡
遺物出土状況（１）…… 446
第361図　第22号住居跡
遺物出土状況（２）…… 447
第362図　第22号住居跡出土遺物（１）…… 448
第363図　第22号住居跡出土遺物（２）…… 449
第364図　第22号住居跡出土遺物（３）…… 450
第365図　第22号住居跡出土遺物（４）…… 451
第366図　第22号住居跡出土遺物（５）…… 452
第367図　第22号住居跡出土遺物（６）…… 453
第368図　第22号住居跡出土遺物（７）…… 454
第369図　第22号住居跡出土遺物（８）…… 455
第370図　第22号住居跡出土遺物（９）…… 456
第371図　第23号住居跡…… 458
第372図　第23号住居跡
遺物出土状況（１）…… 459
第373図　第23号住居跡
遺物出土状況（２）…… 460
第374図　第23号住居跡出土遺物（１）…… 462
第375図　第23号住居跡出土遺物（２）…… 463
第376図　第23号住居跡出土遺物（３）…… 464
第377図　第23号住居跡出土遺物（４）…… 465
第378図　第23号住居跡出土遺物（５）…… 466
第379図　第23号住居跡出土遺物（６）…… 467
第380図　第23号住居跡出土遺物（７）…… 468
第381図　第23号住居跡出土遺物（８）…… 469
第382図　第51号住居跡（１）…… 472
第383図　第51号住居跡（２）…… 473
第384図　第51号住居跡出土遺物（１）…… 474
第385図　第51号住居跡出土遺物（２）…… 475
第386図　第51号住居跡出土遺物（３）…… 476
第387図　第52号住居跡（１）…… 478
第388図　第52号住居跡（２）…… 479
第389図　第52号住居跡
遺物出土状況（１）…… 480
第390図　第52号住居跡
遺物出土状況（２）…… 481
第391図　第52号住居跡出土遺物（１）…… 482
第392図　第52号住居跡出土遺物（２）…… 483
第393図　第52号住居跡出土遺物（３）…… 484
第394図　第52号住居跡出土遺物（４）…… 485
第395図　第52号住居跡出土遺物（５）…… 486
第396図　第52号住居跡出土遺物（６）…… 487
第397図　第52号住居跡出土遺物（７）…… 488
第398図　第52号住居跡出土遺物（８）…… 489
第399図　第53号住居跡（１）…… 492
第400図　第53号住居跡（２）…… 493
第401図　第53号住居跡
遺物出土状況（１）…… 494
第402図　第53号住居跡
遺物出土状況（２）…… 495
第403図　第53号住居跡
遺物出土状況（３）…… 496
第404図　第53号住居跡
遺物出土状況（４）…… 497
第405図　第53号住居跡
遺物出土状況（５）…… 498
第406図　第53号住居跡出土遺物（１）…… 499
第407図　第53号住居跡出土遺物（２）…… 500
第408図　第53号住居跡出土遺物（３）…… 501

第409図　第53号住居跡出土遺物（4）‥‥ 502
第410図　第53号住居跡出土遺物（5）‥‥ 503
第411図　第53号住居跡出土遺物（6）‥‥ 504
第412図　第53号住居跡出土遺物（7）‥‥ 505
第413図　第53号住居跡出土遺物（8）‥‥ 506
第414図　第53号住居跡出土遺物（9）‥‥ 507
第415図　第53号住居跡出土遺物（10）‥‥ 508
第416図　第53号住居跡出土遺物（11）‥‥ 509
第417図　第53号住居跡出土遺物（12）‥‥ 510
第418図　第53号住居跡出土遺物（13）‥‥ 511
第419図　第53号住居跡出土遺物（14）‥‥ 512
第420図　第54号住居跡 ‥‥‥‥‥‥‥‥ 518
第421図　第54号住居跡出土遺物（1）‥‥ 519
第422図　第54号住居跡出土遺物（2）‥‥ 520
第423図　第54号住居跡出土遺物（3）‥‥ 521
第424図　第54号住居跡出土遺物（4）‥‥ 522
第425図　第55号住居跡 ‥‥‥‥‥‥‥‥ 525
第426図　第55号住居跡出土遺物（1）‥‥ 526
第427図　第55号住居跡出土遺物（2）‥‥ 527
第428図　第56号住居跡（1）‥‥‥‥‥‥ 528
第429図　第56号住居跡（2）‥‥‥‥‥‥ 529
第430図　第56号住居跡
遺物出土状況（1）‥‥‥‥‥‥ 531
第431図　第56号住居跡
遺物出土状況（2）‥‥‥‥‥‥ 532
第432図　第56号住居跡出土遺物（1）‥‥ 533
第433図　第56号住居跡出土遺物（2）‥‥ 534
第434図　第56号住居跡出土遺物（3）‥‥ 535
第435図　第56号住居跡出土遺物（4）‥‥ 536
第436図　第56号住居跡出土遺物（5）‥‥ 537
第437図　第57号住居跡（1）‥‥‥‥‥‥ 540
第438図　第57号住居跡（2）‥‥‥‥‥‥ 541
第439図　第57号住居跡出土遺物（1）‥‥ 542
第440図　第57号住居跡出土遺物（2）‥‥ 543
第441図　第57号住居跡出土遺物（3）‥‥ 544
第442図　第57号住居跡出土遺物（4）‥‥ 545
第443図　第58号住居跡‥‥‥‥‥‥‥‥ 548
第444図　第58号住居跡
遺物出土状況（1）‥‥‥‥‥‥ 549
第445図　第58号住居跡
遺物出土状況（2）‥‥‥‥‥‥ 550
第446図　第58号住居跡
遺物出土状況（3）‥‥‥‥‥‥ 551
第447図　第58号住居跡
遺物出土状況（4）‥‥‥‥‥‥ 552
第448図　第58号住居跡出土遺物（1）‥‥ 553
第449図　第58号住居跡出土遺物（2）‥‥ 554
第450図　第58号住居跡出土遺物（3）‥‥ 555
第451図　第58号住居跡出土遺物（4）‥‥ 556
第452図　第58号住居跡出土遺物（5）‥‥ 557
第453図　第58号住居跡出土遺物（6）‥‥ 558
第454図　第58号住居跡出土遺物（7）‥‥ 559
第455図　第58号住居跡出土遺物（8）‥‥ 560
第456図　第58号住居跡出土遺物（9）‥‥ 561
第457図　第58号住居跡出土遺物（10）‥‥ 562
第458図　第58号住居跡出土遺物（11）‥‥ 563
第459図　第58号住居跡出土遺物（12）‥‥ 564
第460図　第58号住居跡出土遺物（13）‥‥ 565
第461図　第58号住居跡出土遺物（14）‥‥ 566
第462図　第58号住居跡出土遺物（15）‥‥ 567
第463図　第58号住居跡出土遺物（16）‥‥ 568
第464図　第59号住居跡（1）‥‥‥‥‥‥ 574
第465図　第59号住居跡（2）‥‥‥‥‥‥ 575
第466図　第59号住居跡遺物出土状況 ‥‥ 576
第467図　第59号住居跡出土遺物（1）‥‥ 577
第468図　第59号住居跡出土遺物（2）‥‥ 578
第469図　第59号住居跡出土遺物（3）‥‥ 579
第470図　第59号住居跡出土遺物（4）‥‥ 580
第471図　第59号住居跡出土遺物（5）‥‥ 581
第472図　第59号住居跡出土遺物（6）‥‥ 582
第473図　第60号住居跡（1）‥‥‥‥‥‥ 586
第474図　第60号住居跡（2）
・遺物出土状況‥‥‥‥‥‥‥‥ 587
第475図　第60号住居跡出土遺物（1）‥‥ 588

第476図　第60号住居跡出土遺物（2）‥‥ 589
第477図　第60号住居跡出土遺物（3）‥‥ 590
第478図　第60号住居跡出土遺物（4）‥‥ 591
第479図　第61号住居跡（1）‥‥‥‥‥‥ 594
第480図　第61号住居跡（2）
・出土遺物（1）‥‥‥‥‥‥‥ 595
第481図　第61号住居跡遺物出土状況 ‥‥ 596
第482図　第61号住居跡出土遺物（2）‥‥ 597
第483図　第61号住居跡出土遺物（3）‥‥ 598
第484図　第61号住居跡出土遺物（4）‥‥ 599
第485図　第61号住居跡出土遺物（5）‥‥ 600
第486図　第62号住居跡（1）‥‥‥‥‥‥ 602
第487図　第62号住居跡（2）‥‥‥‥‥‥ 603
第488図　第62号住居跡（3）‥‥‥‥‥‥ 604
第489図　第62号住居跡出土遺物（1）‥‥ 605
第490図　第62号住居跡出土遺物（2）‥‥ 606
第491図　第62号住居跡出土遺物（3）‥‥ 607
第492図　第62号住居跡出土遺物（4）‥‥ 608
第493図　第62号住居跡出土遺物（5）‥‥ 609
第494図　第63号住居跡（1）‥‥‥‥‥‥ 612
第495図　第63号住居跡（2）‥‥‥‥‥‥ 613
第496図　第63号住居跡遺物出土状況 ‥‥ 614
第497図　第63号住居跡出土遺物（1）‥‥ 615
第498図　第63号住居跡出土遺物（2）‥‥ 616
第499図　第63号住居跡出土遺物（3）‥‥ 617
第500図　第63号住居跡出土遺物（4）‥‥ 618
第501図　第63号住居跡出土遺物（5）‥‥ 619
第502図　第63号住居跡出土遺物（6）‥‥ 620
第503図　第63号住居跡出土遺物（7）‥‥ 621
第504図　第63号住居跡出土遺物（8）‥‥ 622
第505図　第64・65号住居跡（1）‥‥‥‥ 626
第506図　第64・65号住居跡（2）‥‥‥‥ 627
第507図　第64・65号住居跡
遺物出土状況（1）‥‥‥‥‥‥ 628
第508図　第64・65号住居跡
遺物出土状況（2）‥‥‥‥‥‥ 629
第509図　第64号住居跡出土遺物（1）‥‥ 630
第510図　第64号住居跡出土遺物（2）‥‥ 631
第511図　第64号住居跡出土遺物（3）‥‥ 632
第512図　第64号住居跡出土遺物（4）‥‥ 633
第513図　第64号住居跡出土遺物（5）‥‥ 634
第514図　第64号住居跡出土遺物（6）‥‥ 635
第515図　第64号住居跡出土遺物（7）‥‥ 636
第516図　第64号住居跡出土遺物（8）‥‥ 637
第517図　第64号住居跡出土遺物（9）‥‥ 638
第518図　第64号住居跡出土遺物（10）‥‥ 639
第519図　第64号住居跡出土遺物（11）‥‥ 640
第520図　第64号住居跡出土遺物（12）‥‥ 641
第521図　第65号住居跡出土遺物（1）‥‥ 644
第522図　第65号住居跡出土遺物（2）‥‥ 645
第523図　第65号住居跡出土遺物（3）‥‥ 646
第524図　第66号住居跡・出土遺物（1）‥ 648
第525図　第66号住居跡出土遺物（2）‥‥ 649
第526図　第67号住居跡（1）‥‥‥‥‥‥ 651
第527図　第67号住居跡（2）‥‥‥‥‥‥ 652
第528図　第67号住居跡出土遺物（1）‥‥ 653
第529図　第67号住居跡出土遺物（2）‥‥ 654
第530図　第67号住居跡出土遺物（3）‥‥ 655
第531図　第67号住居跡出土遺物（4）‥‥ 656
第532図　第68号住居跡（1）‥‥‥‥‥‥ 659
第533図　第68号住居跡（2）‥‥‥‥‥‥ 660
第534図　第68号住居跡
遺物出土状況（1）‥‥‥‥‥‥ 661
第535図　第68号住居跡
遺物出土状況（2）‥‥‥‥‥‥ 662
第536図　第68号住居跡出土遺物（1）‥‥ 663
第537図　第68号住居跡出土遺物（2）‥‥ 664
第538図　第68号住居跡出土遺物（3）‥‥ 665
第539図　第68号住居跡出土遺物（4）‥‥ 666
第540図　第68号住居跡出土遺物（5）‥‥ 667
第541図　第68号住居跡出土遺物（6）‥‥ 668
第542図　第68号住居跡出土遺物（7）‥‥ 669
第543図　第68号住居跡出土遺物（8）‥‥ 670
第544図　第68号住居跡出土遺物（9）‥‥ 671

第545図　第68号住居跡出土遺物（10）‥‥ 672
第546図　第68号住居跡出土遺物（11）‥‥ 673
第547図　第77号住居跡 ‥‥‥‥‥‥‥‥ 676
第548図　第77号住居跡出土遺物（1）‥‥ 677
第549図　第77号住居跡出土遺物（2）‥‥ 678
第550図　第77号住居跡出土遺物（3）‥‥ 679
第551図　第77号住居跡出土遺物（4）‥‥ 680
第552図　第77号住居跡出土遺物（5）‥‥ 681
第553図　第77号住居跡出土遺物（6）‥‥ 682
第554図　第77号住居跡出土遺物（7）‥‥ 683
第555図　第77号住居跡出土遺物（8）‥‥ 684
第556図　第77号住居跡出土遺物（9）‥‥ 685
第557図　第77号住居跡出土遺物（10）‥‥ 686
第558図　第78号住居跡 ‥‥‥‥‥‥‥‥ 694
第559図　第78号住居跡出土遺物（1）‥‥ 695
第560図　第78号住居跡出土遺物（2）‥‥ 696
第561図　第79号住居跡 ‥‥‥‥‥‥‥‥ 698
第562図　第79号住居跡出土遺物‥‥‥‥‥ 699
第563図　第80号住居跡 ‥‥‥‥‥‥‥‥ 700
第564図　第80号住居跡出土遺物（1）‥‥ 701
第565図　第80号住居跡出土遺物（2）‥‥ 702
第566図　Ⅱ区集石土壙（1）‥‥‥‥‥‥ 706
第567図　Ⅱ区集石土壙（2）‥‥‥‥‥‥ 707
第568図　Ⅱ区集石土壙出土遺物（1）‥‥ 708
第569図　Ⅱ区集石土壙出土遺物（2）‥‥ 709
第570図　Ⅱ区集石土壙（3）‥‥‥‥‥‥ 710
第571図　Ⅱ区集石土壙（4）‥‥‥‥‥‥ 711
第572図　Ⅱ区集石土壙出土遺物（3）‥‥ 712
第573図　Ⅱ区集石土壙（5）‥‥‥‥‥‥ 714
第574図　Ⅱ区集石土壙（6）‥‥‥‥‥‥ 715
第575図　Ⅱ区集石土壙（7）‥‥‥‥‥‥ 716
第576図　Ⅱ区集石土壙出土遺物（4）‥‥ 717
第577図　Ⅱ区集石土壙出土遺物（5）‥‥ 718
第578図　Ⅱ区集石土壙（8）‥‥‥‥‥‥ 720
第579図　Ⅱ区集石土壙（9）‥‥‥‥‥‥ 725
第580図　Ⅱ区集石土壙出土遺物（6）‥‥ 726
第581図　Ⅱ区集石土壙（10）‥‥‥‥‥‥ 727
第582図　Ⅱ区集石土壙出土遺物（7）‥‥ 728
第583図　Ⅱ区集石土壙（11）‥‥‥‥‥‥ 732
第584図　Ⅱ区集石土壙出土遺物（8）‥‥ 733
第585図　Ⅱ区集石土壙（12）‥‥‥‥‥‥ 734
第586図　Ⅱ区集石土壙分析図（1）‥‥‥ 735
第587図　Ⅱ区集石土壙分析図（2）‥‥‥ 736
第588図　Ⅱ区集石土壙分析図（3）‥‥‥ 737
第589図　Ⅱ区集石土壙分析図（4）‥‥‥ 738
第590図　Ⅱ区集石土壙分析図（5）‥‥‥ 739
第591図　Ⅱ区集石土壙分析図（6）‥‥‥ 740
第592図　Ⅲ区集石土壙（1）‥‥‥‥‥‥ 742
第593図　Ⅲ区集石土壙（2）‥‥‥‥‥‥ 743
第594図　Ⅲ区集石土壙出土遺物（1）‥‥ 744
第595図　Ⅲ区集石土壙出土遺物（2）‥‥ 745
第596図　Ⅲ区集石土壙（3）‥‥‥‥‥‥ 746
第597図　Ⅲ区集石土壙（4）‥‥‥‥‥‥ 747
第598図　Ⅲ区集石土壙出土遺物（3）‥‥ 748
第599図　Ⅲ区集石土壙（5）‥‥‥‥‥‥ 752
第600図　Ⅲ区集石土壙（6）‥‥‥‥‥‥ 753
第601図　Ⅲ区集石土壙出土遺物（4）‥‥ 756
第602図　Ⅲ区集石土壙出土遺物（5）‥‥ 757
第603図　Ⅲ区集石土壙（7）‥‥‥‥‥‥ 760
第604図　Ⅲ区集石土壙（8）‥‥‥‥‥‥ 762
第605図　Ⅲ区集石土壙（9）‥‥‥‥‥‥ 764
第606図　Ⅲ区集石土壙（10）‥‥‥‥‥‥ 766
第607図　Ⅲ区集石土壙出土遺物（6）‥‥ 767
第608図　Ⅲ区集石土壙出土遺物（7）‥‥ 769
第609図　Ⅲ区集石土壙（11）‥‥‥‥‥‥ 770
第610図　Ⅲ区集石土壙出土遺物（8）‥‥ 771
第611図　Ⅲ区集石土壙分析図（1）‥‥‥ 772
第612図　Ⅲ区集石土壙分析図（2）‥‥‥ 773
第613図　Ⅲ区集石土壙分析図（3）‥‥‥ 774
第614図　Ⅲ区集石土壙分析図（4）‥‥‥ 775
第615図　Ⅲ区集石土壙分析図（5）‥‥‥ 776
第616図　Ⅲ区集石土壙分析図（6）‥‥‥ 777
第617図　Ⅱ区土壙出土遺物（1）‥‥‥‥ 780
第618図　Ⅱ区土壙（1）‥‥‥‥‥‥‥‥ 781

第619図　Ⅱ区土壙（2）…… 782
第620図　Ⅱ区土壙出土遺物（2）…… 783
第621図　Ⅱ区土壙出土遺物（3）…… 784
第622図　Ⅱ区土壙（3）…… 786
第623図　Ⅱ区土壙出土遺物（4）…… 787
第624図　Ⅲ区土壙出土遺物（1）…… 790
第625図　Ⅲ区土壙（1）…… 791
第626図　Ⅲ区土壙出土遺物（2）…… 792
第627図　Ⅲ区土壙（2）…… 793
第628図　Ⅲ区土壙（3）…… 794
第629図　Ⅲ区土壙出土遺物（3）…… 795
第630図　Ⅲ区土壙出土遺物（4）
・Ⅳ区土壙出土遺物…… 796
第631図　第１号特殊遺構・遺物出土状況… 800
第632図　第２号特殊遺構・遺物出土状況… 801
第633図　第２号特殊遺構出土遺物（1）… 802
第634図　第２号特殊遺構出土遺物（2）… 803
第635図　グリッド出土遺物（1）…… 805
第636図　グリッド出土遺物（2）…… 806
第637図　グリッド出土遺物（3）…… 808
第638図　グリッド出土遺物（4）…… 809
第639図　グリッド出土遺物（5）…… 810
第640図　グリッド出土遺物（6）…… 812
第641図　グリッド出土遺物（7）…… 813
第642図　グリッド出土遺物（8）…… 814
第643図　グリッド出土遺物（9）…… 815
第644図　グリッド出土遺物（10）…… 816
第645図　地下式坑（1）…… 822
第646図　地下式坑（2）…… 823
第647図　地下式坑出土遺物（1）…… 824
第648図　地下式坑出土遺物（2）…… 825
第649図　地下式坑（3）…… 826
第650図　地下式坑出土遺物（3）…… 827
第651図　地下式坑出土遺物（4）…… 828
第652図　中・近世Ⅰ区土壙…… 830
第653図　中・近世Ⅱ区土壙（1）…… 832
第654図　中・近世Ⅱ区土壙（2）…… 833
第655図　中・近世Ⅱ区土壙（3）…… 834
第656図　中・近世Ⅲ区土壙…… 834
第657図　中・近世Ⅱ区土壙出土遺物…… 835
第658図　第１号井戸跡・出土遺物…… 837
第659図　第１・２号溝跡…… 838
第660図　第３号溝跡…… 839
第661図　ピット（1）…… 841
第662図　ピット（2）…… 842
第663図　ピット（3）…… 843
第664図　ピット（4）…… 844
第665図　ピット出土遺物…… 845
第666図　中・近世グリッド出土遺物（1）… 848
第667図　中・近世グリッド出土遺物（2）… 849
第668図　芦苅場遺跡出土炭化材の
走査型電子顕微鏡写真…… 858
第669図　暦年較正結果…… 860
第670図　芦苅場遺跡出土土器の圧痕レプリカ
の走査型電子顕微鏡写真（1）… 864
第671図　芦苅場遺跡出土土器の圧痕レプリカ
の走査型電子顕微鏡写真（2）… 865
第672図　芦苅場遺跡集落変遷図（1）…… 867
第673図　芦苅場遺跡集落変遷図（2）…… 868
第674図　芦苅場遺跡集落変遷図（3）…… 869
第675図　芦苅場遺跡住居跡変遷図（1）… 872
第676図　芦苅場遺跡住居跡変遷図（2）… 873
第677図　芦苅場遺跡土器変遷図（1）…… 876
第678図　芦苅場遺跡土器変遷図（2）…… 877
第679図　芦苅場遺跡土器変遷図（3）…… 878
第680図　芦苅場遺跡土器変遷図（4）…… 879
第681図　芦苅場遺跡土器変遷図（5）…… 880
第682図　芦苅場遺跡土器変遷図（6）…… 881
第683図　集石土壙変遷図 …… 889
第684図　向原Ａ遺跡における形状別
重量散布図 …… 891
第685図　芦苅場遺跡における形状別
重量散布図 …… 891
第686図　向原Ａ遺跡における各集石土壙の形状

別重量散布図 ･････････････････ 893
第687図　芦苅場遺跡における各集石土壙の形状
別重量散布図（1）･････････････ 893
第688図　芦苅場遺跡における各集石土壙の形状
別重量散布図（2）･････････････ 894
第689図　芦苅場遺跡における各集石土壙の形状
別重量散布図（3）･････････････ 894
第690図　芦苅場遺跡における各集石土壙の形状
別重量散布図（4）･････････････ 895

表　目　次

（第２分冊）

第152表　第21号住居跡柱穴計測表･････････ 441
第153表　第21号住居跡
出土復元土器観察表･････････････ 441
第154表　第21号住居跡出土石器観察表････ 441
第155表　第22号住居跡柱穴計測表･････････ 444
第156表　第22号住居跡
出土復元土器観察表･････････････ 451
第157表　第22号住居跡出土石器観察表････ 457
第158表　第23号住居跡柱穴計測表･････････ 466
第159表　第23号住居跡
出土復元土器観察表･････････････ 466
第160表　第23号住居跡出土石器観察表････ 469
第161表　第51号住居跡柱穴計測表･････････ 471
第162表　第51号住居跡
出土復元土器観察表･････････････ 476
第163表　第51号住居跡出土石器観察表････ 476
第164表　第52号住居跡柱穴計測表･････････ 479
第165表　第52号住居跡
出土復元土器観察表･････････････ 485
第166表　第52号住居跡出土石器観察表････ 490
第167表　第53号住居跡柱穴計測表･････････ 513
第168表　第53号住居跡
出土復元土器観察表･････････････ 513
第169表　第53号住居跡出土石器観察表････ 515
第170表　第54号住居跡柱穴計測表･････････ 519
第171表　第54号住居跡
出土復元土器観察表･････････････ 519
第172表　第54号住居跡出土石器観察表････ 523
第173表　第55号住居跡
出土復元土器観察表･････････････ 526
第174表　第55号住居跡出土石器観察表････ 526
第175表　第56号住居跡柱穴計測表･････････ 530
第176表　第56号住居跡
出土復元土器観察表･････････････ 534
第177表　第56号住居跡出土石器観察表････ 538
第178表　第57号住居跡柱穴計測表･････････ 541
第179表　第57号住居跡
出土復元土器観察表･････････････ 546
第180表　第57号住居跡出土石器観察表････ 546
第181表　第58号住居跡柱穴計測表･････････ 569
第182表　第58号住居跡
出土復元土器観察表･････････････ 569
第183表　第58号住居跡出土石器観察表････ 569
第184表　第59号住居跡柱穴計測表･････････ 575
第185表　第59号住居跡
出土復元土器観察表･････････････ 583
第186表　第59号住居跡出土石器観察表････ 583
第187表　第60号住居跡柱穴計測表･････････ 589
第188表　第60号住居跡
出土復元土器観察表･････････････ 589
第189表　第60号住居跡出土石器観察表････ 592
第190表　第61号住居跡柱穴計測表･････････ 597

第191表　第61号住居跡
出土復元土器観察表…… 597
第192表　第61号住居跡出土石器観察表…… 601
第193表　第62号住居跡柱穴計測表…… 603
第194表　第62号住居跡
出土復元土器観察表…… 605
第195表　第62号住居跡出土石器観察表…… 610
第196表　第63号住居跡柱穴計測表…… 613
第197表　第63号住居跡
出土復元土器観察表…… 613
第198表　第63号住居跡出土石器観察表…… 622
第199表　第64･65号住居跡柱穴計測表…… 639
第200表　第64号住居跡
出土復元土器観察表…… 639
第201表　第64号住居跡出土石器観察表…… 641
第202表　第65号住居跡
出土復元土器観察表…… 646
第203表　第65号住居跡出土石器観察表…… 646
第204表　第66号住居跡柱穴計測表…… 650
第205表　第66号住居跡
出土復元土器観察表…… 650
第206表　第66号住居跡出土石器観察表…… 650
第207表　第67号住居跡柱穴計測表…… 652
第208表　第67号住居跡
出土復元土器観察表…… 652
第209表　第67号住居跡出土石器観察表…… 657
第210表　第68号住居跡柱穴計測表…… 660
第211表　第68号住居跡
出土復元土器観察表…… 671
第212表　第68号住居跡出土石器観察表…… 673
第213表　第77号住居跡柱穴計測表…… 687
第214表　第77号住居跡
出土復元土器観察表…… 687
第215表　第77号住居跡出土石器観察表…… 687
第216表　第78号住居跡柱穴計測表…… 696
第217表　第78号住居跡
出土復元土器観察表…… 696
第218表　第78号住居跡出土石器観察表…… 696
第219表　第79号住居跡柱穴計測表…… 699
第220表　第80号住居跡柱穴計測表…… 702
第221表　第80号住居跡出土石器観察表…… 703
第222表　Ⅱ区集石土壙
出土復元土器観察表…… 708
第223表　Ⅲ区集石土壙
出土復元土器観察表…… 748
第224表　Ⅱ区集石土壙出土石器観察表…… 778
第225表　Ⅲ区集石土壙出土石器観察表…… 778
第226表　Ⅱ区土壙
出土復元土器観察表…… 799
第227表　Ⅱ区土壙出土石器観察表…… 799
第228表　Ⅲ区土壙
出土復元土器観察表…… 799
第229表　Ⅲ区土壙出土石器観察表…… 799
第230表　第２号特殊遺構
出土復元土器観察表…… 801
第231表　第２号特殊遺構出土石器観察表…… 801
第232表　グリッド出土
復元土器観察表…… 806
第233表　芦苅場遺跡出土
ミニチュア土器計測表…… 817
第234表　芦苅場遺跡出土耳飾り計測表…… 817
第235第　芦苅場遺跡出土土錘計測表…… 817
第236表　芦苅場遺跡出土土偶計測表…… 817
第237表　芦苅場遺跡出土土製円盤計測表…… 818
第238表　向原遺跡出土耳飾り計測表…… 820
第239表　向原遺跡出土土製円盤計測表…… 820
第240表　芦苅場遺跡グリッド
出土石器観察表…… 820
第241表　第11～13号地下式坑
出土遺物観察表…… 840
第242表　中・近世Ⅱ区
土壙出土遺物観察表…… 840
第243表　井戸跡出土遺物観察表…… 840
第244表　ピット一覧表…… 846

第245表　中・近世グリッド
出土遺物観察表…… 849
第246表　縄文時代の住居一覧表…… 850
第247表　集石土壙一覧表 …… 852
第248表　縄文時代の土壙一覧表…… 854
第249表　中・近世の土壙一覧表…… 855
第250表　樹種同定結果 …… 856
第251表　測定試料及び処理…… 859
第252表　測定試料結果 …… 859
第253表　芦苅場遺跡出土
土器の圧痕の同定結果（1）…… 862
第254表　芦苅場遺跡出土
土器の圧痕の同定結果（2）…… 863
第255表　遺跡出土石器一覧表…… 886
第256表　芦苅場遺跡住居跡出土石器一覧表…… 887
第257表　芦苅場遺跡集石土壙分類表…… 888
第258表　向原Ａ遺跡の「分析対象範囲」内重量
平均値 …… 891
第259表　芦苅場遺跡の「分析対象範囲」内重量
平均値 …… 891
第260表　芦苅場遺跡における集石土壙データ
一覧表 …… 892
第261表　グループＡにおける集石土壙データ
一覧表 …… 892
第262表　グループＢにおける集石土壙データ
一覧表 …… 892

c）Ⅲ区

Ⅲ区からは21軒の住居跡が検出されている。

第21号住居跡（第355図～第357図）

H・Ⅰ－23区に位置する。平面形は長径3.96m、短径3.96m、深さ0.35mの不整円形を呈する。

壁溝は検出されなかった。壁は床面から皿状に緩く立ち上がる。

柱穴は８基検出され、覆土、重複状況、深さ及び配置から新旧の２時期に分けられるようである。新規の主柱穴はＰ１、２、４、８の４基の４本柱で、古い段階ではＰ１、８が兼ねていると仮定して、Ｐ３、５と組んで４本主柱の住居跡になると想定できる。

主柱穴の深さは、Ｐ１＝64cm、Ｐ２＝52cm、Ｐ３＝65cm、Ｐ４＝62cm、Ｐ５＝75cm、Ｐ８＝77cmである。

炉跡は、地床炉で住居跡のほぼ中央部に検出された。北西方向に細長い楕円形で、長径59cm、短径45cm、深さ12cmを測る。炉の直上に大きな礫が４点、炉跡を覆うように設置されていた。石囲炉の炉石が動いたものとして調査を進めたが、炉の廃絶に伴って、炉を閉塞するように石組を行ったものと判断した。また、炉床は２段の掘り込み状を呈しており、深い方の掘り込みは埋設土器を抜き取った可能性があり、その上に石組が行われていたような状況である。したがって、住居跡は炉の２回の構築や主柱穴の建て替え等を合わせると、１回建て替えられた可能性が高い。

埋甕は検出されなかった。

住居跡は、形状や覆土出土土器からおよそ勝坂式中段階の所産と判断される。

遺物は第356図１～第357図40の土器類、石器類が出土した。

土器は１～33である。１は口縁が内湾して開くキャリパー形の深鉢で、口縁部に捻りの加わった非対称の「α」状把手を付け、足長の縦位沈線を伴う蓮華状文を施文する。

２は頸部で括れ、胴部が膨らむ器形で、胴部に隆帯で区画文を施し、隆帯脇に幅広の押引爪形文を施文し、小波状沈線文を沿わせている。

破片では、３～12は阿玉台式系土器と思われる。３は口縁部に襞状整形痕を残し、口縁部から隆帯文を垂下している。貼付した低隆帯を潰して作り出すような襞状文であり、シャープさがない。

４、５は隆帯でモチーフを描くが、５は雲母を含んでいる。

６は扇状把手部と思われ、口縁部に垂下する隆帯には輪積み状の整形を施しており、口縁部の区画内には蛇行の結節沈線や並行結節沈線を充填施文する。阿玉台Ⅰｂ式～Ⅱ式に比定されよう。雲母を含む。

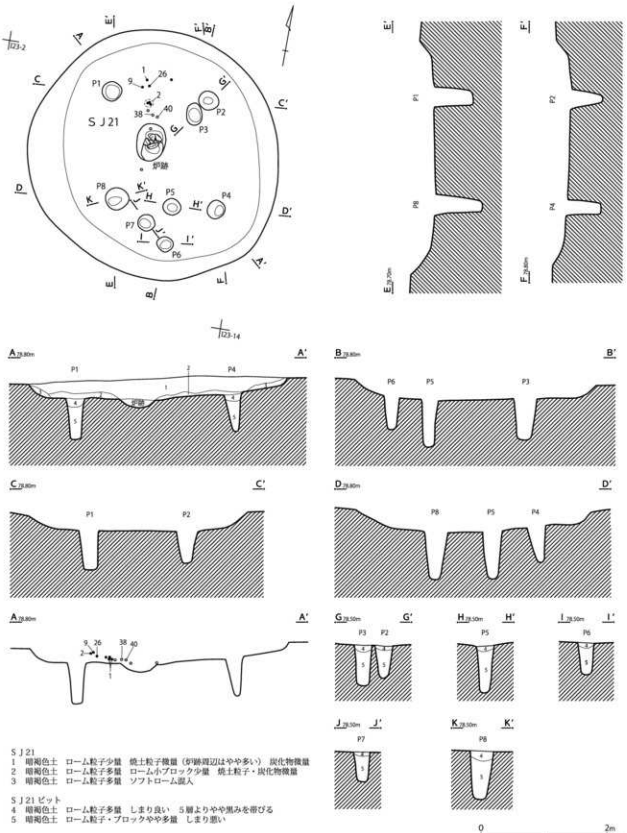
７は断面三角形状の隆帯で区画し、隆帯脇に小継状の波状沈線を施文する。雲母を含み、阿玉台Ⅱ式に比定されよう。

８は条線文を施文する阿玉台式系の土器であるが、雲母は含まれない。阿玉台Ⅱ～Ⅲ式並行期と思われる。

９～12は角押文状の結節沈線文を施文する土器群で、９は口縁部区画に下からの刺突文、頸部区画隆帯脇に横位の結節沈線文を施文する。10は２本並列で波状文を描き、11は区画隆帯脇に施文する。12は肥厚する幅狭な口縁部の区画文の縁を刻むように施文している。およそ阿玉台Ⅱ式並行期に位置付けられようか。

13、14は勝坂式古段階の土器群で、三角押文や円形刺突文を施文する新道式段階の土器群である。13は外反する口唇部下に、区画としてやや大振りの三角押文を施文する。14は外傾する口唇部が角頭状を呈し、口唇上にも結節沈線を巡らせる。口縁部には結節沈線を伴う隆帯で鋸歯状の区画を施し、区画内に円形刺突文を充填している。

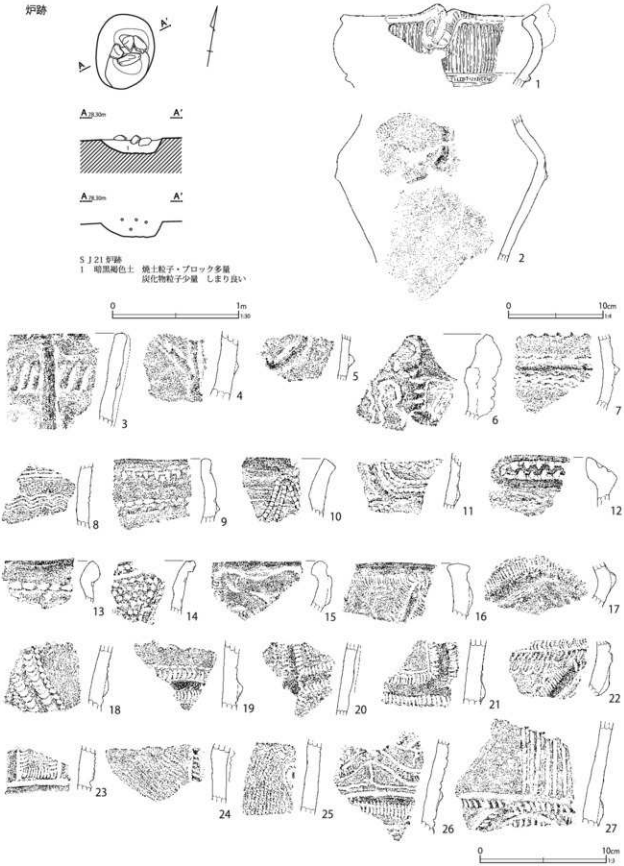
15～21は隆帯の区画文に沿って幅広の細かな爪形文を施文する土器群で、爪形文の脇にはペン先状刺突の結節沈線や鋸歯状文を沿わせている。



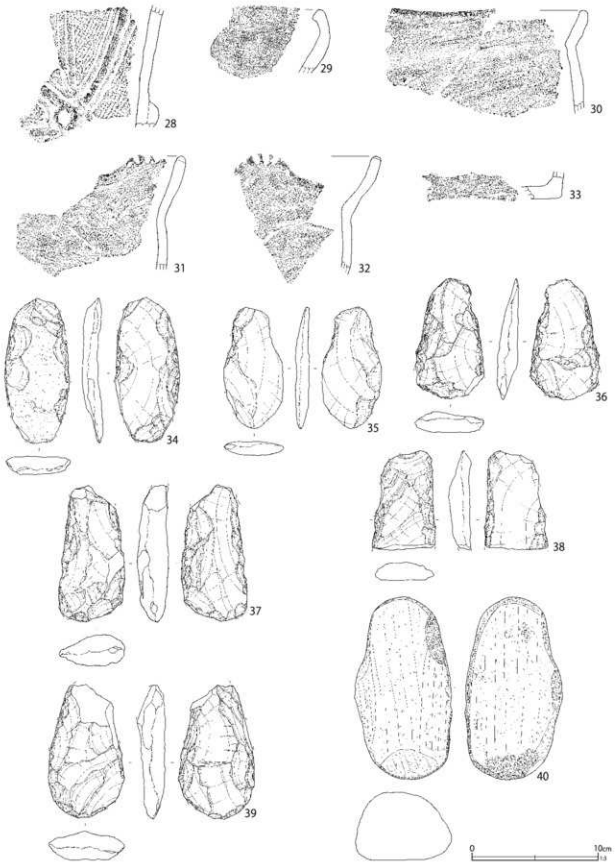
SJ21
1　暗褐色土　ローム粒子少量　焼土粒子微量（炉跡周辺はやや多い）　炭化物微量
2　暗褐色土　ローム粒子多量　ローム小ブロック少量　焼土粒子・炭化物微量
3　暗褐色土　ローム粒子多量　ソフトローム混入

SJ21ピット
4　暗褐色土　ローム粒子多量　しまり良い　5層よりやや黒みを帯びる
5　暗褐色土　ローム粒子・ブロックやや多量　しまり悪い

第355図　第21号住居跡（1）



第356図　第21号住居跡（2）・出土遺物（1）



第357図　第21号住居跡出土遺物（2）

第152表　第21号住居跡柱穴計測表（第355図）

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P 1	31.0	64.0	P 2	32.0	52.0	P 3	35.0	65.0	P 4	29.0	62.0	P 5	29.0	75.0
P 6	27.0	51.0	P 7	27.0	47.0	P 8	37.0	77.0						

第153表　第21号住居跡出土復元土器観察表（第356図）

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備　考
356-1	[8.8]	(19.6)	(22.0)	-	10%
356-2	[16.0]	-	[22.0]	-	10%

第154表　第21号住居跡出土石器観察表（第357図）

番　号	器　種	分類	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
357 - 34	打製石斧	Ⅰ①ア	頁岩	11.5	[5.2]	1.6	97.3	
35	打製石斧	Ⅱ2①イ	ホルンフェルス	9.7	4.7	1.1	58.2	
36	打製石斧	Ⅲ2①イ	頁岩	9.7	[5.5]	1.7	83.6	
37	打製石斧	Ⅲ2②ア	ホルンフェルス	[10.8]	5.2	2.5	160.3	
38	打製石斧	Ⅴ②イ	ホルンフェルス	[7.9]	[5.1]	1.8	83.5	
39	打製石斧	Ⅲ2②イ	ホルンフェルス	[10.7]	6.0	2.3	155.4	
40	磨石	Ⅱ1-3①イ	砂岩	14.5	7.8	5.8	849.3	

18～21は爪形文がやや大きいが、ペン先状の結節沈線を施文し、また、隆帯上に刻みはない。新道式の新しい段階であろうか。

22は隆帯脇に同様な爪形文を施文しているが、蓮華状文となり、隆帯上には刻みを施している。藤内式段階となろう。

23、28は半截竹管状工具の平行沈線でパネル状区画文を施す藤内式土器で、25～27も同時期のものであろう。27は若干新しくなる可能性もある。

29～32は頸部で括れ口縁部が開く無文の深鉢形土器で、30～32は波状口縁である。31、32は同一個体である。

33は底部破片である。

石器は34～40が出土した。

34～39は打製石斧である。34が楕円形を、35～37が撥形を呈する。このうち、34のみが片刃で、その他は両刃である。38が基部片、39は片刃の打製石斧である。

40は自然礫を用いた磨石である。

第22号住居跡（第358図～第370図）

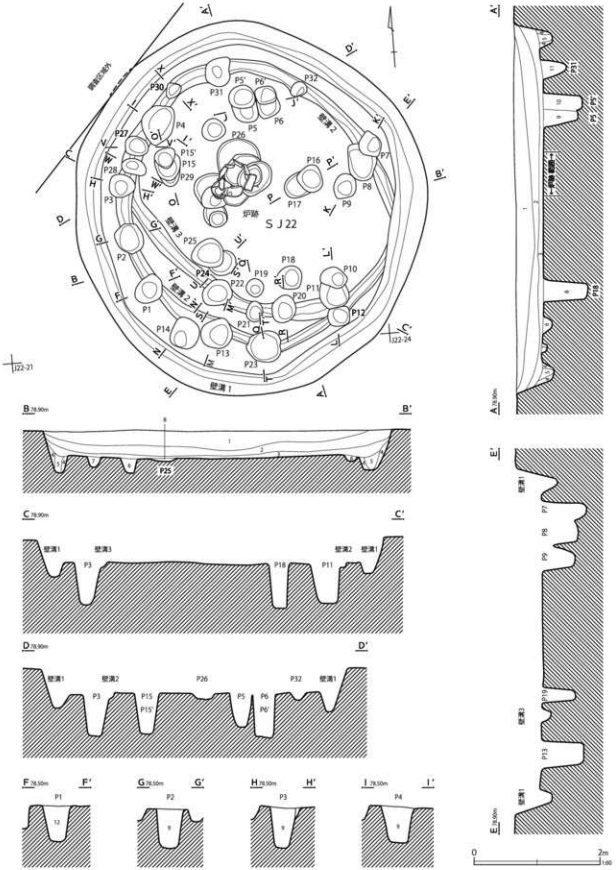
Ｊ－22区に位置する。平面形は北東方向に若干細長い隅丸方形に近い不整円形で、長径5.94m、短径5.55m、深さ0.45mを測る。

壁溝は、重複しながら３本検出された。壁溝１は一番外側で、最終段階の住居跡の壁溝である。壁溝２は壁溝１の内側にあり、北東壁で壁溝１と一部重複する。壁溝３は大部分が壁溝２と重複しており、南西側の壁溝のみ独立している。

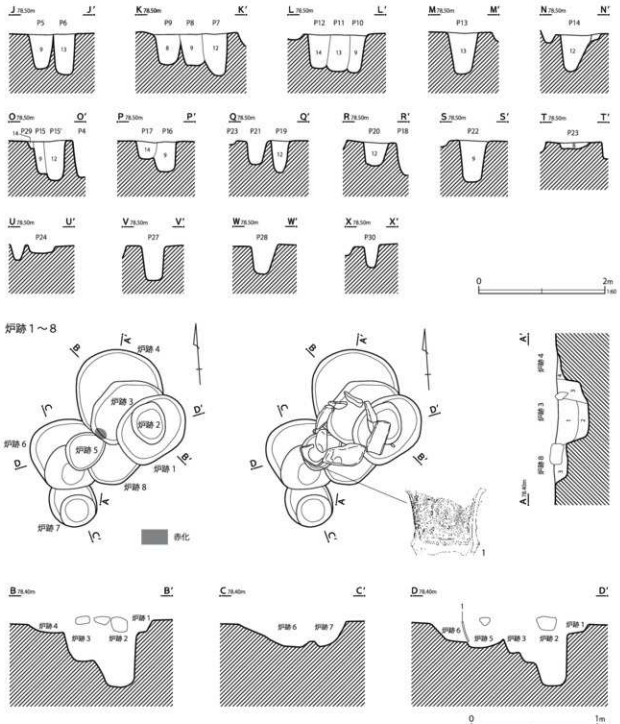
柱穴は合計32基が検出された。重複しているものが多く、それぞれの壁溝に伴うものを限定するのは大変困難であるが、覆土、重複状況、深さ及び配置から主柱穴と思われるものを想定した。

壁溝が３本あることから、少なくとも２回の建て替えがあり、それぞれの建て替えの段階に１、２回の柱の移動が観察される。

最終段階の住居跡の柱は、壁溝２を壊して掘られており、その位置関係で柱穴を探すとＰ１、２、３、４、31、６、７、８、11、12、13、14が候補となる。ピットの切り合い関係はほとんどないが、Ｐ７、８が重複し、Ｐ７の方が新しいことが判明している。したがって、同様な覆土と配置関係から、最新段階の住居跡の柱穴は、Ｐ１、３、31、７、12、13の６基と推定した。その前の段階としては、Ｐ２、４、６、８、11、14の６基が想定される。したがって、壁溝１に伴うであろう主柱は６本柱で、１回の建て替えを含む、２回の建築が行われたと判断される。



第358図　第22号住居跡（1）



S J 22
1　暗黒褐色土　ローム粒子・炭化物粒子多量
2　暗黄褐色土　ローム粒子・炭化物粒子多量　遺物が多く出土
3　暗黄褐色土　2層に近似するが、ローム粒子・炭化物粒子少量　しまり非常に良い
4　暗褐色土　ロームブロック少量　粘性強い（壁溝1）
5　暗黄褐色土　ローム粒子・ブロック少量（壁溝1）
6　暗褐色土　ロームブロック少量　しまり非常に良い　箱掘状を呈する最も古い壁溝（壁溝3）
7　暗褐色土　ローム粒子・炭化物粒子少量（壁溝2）

S J 22 ピット
8　暗黒褐色土　ローム粒子・炭化物粒子
9　暗褐色土　ローム粒子多量　ロームブロック少量
10　暗褐色土　9層よりローム粒子・ブロックの混入多い
11　暗褐色土　ローム粒子多量　ロームブロック少量
12　暗褐色土　ロームブロック少量
13　暗褐色土　ロームブロック粉どころまずローム粒子も少ない
14　暗黄褐色土　ローム粒子・ブロック多量　しまり非常に良い

S J 22 炉跡
1　暗褐色土　ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子多量
2　暗黄褐色土　焼土ブロック・炭化物粒子・ローム粒子多量　しまり良い　粘性弱い
3　暗黄褐色土　焼土ブロック少量　炭化物粒子微量
4　暗褐色土　ローム粒子・焼土粒子少量

第359図　第22号住居跡（2）

壁溝２に伴う柱穴は、壁溝の内側に存在するものであることから、Ｐ22、15’、６’、９、10、20の６基が抽出される。Ｐ10とＰ20の間隔が狭いことや、配置を考慮すると、Ｐ20を除くＰ22、15’、６’、９、10の５本主柱が想定される。

壁溝３に伴う柱穴は、壁溝３の内側にある柱穴で、Ｐ18、24、25、15、29、５、５’、16、17が抽出される。Ｐ18以外は、深浅はあるが２穴で重複するものが多く、建て替えを行っている可能性が高い。これらの柱穴を整理して、Ｐ24、15、５、16を中心とする４本主柱を壁溝３の住居跡と想定し、少なくとも１回の建て替えを含む、２回以上の建築が行われたと判断しておきたい。

主柱穴の深さは、Ｐ１＝56cm、Ｐ２＝62cm、Ｐ３＝65cm、Ｐ４＝49cm、Ｐ５＝54cm、Ｐ５’＝61cm、Ｐ６＝63cm、Ｐ６’＝67cm、Ｐ７＝66cm、Ｐ８＝49cm、Ｐ９＝47cm、Ｐ10＝60cm、Ｐ11＝58cm、Ｐ12＝56cm、Ｐ13＝66cm、Ｐ14＝58cm、Ｐ15＝51cm、Ｐ15’＝63cm、Ｐ16＝47cm、Ｐ22＝67cm、Ｐ24＝13cm、Ｐ31＝41cmである。

炉は中央部やや北寄りに位置し、長径1.46m、短径0.92m、深さ0.52mを測る北東方向に細長い不整楕円形を呈した、石囲炉である。炉は７個の礫で囲まれており、南東側の入り口方向に面する位置に柱状で平らな面を上にした礫が設置されていた。明らかに方向性を示すものと思われる。

石囲炉は最終住居跡の炉であり、精査の結果、８箇所の炉床を確認した。その内、炉跡５からは壊されているが埋設土器である勝坂式土器が出土した。

埋甕は検出されなかった。

以上、住居跡は炉が８回作り替えられており、壁溝と柱穴の関係から少なくとも５回以上の住み替えが把握された。炉内から勝坂式土器の埋甕が出土し、覆土から加曽利ＥⅠ式土器までが出土することを考慮すると、勝坂式新段階から終末期、または加曽利ＥⅠ式後半期にかけて、継続性は証明されないが、同じ場所で何回にもわたって建て替えを行い、住み続けていたことが理解される。

遺物は第362図１～第370図101の土器類、石器類が出土した。住居跡中央部の炉の直上あたりに多くの土器が出土しており、第363図９は底部を欠くが、炉の上に倒置の状態で出土した。

土器は１～67である。

23、24は炉から、25はＰ２、26、27はＰ３、28はＰ４、29はＰ４、30はＰ14、31、32はＰ22、33はＰ23からの出土である。

１は炉体土器である。胴部の約半分が現存する。刻み隆帯で胴部を区画し、区画内に隆帯の渦巻文を施文する構成で、余白に集合沈線や三叉文を施文する。勝坂式新段階のものと思われる。

２は口縁部が括れて強く外反する器形であり、屈曲する口縁部に口唇部から「U」字状の貼付文を垂下する。胴部地文は撚糸文Ｌである。

３はやや器形の把握が難しいが、口縁部の屈曲する多喜窪タイプの土器と思われ、口縁部に幅広低隆帯で渦巻文や三角形区画文を施文し、頸部との屈曲部には蛙口状の区画文を連結するモチーフ構成をとる。頸部と垂下する隆帯には「ハ」字状刻みを施す。地文には撚糸文Ｌを施文する。

第155表　第22号住居跡柱穴計測表（第358・359図）

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
Ｐ１	49.0	56.0	Ｐ２	49.0	62.0	Ｐ３	41.0	65.0	Ｐ４	64.0	49.0	Ｐ５	(23.0)	54.0
Ｐ５’	42.0	61.0	Ｐ６	(22.0)	63.0	Ｐ６’	32.0	67.0	Ｐ７	44.0	66.0	Ｐ８	59.0	49.0
Ｐ９	42.0	47.0	Ｐ10	41.0	60.0	Ｐ11	(32.0)	58.0	Ｐ12	38.0	56.0	Ｐ13	49.0	66.0
Ｐ14	48.0	58.0	Ｐ15	(19.0)	51.0	Ｐ15’	34.0	63.0	Ｐ16	42.0	47.0	Ｐ17	(27.0)	29.0
Ｐ18	40.0	69.0	Ｐ19	29.0	50.0	Ｐ20	43.0	38.0	Ｐ21	33.0	37.0	Ｐ22	47.0	67.0
Ｐ23	55.0	10.0	Ｐ24	43.0	13.0	Ｐ25	52.0	5.0	Ｐ26	38.0	10.0	Ｐ27	36.0	55.0
Ｐ28	40.0	48.0	Ｐ29	(9.0)	12.0	Ｐ30	27.0	35.0	Ｐ31	49.0	41.0	Ｐ32	28.0	12.0

4は頸部を押圧隆帯で区画し、胴部に垂下する沈線文を施文する。非常に器壁が薄く、曽利系の土器であろうか。

5は加曽利ＥⅠ式キャリパー形深鉢で、箱状把手の付く口縁部である。把手には円窓が空く。

6～11は加曽利ＥⅠ式キャリパー形深鉢形土器である。6は口縁部が大きく開く器形の大形の土器である。隆帯で細かな渦巻文を連結するモチーフを描き、頸部に4本沈線の小波状文を施文する。地文には撚糸文Ｌを施文する。

7は無文で幅広の口唇部が開きながら立ち、内湾する口縁部に2本隆帯の先端が渦を巻く渦巻文を横位連結するモチーフを描いている。地文は撚糸文Ｌの横走施文である。

8は内湾して開く口縁部に、2本隆帯の渦巻文を横位連結するモチーフを施文する。頸部を幅広い無文帯とし、口縁部の地文に撚糸文Ｌを施文する。

9は先端が渦を巻く2本隆帯の渦巻文を、弧状及び横「S」字状に連結し、一部剣先状となる部分がある。地文は単節ＲＬを、口縁部で横位施文、胴部で縦位施文する。

10は4単位の突起を有する平口縁で、突起下から派生する2本隆帯の渦巻文を弧状に繋げている。繋弧文となる前段階の構成と思われる。地文は撚糸文Ｌである。

11、12は深鉢の胴部で、11は頸部区画隆帯から垂下する渦巻文と、垂下する隆帯懸垂文を連結するモチーフを描いている。地文は撚糸文Ｌである。12は地文の上に蛇行する隆帯のみ垂下するものである。地文は撚糸文Ｌである。

13は胴下半部を欠損するが、頸部に幅広の無文帯を設定するキャリパー形深鉢である。口唇部に双頭状の突起を付け、口縁部に隆帯で渦巻文を含む重弧文を施文する、曽利式系の土器である。頸部は地文の撚糸文Ｌを磨り消して、無文部を作り出している。

14～19は底部で、14は単節ＲＬ縄文の縦位施文、他は撚糸文Ｌを施文する。

20～22は浅鉢である。20は頸部に眼鏡状把手を付け、胴部文様帯に楕円区画文を配し、沈線を充填する。21は頸部で括れて短い無文の口縁部が外反する、浅鉢である。22は口縁部が内湾して開く器形で、波状部にハート形の沈線文を施文する。

破片では、34～37は角押文や三角押文、キャタピラ文を施文する勝坂式古段階の土器群である。38は幅広の爪形文を施文する勝坂式中段階の藤内式段階であろう。

39～49は勝坂式新段階のもので、39、42、46などは終末期段階のものであろう。

50～61は加曽利Ｅ式キャリパー形深鉢形土器の口縁部破片で、加曽利ＥⅠ式前半段階の土器群である。50は横「S」字状文が左右に連結しておらず、古い様相を有する。51～55は「S」字状文が大きな渦を巻くようになり、左右の連結が明らかになるもので、やや新しい様相が見られる。58は2本隆帯の先端部が渦を巻くもので、弧状に連結されることかさらに新しい様相と言えよう。いずれも地文に撚糸文を施文している。

62、63は幅狭の口縁部の下端が突出し頸部で括れる土器であり、中峠式系の要素であろうか。

64は平行沈線で胴部を区画して、波状沈線を施文し、地文に単節ＲＬ縄文を横位施文することから、勝坂式土器と思われる。

65は垂下沈線を全面に施文し、半隆帯状を呈する。曽利式系の要素と思われる。

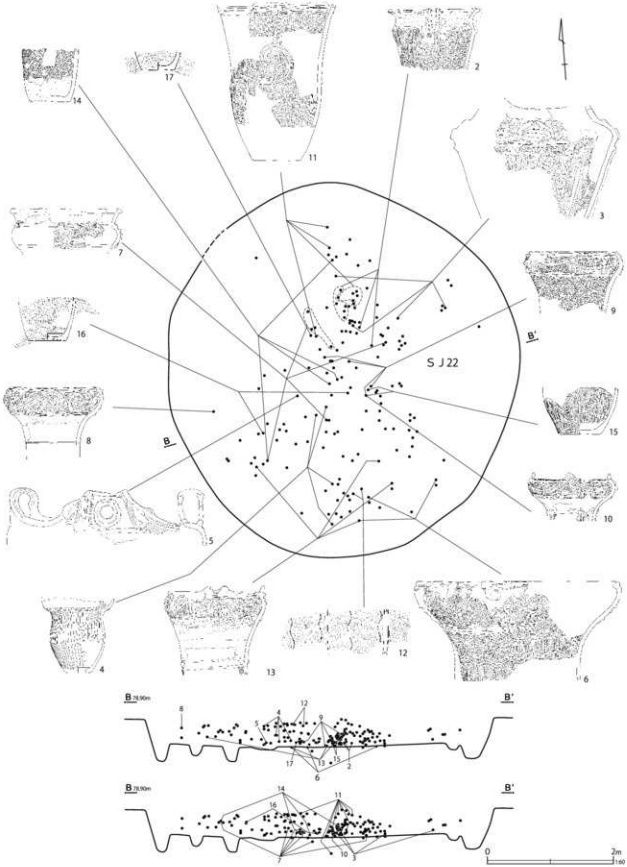
66、67は幅広の低隆帯でモチーフを描く浅鉢である。

土製品は、ミニチュア、耳飾り、土製円盤が出土した。68はミニチュア土器の口縁部で、小さな壷形を呈する。

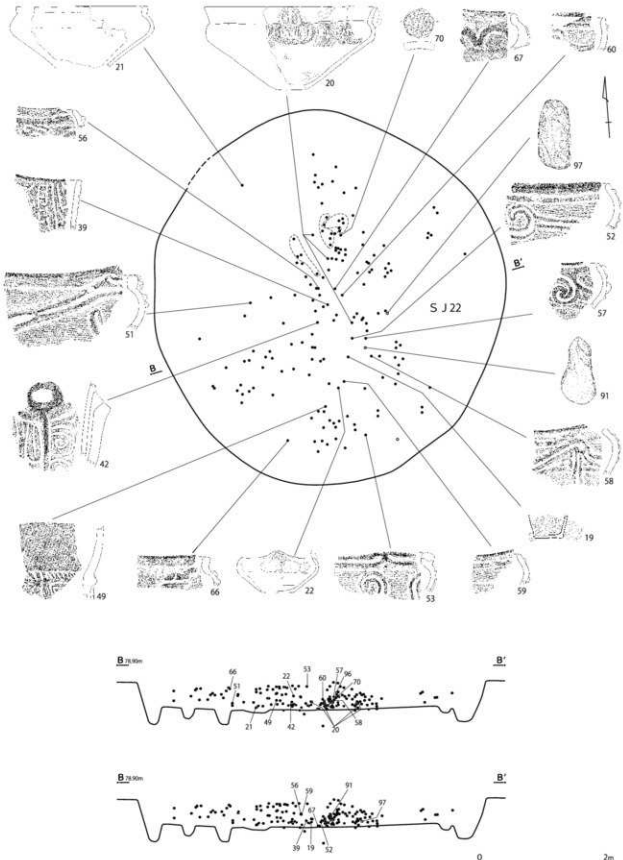
69は耳飾りで、完形品である。鼓形を呈する。

70～74は土器片を利用した、土製円盤である。

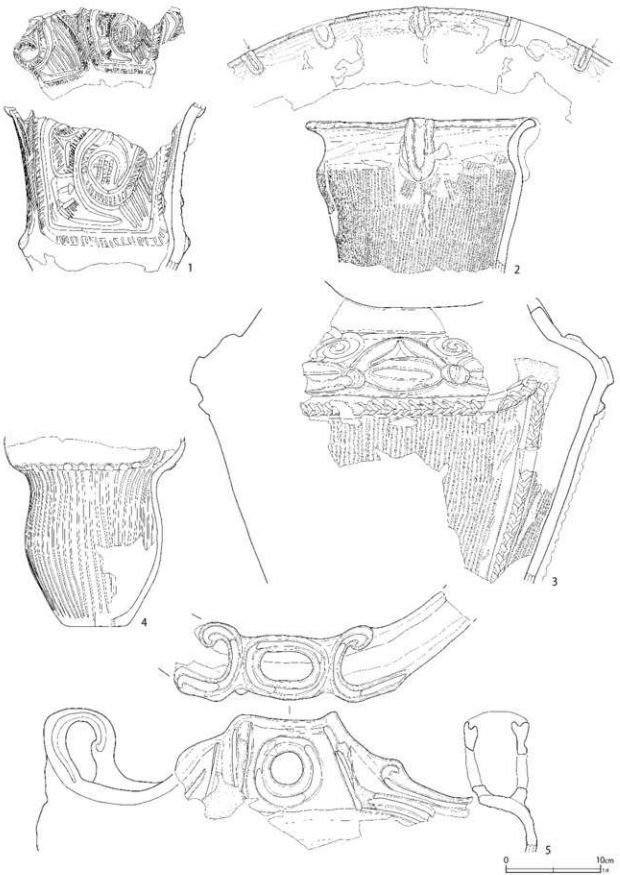
石器は75～101が出土した。



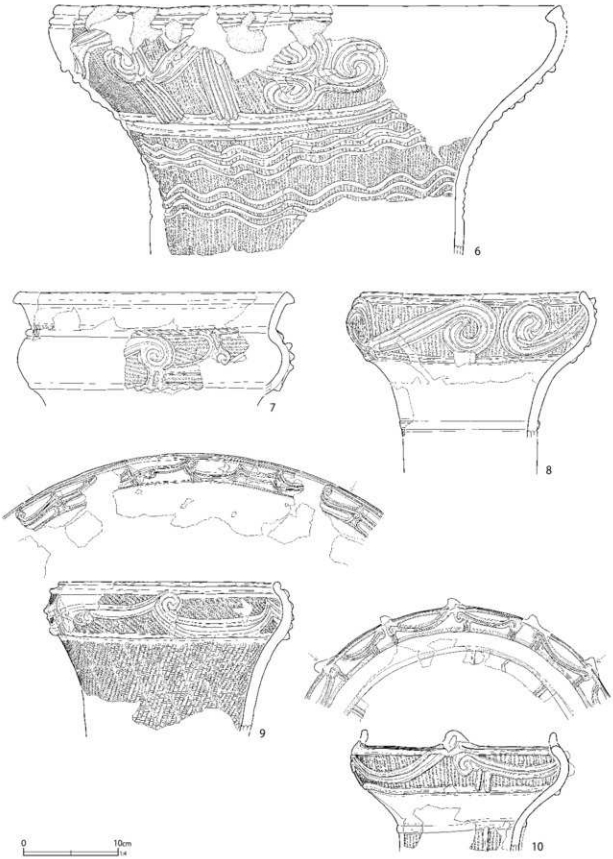
第360図　第22号住居跡遺物出土状況（1）



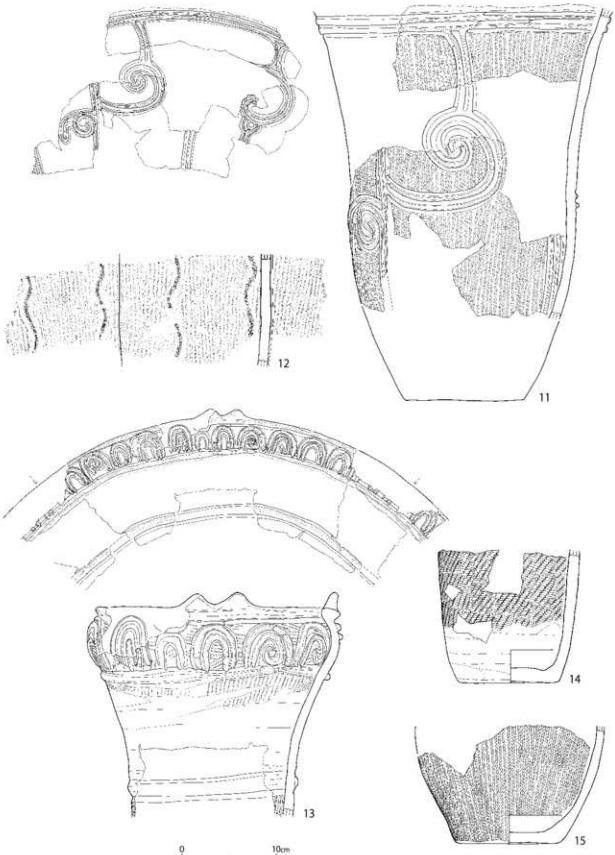
第361図　第22号住居跡遺物出土状況（2）



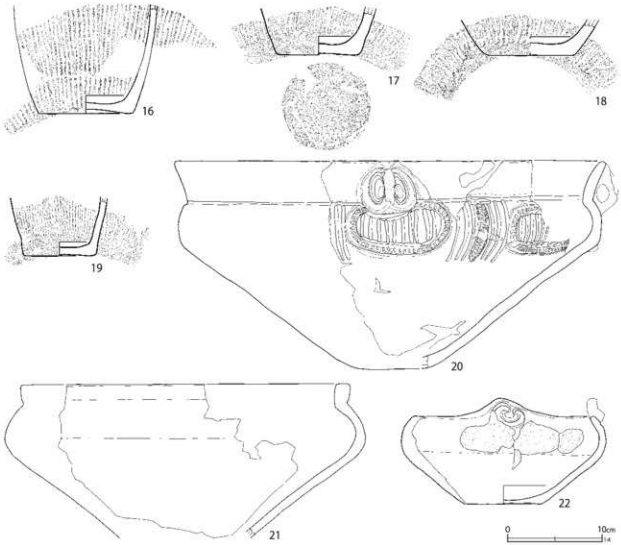
第362図　第22号住居跡出土遺物（1）



第363図　第22号住居跡出土遺物（2）



第364図　第22号住居跡出土遺物（3）

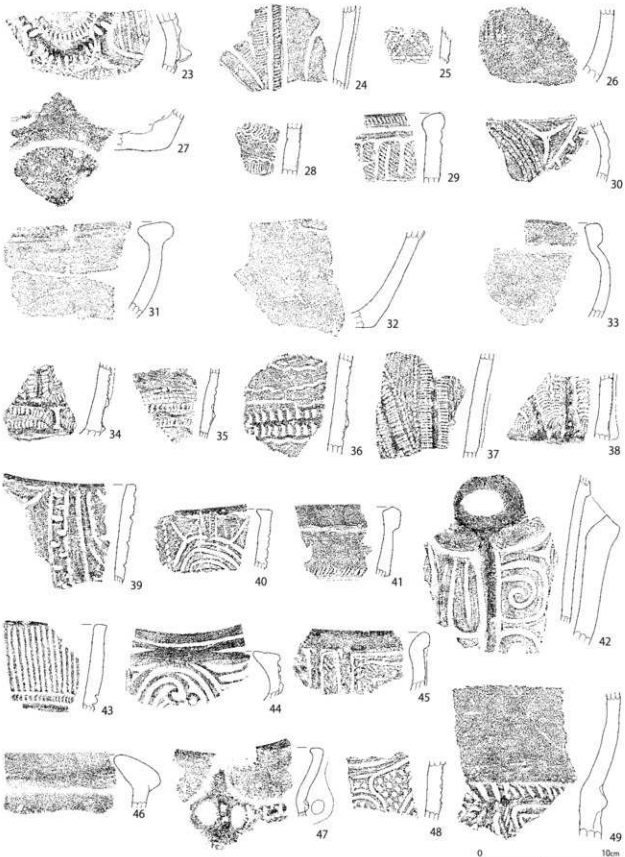


第365図　第22号住居跡出土遺物（4）

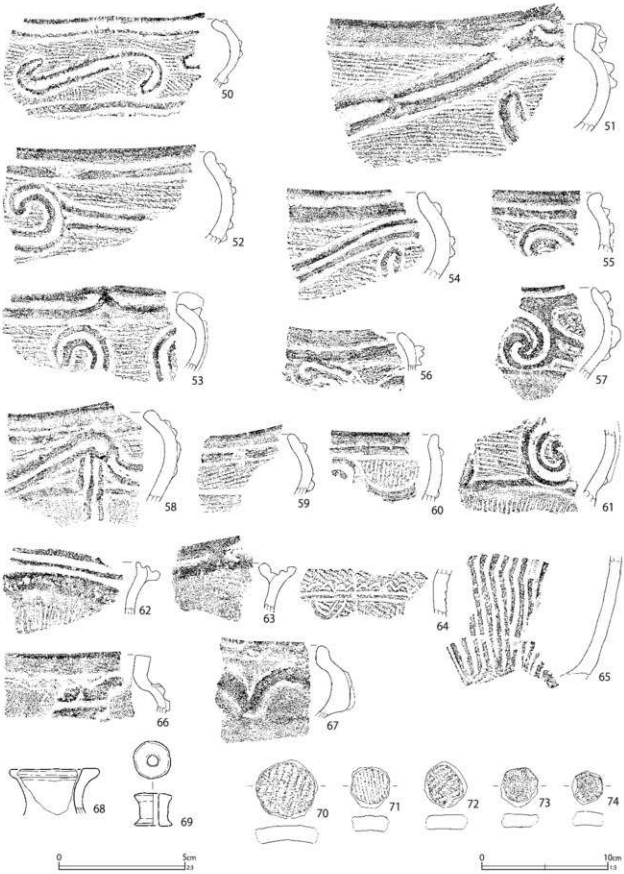
第156表　第22号住居跡出土復元土器観察表（第362～365図）

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備　考
362-1	[17.8]	-	20.8	-	40%
2	[16.5]	24.2	-	-	40%
3	[30.2]	(29.2)	(44.6)	-	30%
4	[20.0]	-	19.2	6.8	70%
5	[14.6]	-	-	-	10%
363-6	[26.5]	(52.8)	(54.4)	-	30%
7	[10.7]	(28.2)	-	-	20%
8	[15.3]	(23.4)	-	-	30%
9	[15.6]	23.2	(25.8)	-	50%
10	[11.5]	20.4	-	-	50%
364-11	[32.7]	-	(31.8)	-	40%
364-12	[11.8]	-	16.0	-	30%
13	[23.8]	25.8	-	-	60%
14	[14.1]	-	-	10.5	40%
15	[12.5]	-	-	10.7	20%
365-16	[11.4]	-	15.2	10.0	20%
17	[5.0]	-	12.4	8.9	10%
18	[3.9]	-	-	9.4	10%
19	[6.2]	-	10.4	7.8	10%
20	[21.9]	(45.4)	-	-	30%
21	[16.3]	(34.6)	-	-	20%
22	11.2	19.1	-	8.2	60%

75～77は石鏃である。このうち、76が先端を、77が脚部を欠いている。77は正面左脚部が根元から、右脚部は先端が欠損している。78は石鏃の未成品である。平面形が崩れた三角形状を呈して

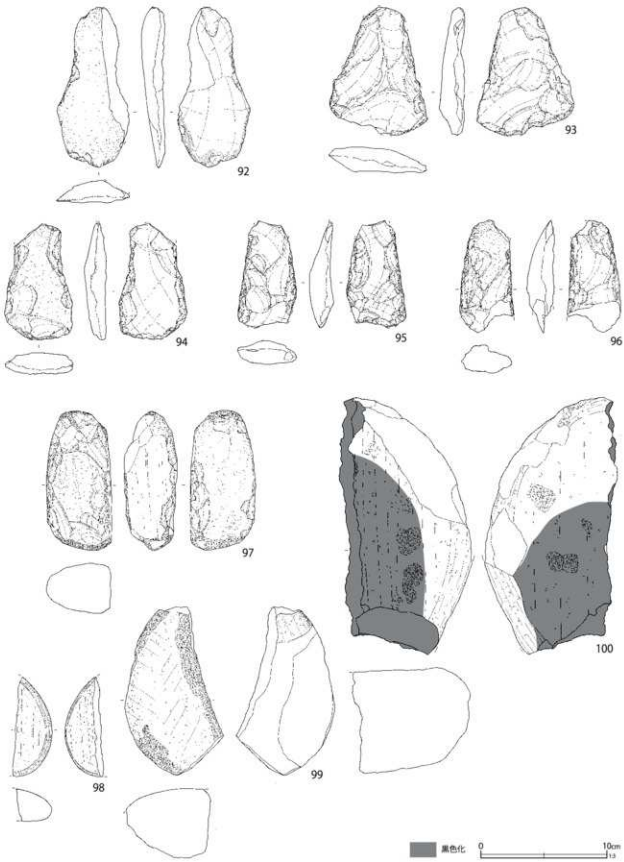


第366図　第22号住居跡出土遺物（5）

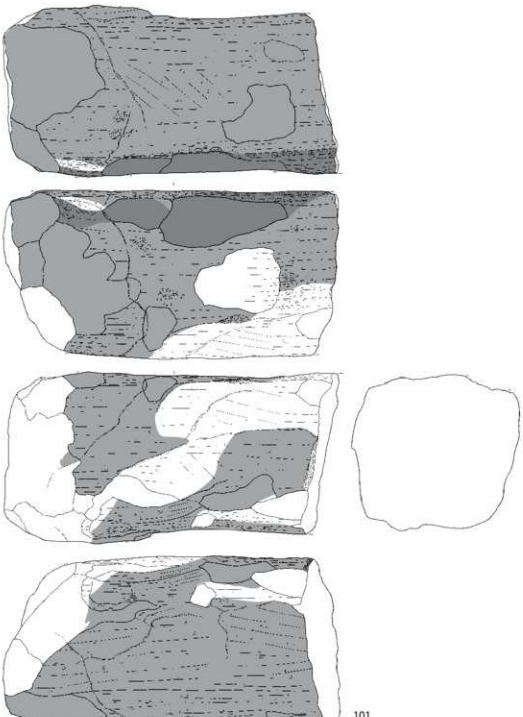


第367図　第22号住居跡出土遺物（6）

第368図　第22号住居跡出土遺物（7）



第369図　第22号住居跡出土遺物（8）



第370図　第22号住居跡出土遺物（9）

第157表　第22号住居跡出土石器観察表（第368 ～ 370図）

番　号	器　種	分類	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
368 － 75	石鏃	Ⅰ2①	チャート	1.7	1.6	0.4	0.7	
76	石鏃	Ⅰ2②	安山岩	[2.0]	1.4	0.3	0.8	
77	石鏃	Ⅰ2②	チャート	[2.5]	[1.7]	0.4	1.3	
78	石鏃	Ⅲ①	チャート	2.9	2.4	0.7	4.3	
79	石匙	Ⅰ2①	黒曜石	4.5	1.9	1.3	6.3	
80	スクレイパー	Ⅱ2①	チャート	2.5	2.6	0.6	3.8	
81	大形粗製石匙	Ⅰ1①イ	ホルンフェルス	4.9	5.7	0.9	21.8	
82	磨製石斧	Ⅰ②イ	緑色岩	[10.2]	[4.9]	3.9	250.0	
83	磨製石斧	Ⅰ②イ	緑色岩	[10.6]	5.3	3.7	300.2	
84	磨製石斧	Ⅴ②ア	砂岩	[4.0]	[4.6]	[2.1]	27.5	
85	磨製石斧	Ⅱ2①イ	結晶片岩	8.8	2.3	1.0	22.4	
86	打製石斧	Ⅱ2②イ	頁岩	[11.1]	4.6	1.1	69.4	
87	打製石斧	Ⅱ2①イ	砂岩	11.5	4.5	1.2	73.8	
88	打製石斧	Ⅱ2②イ	チャート	[10.1]	3.6	2.0	79.3	
89	打製石斧	Ⅱ2②イ	頁岩	12.0	4.7	1.2	73.0	
90	打製石斧	Ⅱ2②イ	頁岩	[10.9]	3.9	1.5	59.8	
91	打製石斧	Ⅲ2①イ	砂岩	10.7	5.5	1.3	73.8	
369 － 92	打製石斧	Ⅲ2②イ	砂岩	12.7	[5.7]	1.8	105.3	
93	打製石斧	Ⅲ2②イ	ホルンフェルス	[10.1]	[7.7]	2.0	136.4	
94	打製石斧	Ⅲ2②イ	砂岩	[9.3]	5.4	1.7	100.5	
95	打製石斧	Ⅲ2②イ	頁岩	[8.5]	4.7	2.0	70.7	
96	打製石斧	Ⅲ2②ア	頁岩	[8.9]	[4.3]	2.2	80.6	
97	敲石	Ⅱ3①イ	砂岩	11.0	5.2	4.2	340.5	
98	磨石	Ⅱ1②ア	砂岩	[7.9]	[3.1]	2.6	71.0	
99	磨石	Ⅱ1-3②イ	閃緑岩	[13.4]	[7.9]	[6.0]	653.9	敲石として再利用
100	石皿	Ⅳ②ア	安山岩	[20.4]	[10.6]	9.2	2437.9	表裏面一部黒色化
370 － 101	石棒	②ア	安山岩	[26.7]	13.7	13.5	7500.0	表裏面一部赤色・黒色化

いる。両側縁及び基部に加工が施されており、先端と脚部の作出が認められることから、未成品と判断した。

79は縦型の石匙である。裏面に主要剥離面が残り、縦長剥片を素材としていると思われる。身部の両側縁には微細な剥離が見られる。

80は円形を呈するスクレイパーである。末端に両面交互剥離によって作出された刃部を有する。

81は石匙であるが、79とは異なり、粗粒の石材を素材に用いた大形粗製石匙である。

82、83は乳棒状磨製石斧の破片で、82が基部片、83が刃部片である。84は磨製石斧の刃部片である。85は小形磨製石斧の未成品である。全体的に研磨が粗く、製作時の剥離を観察できることから未成品と判断した。

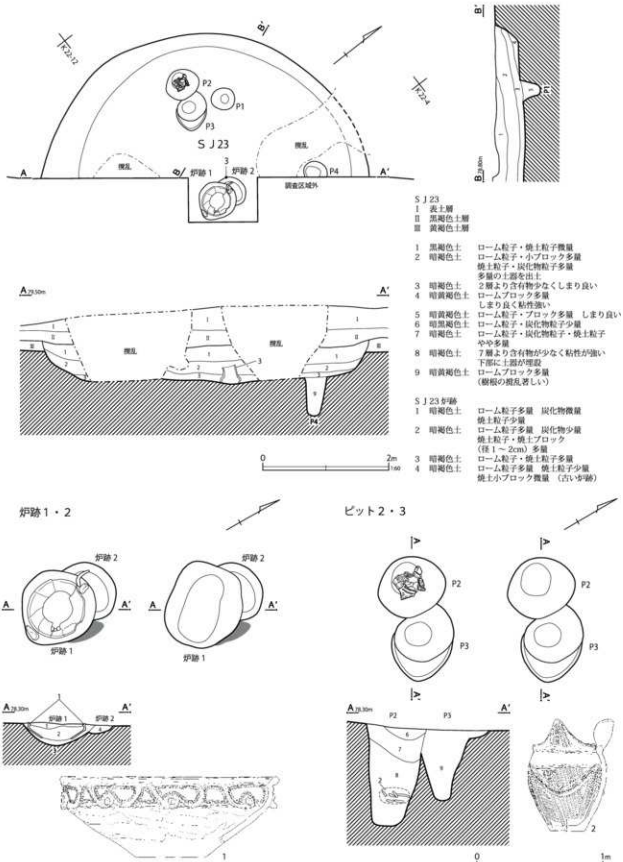
86 ～ 96は打製石斧である。86 ～ 90は短冊形を呈する。このうち、86が両刃、87が片刃である。91 ～ 96が撥形を呈し、刃部は91、92が片刃、93 ～ 95が両刃である。

97は敲石で、上下両端だけでなく、両側面も作業面として使用されている。

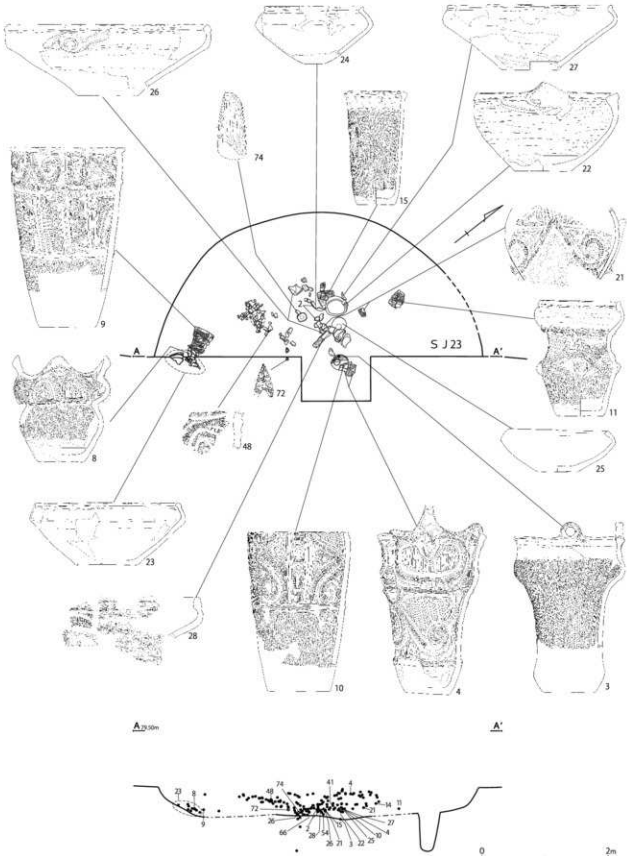
98、99はともに磨石の破片である。98は欠損後、縁辺を作業面として敲石に再利用している。

100は石皿の破片で、正面右側縁が丁寧に研磨されている。被熱により全体的に赤色化し、破損部を含む一部は黒色化している。

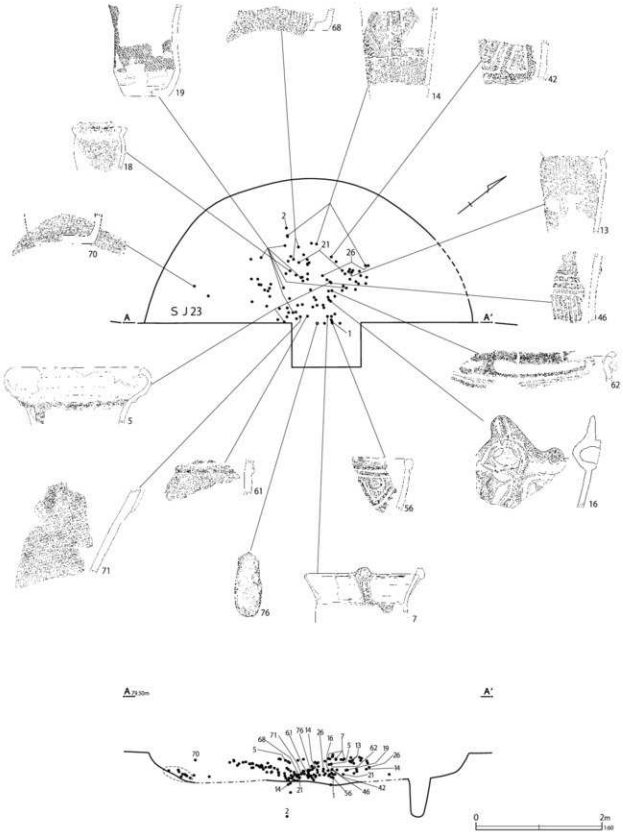
101は大形石棒の破片で、被熱の影響が顕著に認められる。



第371図　第23号住居跡



第372図　第23号住居跡遺物出土状況（1）



第373図　第23号住居跡遺物出土状況（2）

第23号住居跡（第371図～第381図）

Ｋ－22区に位置する。住居跡の南東側の約半分が調査区域外に当たる。北壁の一部から、住居跡の覆土内にかけて撹乱を受けている。撹乱は床面下までに及んでいる。

住居跡の規模は長径5.20m、短径3.00m以上、深さ0.50mで、南北にやや細長い円形を呈するものと思われる。床面は皿状に、緩やかに立ち上がる。

壁溝は検出されなかった。

柱穴は４基検出された。Ｐ２からは、底近くから第374図２が割れているもののほぼ完形で出土した。

Ｐ２、３、４が主柱穴と思われ、４本もしくは５本主柱の住居跡と思われる。

主柱穴の深さは、Ｐ１＝30㎝、Ｐ２＝78㎝、Ｐ３＝55㎝、Ｐ４＝60㎝である。

炉跡はほぼ中央部で、２基検出された。浅鉢を埋設する新しい埋甕炉が、地床炉を壊して作られていた。炉体土器に使用された浅鉢は、底が抜かれている。

埋甕は検出されなかった。

住居跡は炉が２回作られており、柱穴も重複することから、建て替えられていることは明らかである。新しい住居跡は炉体土器から、勝坂式中段階でもやや新しい段階から新段階にかけての所産と判断される。古い段階の住居跡はそれ以前の時期となる。

遺物は第374図１～第381図80の土器類、石器類が出土した。

遺物はいわゆる吹上パターン状態で、炉周辺の覆土の薄い部分から集中して出土した。また、ほぼ床面から出土したものもあり、第374図３は炉に接する位置で、床面に倒置された状況で出土した。通常の遺物の出土状態ではなく、意味のあるような非常に特殊な出土状況である。

29～32は炉の上部から、33はＰ１、34～37はＰ２、38、39はＰ４からの出土である。

１は炉体土器で、底部を抜いている。内湾して開く口縁部に、隆帯の「α」状の渦巻文を波状に連結するモチーフを描いている。渦巻文は８単位構成である。隆帯脇には２列の結節沈線を施文している。阿玉台Ⅲ式並行期に位置付けられよう。

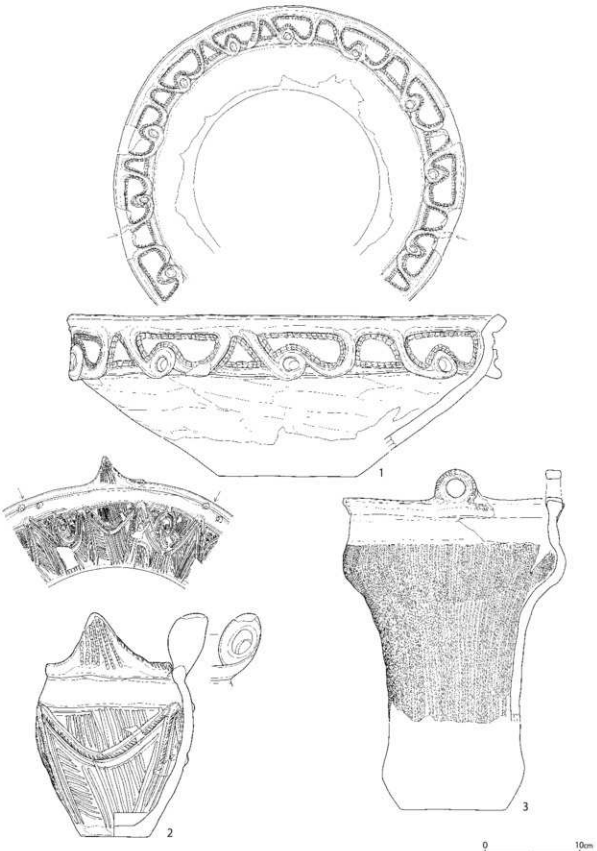
２はＰ２出土で、大きな耳状の把手を1箇所に付ける樽形の土器である。耳状把手部にはペン先状の集合結節沈線を施文しており、隆帯の波状文で胴部を３単位に区画している。把手下の波状部には渦巻文を施文せず、他の２箇所の波底部に巻き上がる渦巻文を施文する。余白には沈線文や三叉文等を施文するが、１箇所のみ集合結節沈線を充填している。

３は炉脇に倒置されていた土器であるが、環状把手は現存していた。無文の幅広口唇部が立ち、口縁部が膨れる器形で、地文に撚糸文Ｌを施文する。底部を欠損する。

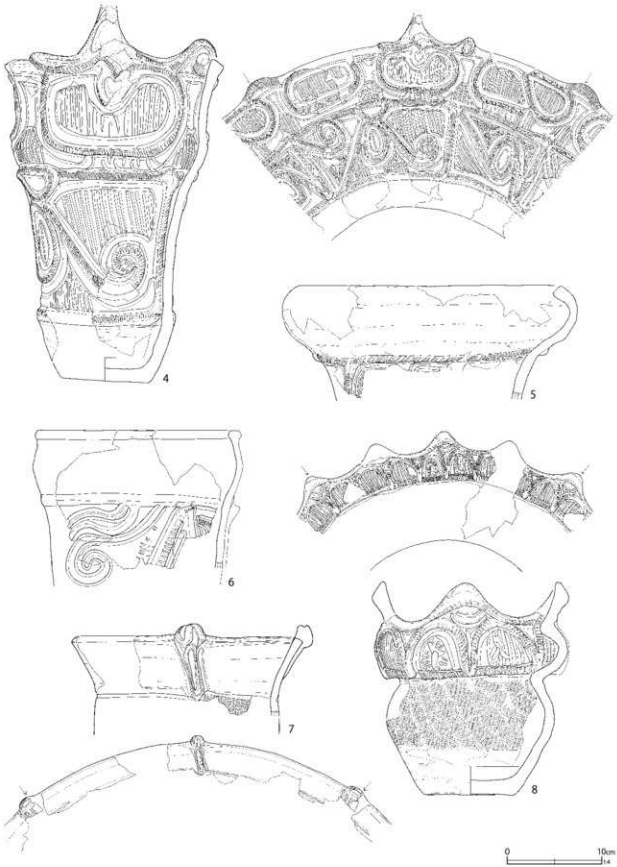
４は炉の直上から出土しており、底部と把手の一部を欠損する。口縁部と胴部で２段に括れる器形で、口唇部には大きな把手とそれに繋がる渦巻文が付き、反対側の口唇部には山形の低い突起が付く。胴上半部には隆帯の大形楕円文を３単位に施文するが、１箇所は「Ｓ」字状を呈し、これを２単位と見ると、４単位の単位文となる。しかし、独立した単位文は３単位であることから、ここにも対称性を崩す構成を看取できる。胴部は垂下する隆帯が２本であることから、大きくは２単位に分割されている。しかし、区画内の円形文を連結するモチーフは、大区画の中では２単位の構成を有するようであり、大小２単位区画内に、３単位のモチーフを構成させている。

５、６は内湾する無文の口縁部が開く深鉢で、胴部に刻み隆帯で文様を描くものである。

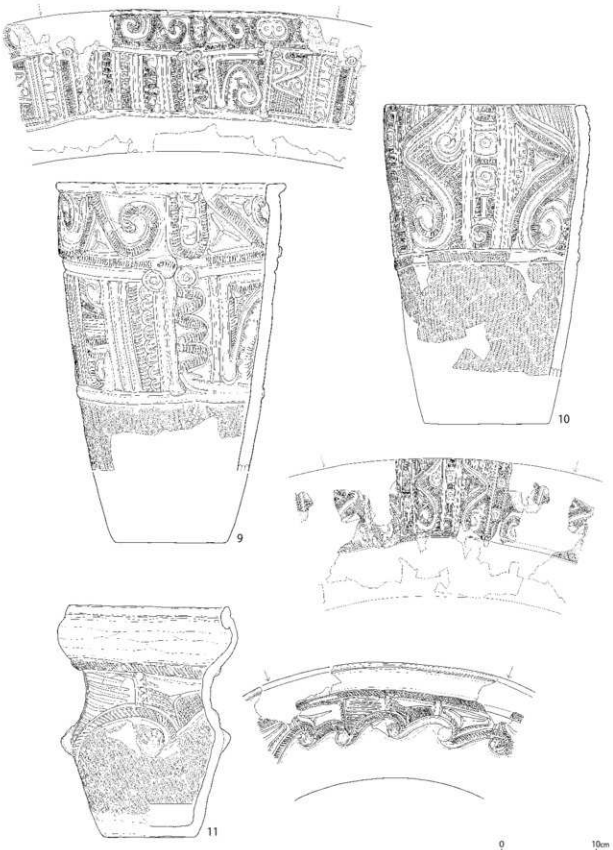
７は無文の口縁部が開く器形で、口唇部に蛇行する隆帯の把手を付け、隆帯を垂下させて２分割する。



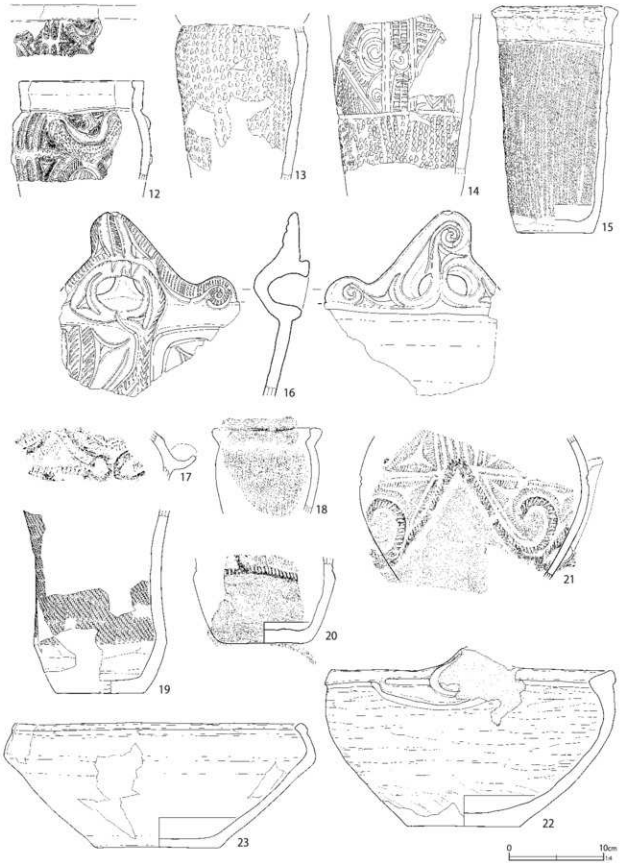
第374図　第23号住居跡出土遺物（1）



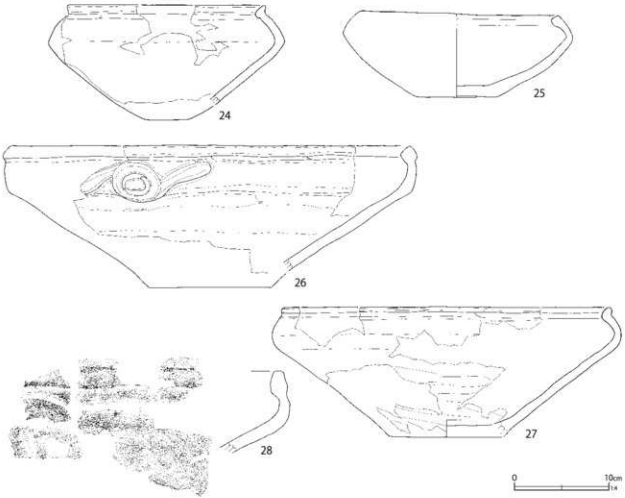
第375図　第23号住居跡出土遺物（2）



第376図　第23号住居跡出土遺物（3）



第377図　第23号住居跡出土遺物（4）



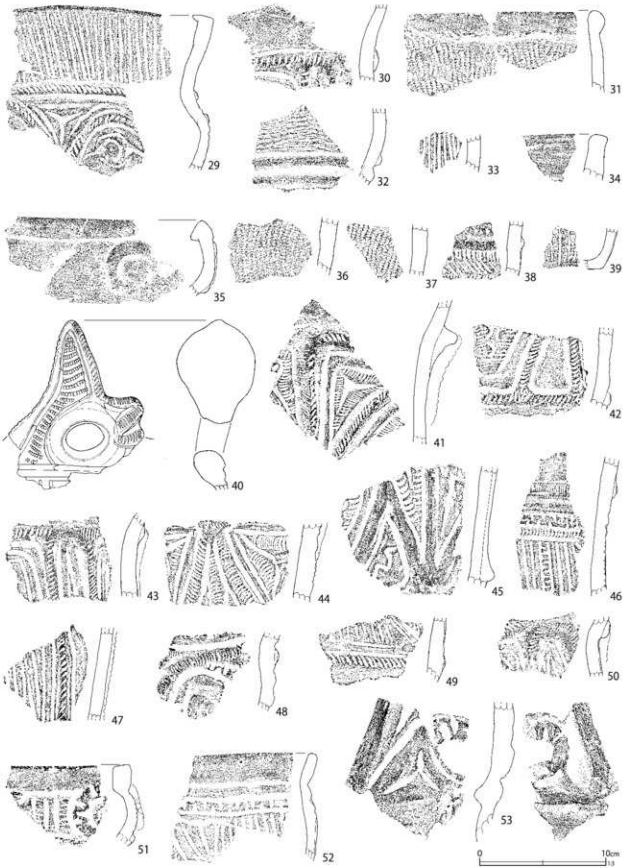
第378図　第23号住居跡出土遺物（5）

第158表　第23号住居跡柱穴計測表（第371図）

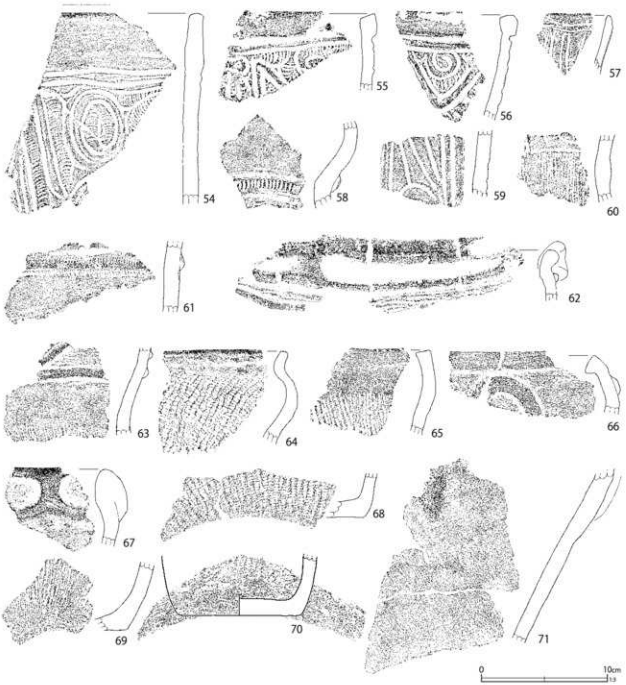
ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P 1	35.0	30.0	P 2	55.0	78.0	P 3	(60.0)	55.0	P 4	35.0	60.0			

第159表　第23号住居跡出土復元土器観察表（第374～378図）

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
374-1	[14.3]	46.2	－	－	80%
2	[23.0]	14.3	－	7.2	完形
3	[26.8]	(23.4)	－	－	70%
375-4	39.5	23.2	－	9.4	80%
5	[12.0]	(27.6)	－	－	40%
6	[14.8]	(21.8)	－	－	20%
7	[9.6]	24.6	－	－	20%
8	22.4	18.5	－	9.6	70%
376-9	[30.4]	24.2	－	－	70%
10	[23.6]	(21.2)	－	－	70%
11	24.5	16.8	－	9.8	80%
377-12	[10.3]	(13.2)	－	－	30%
13	[15.5]	－	[14.1]	－	30%
14	[16.7]	－	[16.2]	－	20%
377-15	23.9	13.4	－	8.0	完形
16	[19.5]	－	－	－	20%
17	－	－	－	－	10%
18	[9.1]	(11.6)	－	－	10%
19	[19.4]	－	(15.6)	(9.3)	30%
20	[9.0]	－	－	8.8	20%
21	[15.6]	－	24.8	－	20%
22	18.6	29.4	－	(11.6)	90%
23	[13.2]	(30.2)	－	13.1	40%
378-24	[10.4]	(20.9)	(24.9)	－	40%
25	8.9	20.8	－	8.2	完形
26	[13.5]	(41.8)	－	－	40%
27	[13.8]	(34.6)	－	－	30%
28	－	－	－	－	20%



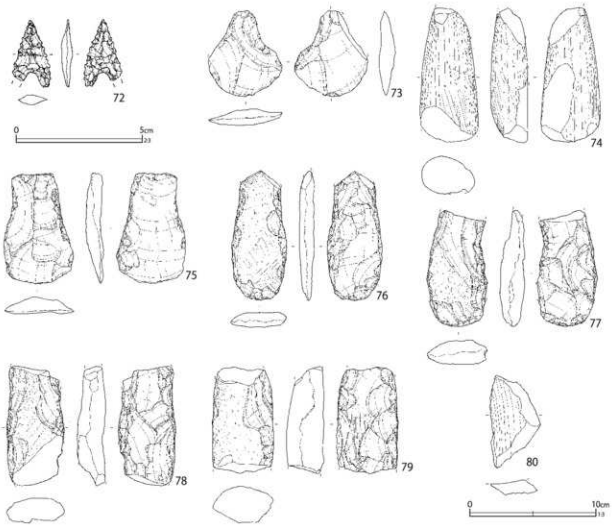
第379図　第23号住居跡出土遺物（6）



第380図　第23号住居跡出土遺物（７）

８は４単位の波状口縁を呈し、頸部で括れ、胴部が大きく張る器形を呈する。波頂部下の口縁部には波頂部を中心にして、上向き半円状の区画を８単位に連ねる構成をとる。区画内には縦位沈線文を施文するが、実測図正面のみ三叉文を施文し、左側区画内に結節沈線を爪形文の代わりに施文する。この三叉文が目の表現のように見られ、全体形からフクロウを表現しているように見える。フクロウ土器とでも呼んでおきたい。地文には０段多条ＲＬの縦走縄文を施文する。

９は円筒形土器で、口縁部と胴部の文様帯で構成される。口縁部には楕円区画、右下がりの渦巻文、縦形の楕円区画、左傾右傾して反対巻きに巻き上がる渦巻文が組み合わさるが、全体構成は不明である。胴部は一見細かく縦位区画するようであるが、垂下する縦位隆帯で区画する３単位構成



第381図　第23号住居跡出土遺物（8）

第160表　第23号住居跡出土石器観察表（第381図）

番　号	器　種	分類	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
381 － 72	石鏃	Ⅰ2②	チャート	2.7	[1.6]	0.4	1.1	
73	大形粗製石匙	Ⅰ1②イ	ホルンフェルス	6.8	5.8	1.3	42.2	
74	磨製石斧	Ⅰ②イ	砂岩	[10.7]	4.7	[3.0]	227.4	
75	打製石斧	Ⅲ2①イ	頁岩	8.8	5.5	1.4	55.6	
76	打製石斧	Ⅲ2②ア	ホルンフェルス	[10.3]	4.4	1.2	71.7	
77	打製石斧	Ⅱ2②イ	ホルンフェルス	[9.2]	[4.8]	2.0	82.2	
78	打製石斧	Ⅱ2②イ	頁岩	[9.5]	4.5	2.3	123.6	
79	打製石斧	Ⅴ②イ	砂岩	[8.5]	4.9	3.0	170.4	
80	石皿	Ⅳ②イ	緑泥片岩	[7.4]	[4.0]	[1.5]	33.6	

であることが分かる。垂下隆帯の上端部には対の円形貼付文を施文しており、単位性は明らかであろう。胴部は約半周位を占める広い大区画１単位と、小区画２単位で構成されており、小区画には異なるモチーフが、大区画には縦位区画線を中心にした集合文を描いている。胴部下半の地文には０段多条ＲＬの縦走縄文を施文する。

10も円筒形土器で、文様帯は１帯構成である。文様帯は幅狭な縦位区画文３帯で、大１、小２の区画を施している。小区画２単位と大区画１単位の幅はほぼ同等で、９の胴部構成と酷似している。10の小区画は左右対称形の渦巻文を構成し

ており、9の口縁部の左右対称形の渦巻文と同じモチーフとなっている。胴部の地文は、0段多条RLの縦走縄文と思われる。

11は頸部で強く括れ、無文の口縁部が開き、胴部が張り出す器形で、胴部に先端部が渦を巻く隆帯を入り組ませながら4単位を連結するモチーフを描いている。一見すると加曽利E式へと続く渦巻文のようであるが、背割隆帯や2本隆帯ではないこと、頸部と連携されていて独立していないことなどから、いわゆるサンショウウオ文などの抽象文からの変化と捉えることも可能であろう。頸部との区画文内には3箇所に三叉文、1箇所に集合沈線文を施文し、三叉文施文区画でも1箇所は結節沈線を施文するなどの変化を付けている。胴部の地文は0段多条RLの縦走縄文である。

12は無文の口縁部が立ち、胴部が張る器形を呈する。胴部には低平隆帯で上下対弧状のモチーフ、ゾウリムシ状文を並べるモチーフを施文している。対弧文には細かな刺突文を施しており、余白には非常に細かな爪形文を伴う三叉文を施文している。

13も頸部で括れ胴部が張る器形であるが、前面に押引状の三角刺突文を施文する。

14は円筒形土器であるが、胴部に13と同様な押引状の三角刺突文を施文している。上半部は幅狭な縦位区画帯で分割し、鋸歯状区画、渦巻文などを施文する。

15は無文の口縁部を区画し、地文に撚糸文Lを施文するのみの円筒形土器である。

16は外面円窓、内面眼鏡状を呈する把手が付き、向かって右側に垂下する蛇体を表現している。

17は口縁部の隆帯の三角形区画に爪形文を施文する。18は無文の短い口縁部が外反して、膨れる胴部に撚糸文Rを施文する。

19、20は張り出す底部で、19は単節RL縄文を横位施文する。20は刻み隆帯で底部を区画する。21は球形状を呈する胴部に左右対称に巻く隆帯渦巻文を施文する。余白には爪形文を伴う三叉文を施文する。

22～28は浅鉢で、22は鉢状を呈し、口縁部に把手を有する。他はいずれも胴部が屈曲するもので、無文の口縁部が外反するものはない。26は胴部に低隆帯の渦巻文を施文する。

40～53は勝坂式中段階から新段階にかけてのキャリパー形深鉢の土器群である。40は円窓を有する山形把手の右側に蛇体を表現すると思われる蛇行垂下隆帯を配している。把手には集合結節沈線を施文する。

41～50、58は胴部破片で、刻み隆帯で区画文を施し、爪形文を伴う三叉文等を施文する。46は区画並行沈線や充填文要素に、交互刺突を施している。

51～53はより簡素化したモチーフを施文する新段階の土器である。51は隆帯の円形文に交互刺突を施しており、52は口縁部区画の並行沈線に交互刺突を施文している。

54～57、59～61は円筒形土器で、54は細かな爪形文を伴う三叉文を施文しており、61の区画隆帯にも細かな刻みを施している。59は簡素化した三叉文等を施文する終末段階の土器であろう。

62、63は加曽利E式土器で、地文に撚糸文を施文するEⅠ式段階の深鉢である。

64、65は地文のみ施文する深鉢で、64は膨らむ口縁部に横位の単節LR縄文、65は無文の口縁部下に撚糸文Rを施文する。

66は口縁部が内湾する浅鉢、67は鉢形の浅鉢であろうか。71は低隆帯が垂下する浅鉢の胴部である。

68～70は底部で、68、70は0段多条RLの縦走縄文、69は撚糸文Lを施文する。

72～80は出土した石器である。

72は鋸歯状の石鏃で、正面左脚部を欠いている。

73は粗粒の石材を利用した大形粗製石匙である。

74は乳棒状の磨製石斧で、刃部と基部を欠く。

75～79は打製石斧である。77～79は撥形を

呈し、いずれも刃部が両刃である。75、76は短冊形の打製石斧で、基部と刃部を欠いている。

80は石皿の破片である。

第51号住居跡（第382図～第386図）

G・H－21・22区に位置する。今回の調査区の最北東端に位置する。芦苅場遺跡の外輪に位置する住居跡である。

住居跡の平面形は六角形を呈し、規模は長径6.70m、短径6.30m、深さ0.45mである。

壁溝は３本検出された。一番外側で最も新しいものを壁溝１、その内側に巡るものを壁溝２、さらに部分的ではあるが柱穴間を直線的に結ぶものを壁溝３とした。

柱穴は15基検出された。柱穴は住居跡の六角形の頂部付近に重複して存在しており、壁溝などとの関係から、住居跡の建て替えは明らかである。

Ｐ14だけ他と異なる覆土で、本遺構に伴わない可能性もある。

壁溝１に対応する最も新しい柱穴は、Ｐ１、４、６、７、８、10の６基と思われ、平面形にも合致した配置である。

壁溝２に対応する柱穴は、Ｐ２、５、15、７、９、11の６基であると考えられる。Ｐ７は重複関係が掴めなかったが、重複使用されたものと仮定する。壁溝２の内側に納まる配置である。

壁溝３は壁溝としたが、伴うと思われる柱穴を抽出できず、壁溝1に伴う柱穴を途切れながらも直線的に繋いでいることから、間仕切り的な性格を有する溝と判断した。

主柱穴の深さは、Ｐ１＝69cm、Ｐ２＝57cm、Ｐ４＝77cm、Ｐ５＝75cm、Ｐ６＝82cm、Ｐ７＝82cm、Ｐ８＝83cm、Ｐ９＝70cm、Ｐ10＝72cm、Ｐ11＝67cm、Ｐ15=63cmである。

炉は地床炉で、住居跡中央部の北寄りに位置し、長径90cm、短径78cm、深さ27cmを測る北西方向に長い隅丸長方形を呈する。炉には２箇所の窪みがあり、２回の使用が考えられる。また、中央部の窪みは径45cm、深さ20cm程であり、炉体土器が抜き取られた可能性も考えられる。

埋甕は検出されなかった。

壁溝及び炉から、本住居跡は１回の建て替えが行われており、２軒の住居跡が重なっていると判断される。また、大形の住居跡の割には出土遺物が少なく、構築時期を決定する遺物が出土していないため不詳であるが、新しい住居跡は平面形が六角形で６本主柱であることから、加曽利ＥⅠ式前半期の所産であると推定される。

遺物は第384図１～第386図49の土器類、石器類が出土した。

土器は１～37である。

２、３はＰ１、４はＰ２、５はＰ４、６はＰ５、７、８はＰ６、９、10はＰ７、11はＰ９、12はＰ10、13～15は炉内からの出土である。

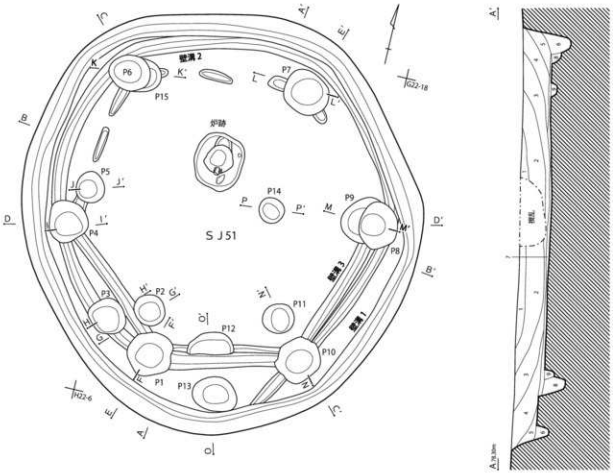
１は撚糸文Ｌを施文する胴下半部である。加曽利Ｅ式キャリパー形土器の底部と思われる。

16～19は角押文や三角押文を施文する勝坂式古段階の土器群である。20は区画沈線に沿って鋸歯状沈線文を沿わせており、26は隆帯脇に蓮華文を施文する勝坂式中段階の藤内式に比定されよう。

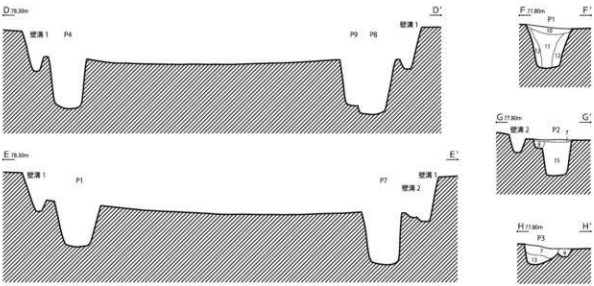
21～25、27～36は大半が勝坂式新段階の土器群と思われ、刻み隆帯と沈線を組み合わせてモチーフを描いている。21は外削状を呈する口唇部に沈線を巡らせて２分割し、異方向の刻みを施文する。

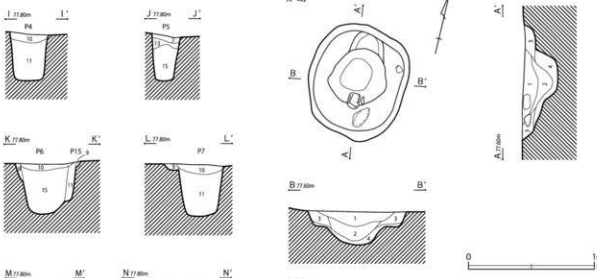
第161表　第51号住居跡柱穴計測表（第382・383図）

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P 1	75.0	69.0	P 2	50.0	57.0	P 3	62.0	32.0	P 4	66.0	77.0	P 5	46.0	75.0
P 6	65.0	82.0	P 7	75.0	82.0	P 8	73.0	83.0	P 9	75.0	70.0	P 10	70.0	72.0
P 11	50.0	67.0	P 12	75.0	33.0	P 13	72.0	18.0	P 14	40.0	30.0	P 15	48.0	63.0



第382図　第51号住居跡（1）





S J 51

1　黒褐色土　2層より混みが悪い　ローム粒子少量
2　黒褐色土　ローム粒子多量　炭化物粒子少量
3　暗褐色土　ロームブロック少量　ローム粒子も2層より少ない
4　暗褐色土　ローム粒子少量　ームブロック微量
5　暗褐色土　ローム粒子多量　4層より混みを帯る　しまり悪い
6　暗褐色土　ローム粒子多量　締りわるい（壁溝1）
7　暗黄褐色土　ローム粒子・ブロック・炭化物粒子多量
しまり非常に良い（版築か）
8　暗黄褐色土　ロームブロック少量　しまり良い（壁溝2）
9　黄褐色土　ロームブロック多量　しまり非常に良い（壁溝3）

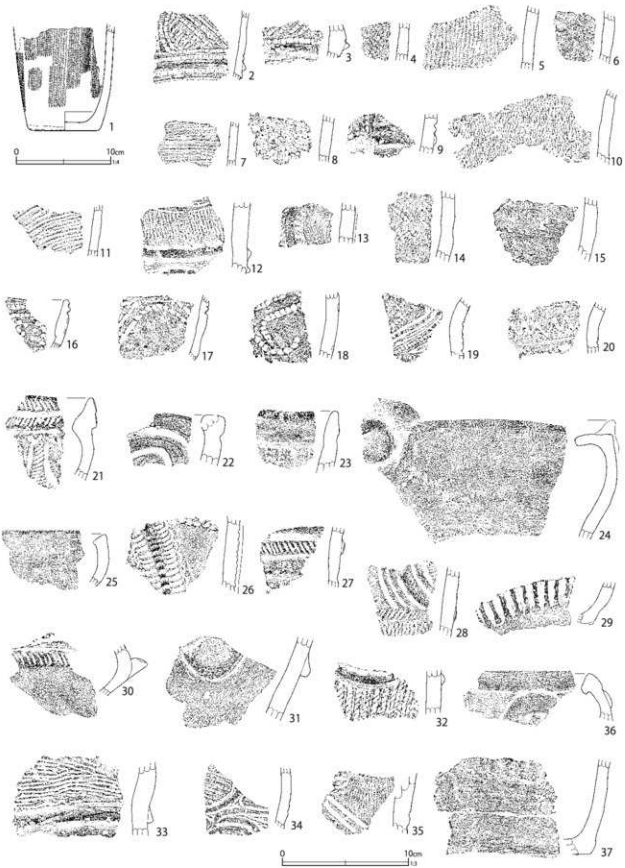
S J 51 ピット

10　暗褐色土　11層に近似　しまり良い
11　暗褐色土　ローム粒子・小ブロック少量　炭化物微量　下部はしまり悪い
12　暗黄褐色土　ロームブロック混じる　しまり悪い
13　黄褐色土　ロームブロック塊　しまり非常に良い（埋戻し）
14　暗黄褐色土　ロームブロック多量　しまり良い（埋戻し）
15　暗黄褐色土　ロームブロック多量　しまり非常に良い（埋戻し）
16　黒褐色土　ローム粒子・焼土粒子少量
17　暗褐色土　ロームブロックを含む土を充填　しまり良い

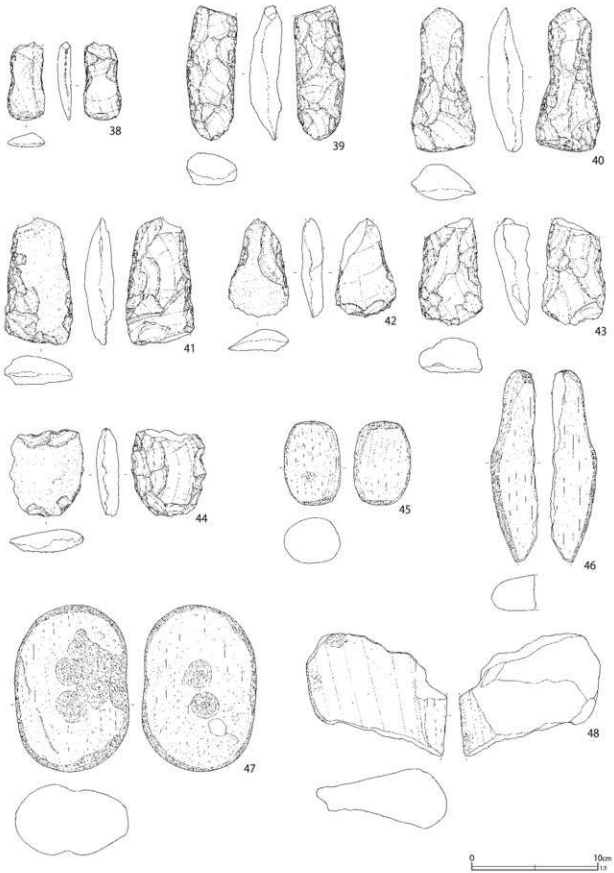
S J 51 炉跡

1　黒褐色土　ローム粒子・焼土粒子少量
2　暗褐色土　ローム粒子・焼土粒・炭化物粒子多量　しまり良い
壁面は被熱のためローム土がブロック状に硬化
3　暗黄褐色土　ローム粒子・焼土粒子多量　しまり良い
4　暗黄褐色土　被熱したロームブロック・焼土粒子多量　部分的に黒色土を混入

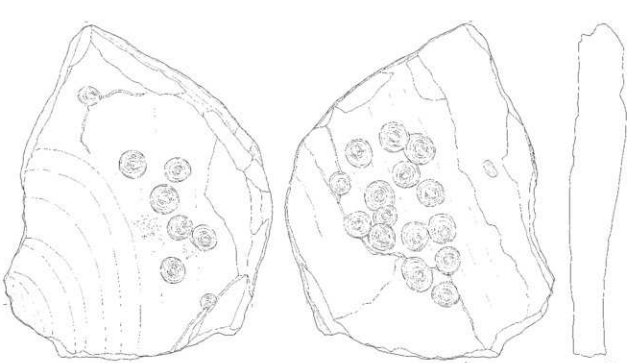
第383図　第51号住居跡（2）



第384図　第51号住居跡出土遺物（1）



第385図　第51号住居跡出土遺物（2）



第386図　第51号住居跡出土遺物（3）

第162表　第51号住居跡出土復元土器観察表（第384図）

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備　考
384-1	[11.2]	－	10.6	7.2	30%

第163表　第51号住居跡出土石器観察表（第385・386図）

番　号	器　種	分類	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
385 － 38	磨製石斧	Ⅲ①イ	砂岩	6.2	3.0	1.1	24.5	
39	打製石斧	Ⅰ②イ	ホルンフェルス	[10.2]	4.0	2.6	123.5	
40	打製石斧	Ⅲ2②イ	ホルンフェルス	11.6	5.1	2.8	151.8	
41	打製石斧	Ⅲ2②ア	ホルンフェルス	10.1	5.4	2.3	133.1	
42	打製石斧	Ⅲ2②イ	頁岩	7.8	4.8	1.7	59.5	
43	打製石斧	Ⅲ2②イ	ホルンフェルス	[8.5]	5.0	2.8	120.0	
44	打製石斧	Ⅴ②イ	ホルンフェルス	[6.9]	5.9	1.8	86.6	
45	磨石	Ⅱ1-3①イ	安山岩	6.7	4.5	3.8	153.2	
46	磨石	Ⅴ②イ	緑色岩	[15.3]	[3.7]	3.7	268.8	
47	磨石	Ⅱ1-3①ア	砂岩	13.2	9.1	5.6	917.8	表裏面全部赤色・黒色化
48	石皿	Ⅳ②イ	砂岩	9.7	11.2	5.0	432.2	
386 － 49	石皿	Ⅳ②イ	緑泥片岩	[26.6]	[21.4]	5.2	3873.6	

23は円筒形土器の口縁部破片で、結節押引文を縦位施文する。24、25は頸部で括れ、内湾する無文の口縁部が開く器形の深鉢である。29は半隆線を垂下施文する曽利式系の土器である。

30、36は口縁部が内湾する浅鉢で、31は浅鉢の胴部破片と思われる。いずれも有文の浅鉢である。

32は太い撚糸文L上に隆帯を施文するもので、加曽利E式の可能性が高い。34は撚糸文L地文上に、半截竹管状工具の平行沈線でモチーフを描いている。35は条線文上に並行沈線を施文する

ものである。

37は勝坂式土器の底部と思われる。

石器は38～49が出土した。

38は小形の局部磨製石斧である。

39～44は打製石斧である。39は短冊形を呈する片刃の打製石斧である。40～42が撥形を呈し、刃部の残る40、42は両刃である。刃部片である43、44は、43が両刃、44が片刃である。

45～47が磨石で、45、47は周縁に整形が施されている。また、47は正面及び裏面の中央に凹痕を有する。

48、49は石皿の破片である。49は皿部の周縁と裏面に凹痕を有し、特に裏面には密集している。

第52号住居跡（第387図～第398図）

Ｇ・Ｈ－21区に位置する。第３号溝と重複するが、第３号溝の方が新しい。平面形は北東方向に細長い楕円形で、規模は長径6.0m、短径5.6m、深さ0.35mである。

壁溝はほぼ重なるように、壁に沿って２本検出された。外側の壁溝の方が新しいが、内側の壁溝を調査している際に、両者の区分が曖昧になってしまった。

柱穴は合計29基検出された。住居跡のコーナー６箇所に柱穴が複数回の重複や隣接して集中しており、その６箇所の柱穴を主柱とする６本主柱の住居跡が想定される。柱穴は、規模、覆土、配置、切り合いなどから少なくとも古・中・新の３組の組み合わせが想定された。

新段階は最終段階の住居跡の柱穴配置であり、Ｐ１、５、７、８、９、12の６基が想定される。ほぼ北方向に主軸をとる6本主柱の住居である。

中段階は、Ｐ３、16、18、８、20、21の６基が想定されるが、Ｐ８が新段階と兼ねており、Ｐ３の位置が理想的な配置ではなく、やや歪んだ柱穴配置となっている。

古段階は、Ｐ２、６、17、19、10、11の６基が想定され、比較的整った６本主柱の配置となっている。

主柱穴の深さは、Ｐ１＝45cm、Ｐ２＝33cm、Ｐ３＝24cm、Ｐ５＝61cm、Ｐ６＝44cm、Ｐ７＝57cm、Ｐ８＝72cm、Ｐ９＝62cm、Ｐ10＝48cm、Ｐ11＝58cm、Ｐ12＝67cm、Ｐ16＝58cm、Ｐ17＝45cm、Ｐ18＝30 cm、Ｐ19＝45cm、Ｐ20＝52cm、Ｐ21＝46cmである。

炉跡は住居跡中央部北寄りに位置し、地床炉である。南北方向に細長い楕円形で、規模は長径115cm、短径79cm、深さ26cmである。底部には炉床の痕跡が５箇所に見られた。

埋甕は検出されなかった。

遺物は、覆土２層中に形のわかる土器や復元可能な土器の大破片がいわゆる吹上パターン状態で出土した。また、第391図１は住居跡の覆土調査中に正位の状態で出土した。その後、出土地点がＰ８の直上であることが明らかとなり、偶然かは明らかにし得ないが、Ｐ８が埋まりかけている時に埋設された可能性も否定しきれない。

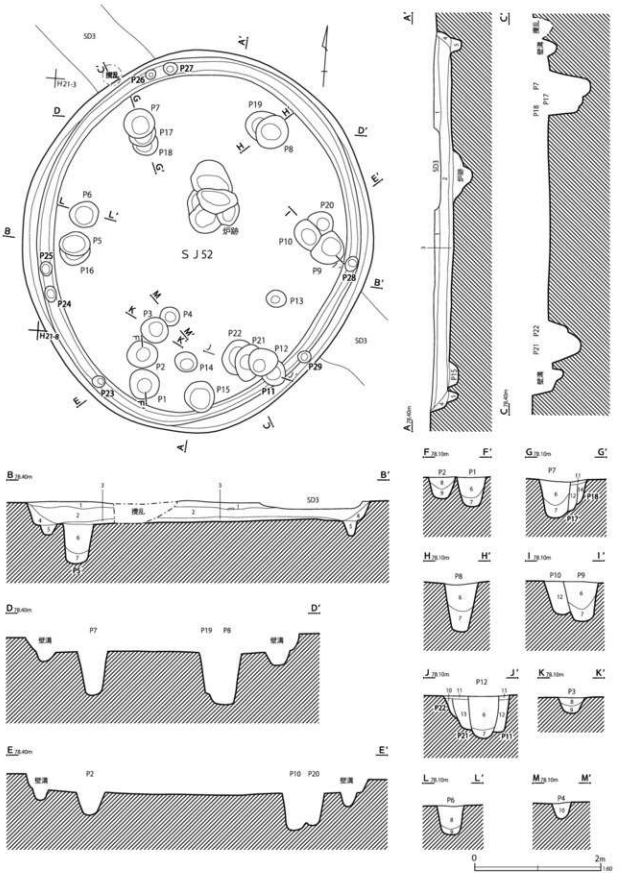
住居跡はピットの配置から少なくとも３回の住み替えが行われ、炉床の数からはさらに多くの作り替えが示唆されている。

最終住居跡の時期判定も、確実な共伴土器がないことから難しいが、壁溝を有し、６本主柱で、覆土から勝坂式新段階の土器群が一括出土していることから、その時期の所産と思われる。

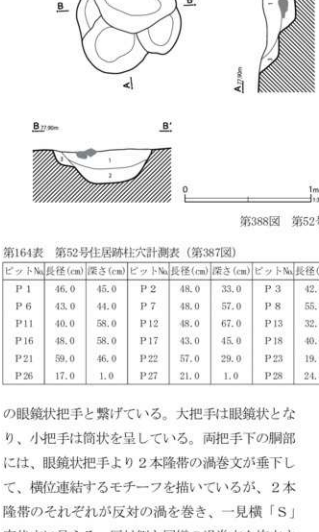
遺物は第391図１～第398図98の土器類、石器類が出土した。

第395図14はＰ２、15はＰ３、16はＰ５、17、18はＰ６、19、20はＰ７、21、22はＰ８、23、24はＰ10、25～27はＰ12、28はＰ13、29～33は炉覆土内からの出土である。

１は正位の状態で出土した土器で、埋設の可能性を指摘した土器である。頸部で括れ、胴部の張る器形で、台が付く可能性もある。内湾する無文の口縁部の正面と背面に大小の把手を付け、頸部



第387図　第52号住居跡（1）



SJ52
1　暗褐色土　ローム粒子少量　炭化物微量　土器小破片多量出土
2　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物少量　焼土粒子微量
　上面で土器大破片出土
3　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物少量　焼土粒子微量
　ローム小ブロック少量
4　褐色土　ローム粒子多量　炭化物少量　ソフトローム多量
5　褐色土　ローム粒子多量　炭化物微量　ソフトローム多量（壁溝）

SJ52ピット
6　黒褐色土　ローム粒子少量　しまり悪い
7　暗黄褐色土　ローム粒子多量　しまり悪く粘性強い
8　暗褐色土　ローム粒子をやや多量（埋戻し）
9　暗黄褐色土　ローム粒子・ブロック少量（埋戻し）
10　暗褐色土　ローム小ブロック少量（埋戻し）
11　暗褐色土　ローム粒子少量（張り床か）
12　暗黄褐色土　ローム小ブロック・粒子多量（埋戻し）
13　黄褐色土　ローム粒子多量　しまり悪い
14　黄褐色土　ローム小ブロックを含む

SJ52炉跡
1　黒褐色土　焼土粒子・ローム粒子少量　焼土大ブロック含む
2　暗赤褐色土　焼土粒子・ローム小ブロック多量　炭化物粒子少量
3　暗褐色土　ローム小ブロック少量　壁面は被熱のため硬化

第388図　第52号住居跡（２）

第164表　第52号住居跡柱穴計測表（第387図）

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P１	46.0	45.0	P２	48.0	33.0	P３	42.0	24.0	P４	31.0	25.0	P５	49.0	61.0
P６	43.0	44.0	P７	48.0	57.0	P８	55.0	72.0	P９	55.0	62.0	P10	(43.0)	48.0
P11	40.0	58.0	P12	48.0	67.0	P13	32.0	11.0	P14	37.0	1.0	P15	50.0	14.0
P16	48.0	58.0	P17	43.0	45.0	P18	40.0	30.0	P19	51.0	45.0	P20	(38.0)	52.0
P21	59.0	46.0	P22	57.0	29.0	P23	19.0	1.0	P24	26.0	1.0	P25	20.0	1.0
P26	17.0	1.0	P27	21.0	1.0	P28	24.0	1.0	P29	20.0	1.0			

の眼鏡状把手と繋げている。大把手は眼鏡状となり、小把手は筒状を呈している。両把手下の胴部には、眼鏡状把手より２本隆帯の渦巻文が垂下して、横位連結するモチーフを描いているが、２本隆帯のそれぞれが反対の渦を巻き、一見横「Ｓ」字状文に見える。反対側も同様の渦巻文を施文するが、２本目の隆帯の先端が渦を巻かずに形骸化している。地文は無文である。

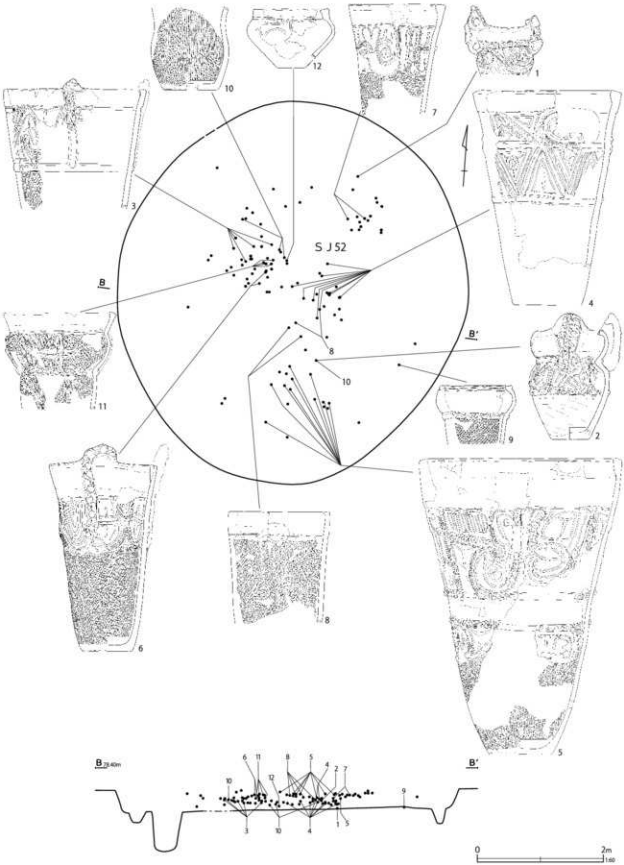
２も頸部で括れ胴部が張るが、底部まで存在する深鉢である。口縁部に中空状の大きな把手を付け、頸部の眼鏡状把手と繋げている。胴部には刻み隆帯を垂下させて区画し、垂下隆帯の起点から斜めに垂下して渦を巻く隆帯を派生させている。モチーフの余白には、三叉文を施文する。

３～７は円筒形土器である。３は口唇上からとぐろを巻く蛇体隆帯が垂下し、渦巻き隆帯を派生させるモチーフを描くものと思われる。胴部地文に０段多条ＲＬを縦位施文する。

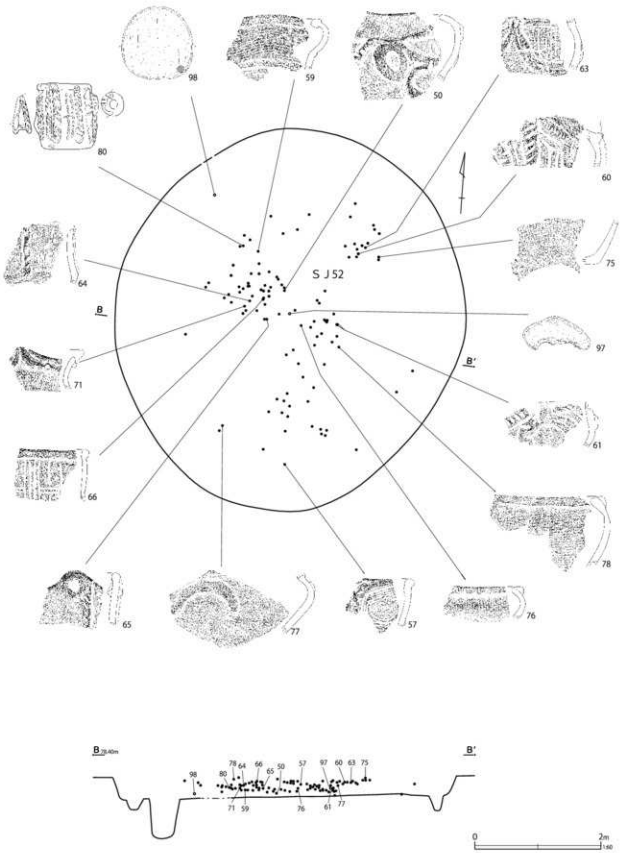
４は胴部文様帯を２帯に区画し、上段に楕円区画と斜行隆帯を組み合わせたモチーフ、下段に連続鋸歯状区画を施しており、区画内には三叉文や沈線などの単純な充填文を施文する。

５は非常に大形の深鉢で、幅広の口縁部無文帯を区画し、胴部文様帯と、無文帯を挟んで底部文様帯を構成している。胴部文様帯には低平な隆帯で渦巻文を連結するような大柄のモチーフを描いており、区画隆帯には交互刺突や「ハ」字状刻み等を施している。底部文様帯には楕円区画文を配するものと思われ、区画内には簡素な充填文を施文する。地文は０段多条ＲＬの縦走縄文である。

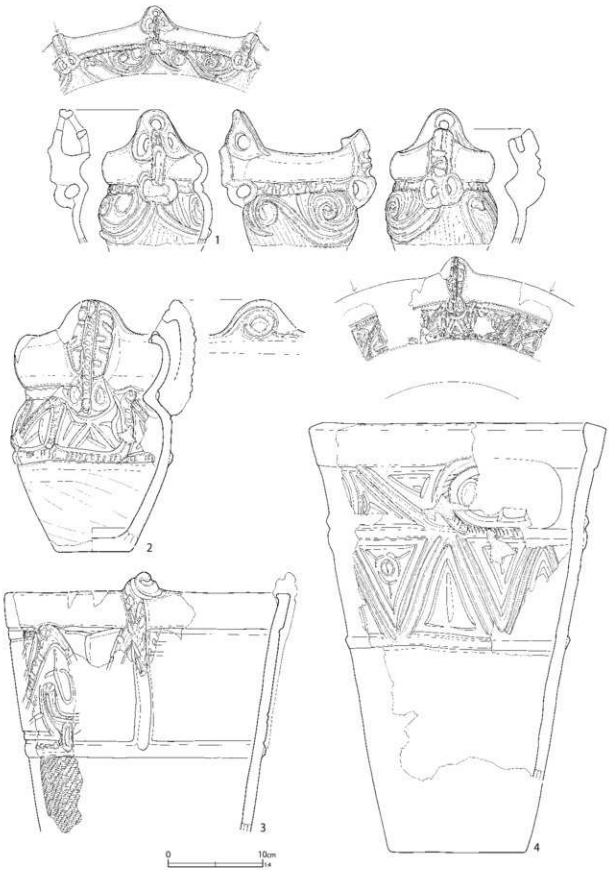
６は口唇部から胴区画部にまで蛇体隆帯を垂下させ、文様帯内を波打たせて表現している。ま



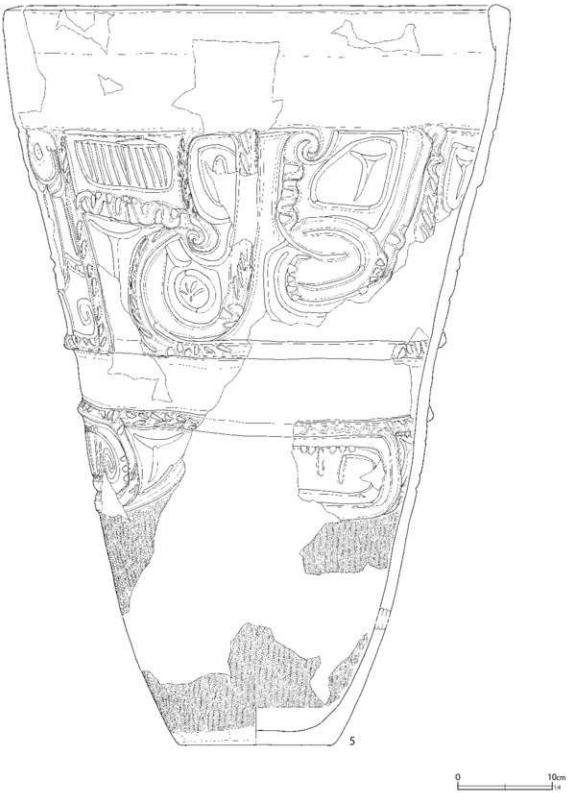
第389図　第52号住居跡遺物出土状況（1）



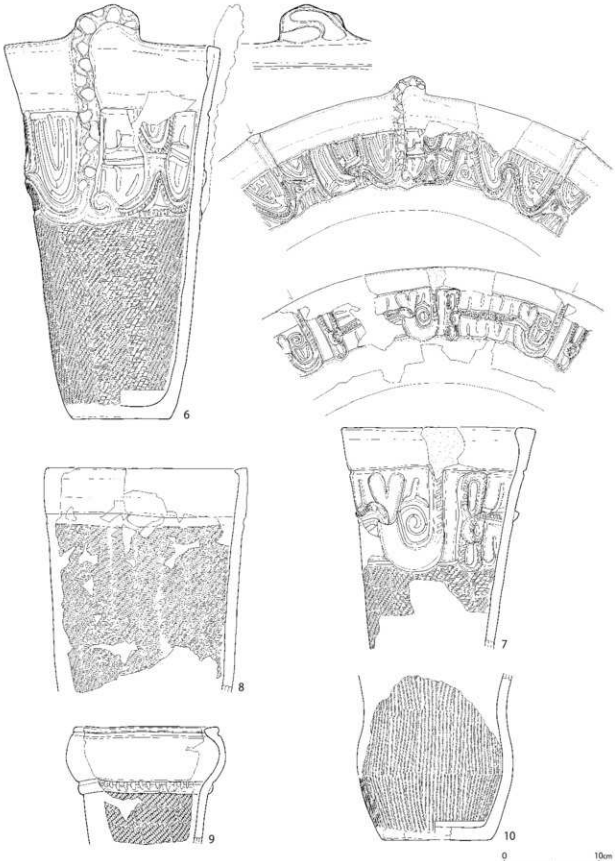
第390図　第52号住居跡遺物出土状況（2）



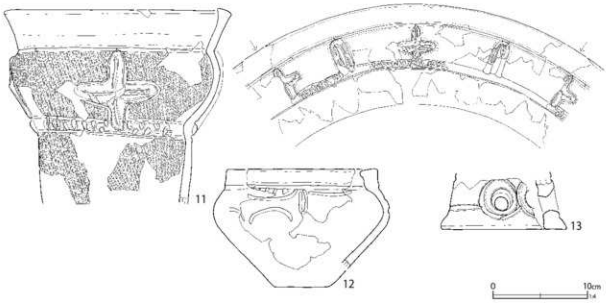
第391図　第52号住居跡出土遺物（1）



第392図　第52号住居跡出土遺物（2）



第393図　第52号住居跡出土遺物（3）



第394図　第52号住居跡出土遺物（4）

第165表　第52号住居跡出土復元土器観察表（第391～394図）

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
391-1	[14.4]	9.8	-	-	60%
2	[25.9]	13.8	-	-	70%
3	[27.7]	(30.0)	-	-	30%
4	[42.5]	(31.4)	-	-	50%
392-5	78.5	(53.2)	-	16.0	60%
393-6	43.6	22.8	-	10.2	完形
7	[23.4]	20.4	-	-	50%
393-8	[23.6]	(21.2)	-	-	40%
9	[12.5]	(15.2)	-	-	30%
10	[17.3]	(16.2)	-	11.4	40%
394-11	[20.6]	24.1	-	-	50%
12	[10.5]	(15.9)	-	(5.5)	30%
13	[5.4]	-	-	(13.2)	30%

た、文様帯には蛇頭を２箇所に表現しており、裏面側の垂下する蛇体と合わせると、蛇体３体が絡むモチーフを描いているようである。モチーフの余白には沈線文のみの充填文を施文している。

７は口縁部から垂下する幅広で低平な隆帯で蛇体２体を表現しているようである。頭の部分が文様帯内にあることから、口縁部には蛇尾が巻き上がる構成をとるものと思われる。胴部地文は０段多条ＲＬの縦位施文である。

８は口縁の無文部のみを区画する深鉢で、口唇部内端が突出する。胴部には０段多条ＲＬを縦位施文する。

９は内湾する無文の口縁部が開き、括れる頸部以下に単節ＬＲ縄文を横位施文する。

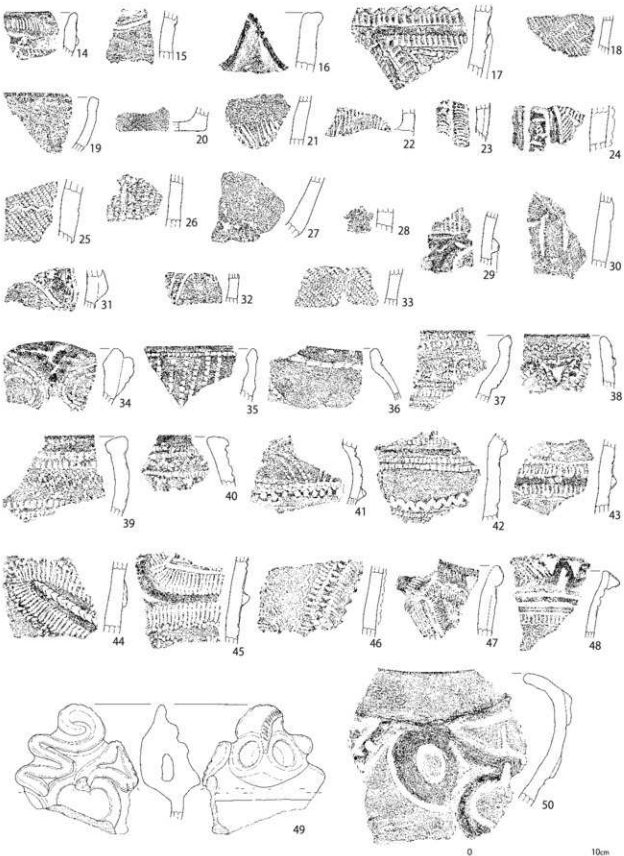
10は細かな０段多条の撚糸文Ｌを施文する底部である。

11はキャリパー形土器で、口縁に幅広の無文部を有する口縁部が開き、交互刺突を施す隆帯で、括れる頸部を区画している。口縁部には背割状の隆帯で表現する「十」字状文と逆「U」字状文を交互の４単位に施文している。

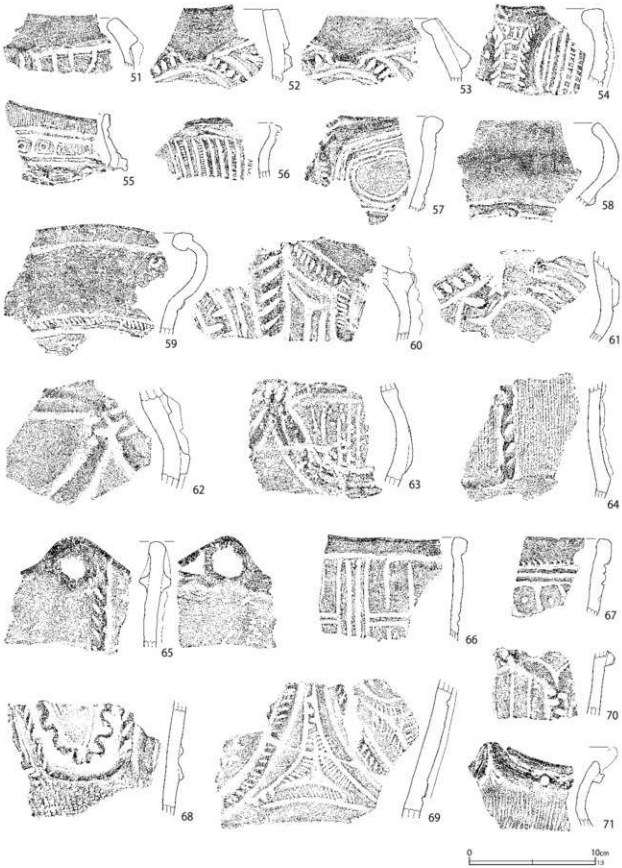
12は鉢状の浅鉢で、口縁部が内湾しながら立つ。胴部には２本沈線の縦位区画文間に、上下対弧の沈線文を施文している。

13は台形土器で、２連の円孔が空く。

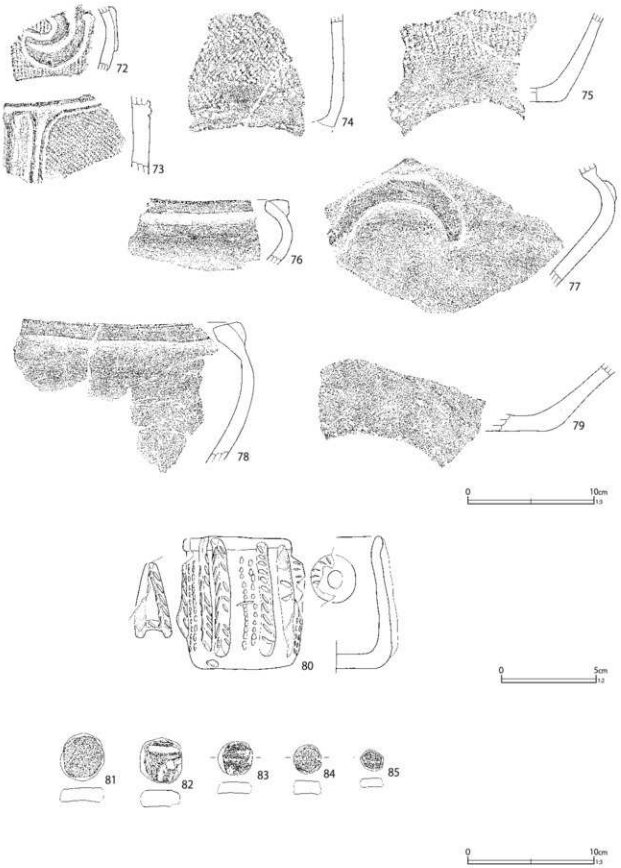
破片では、34～45は角押文や三角押文でモチーフを描く勝坂式古段階の土器群であり、37、38は印刻状の三叉文、39、40は三角押文で小鋸歯状文を施文している。また、44、45はキャタピラ文の脇に三角押文の小鋸歯状文を施文する。34、36、41は阿玉台Ⅱ式並行期に、他は新道式期に比定されよう。57は胎土に雲母を含み、半



第395図　第52号住居跡出土遺物（5）



第396図　第52号住居跡出土遺物（6）



第397図　第52号住居跡出土遺物（7）

第398図　第52号住居跡出土遺物（8）

第166表　第52号住居跡出土石器観察表（第398図）

番　号	器　種	分類	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
398 － 86	石鏃	Ⅰ2①	チャート	2.1	1.8	0.3	0.6	
87	石鏃	Ⅰ2②	チャート	2.6	[1.9]	0.5	2.2	
88	石鏃	Ⅰ2②	チャート	[1.4]	1.5	0.4	0.6	
89	石鏃	Ⅲ②	チャート	[2.4]	1.5	0.5	1.9	
90	スクレイパー	Ⅰ1①	砂岩	8.9	10.0	1.5	107.0	
91	スクレイパー	Ⅰ1②	ホルンフェルス	[8.3]	7.8	2.2	131.3	
92	打製石斧	Ⅱ2①イ	ホルンフェルス	12.6	4.2	2.5	185.5	
93	打製石斧	Ⅲ2①イ	ホルンフェルス	10.4	5.0	1.8	114.3	
94	打製石斧	Ⅲ2①イ	ホルンフェルス	11.1	5.7	2.7	170.6	
95	打製石斧	Ⅲ2②イ	砂岩	9.5	5.6	1.4	70.0	
96	打製石斧	①ア	砂岩	5.4	10.6	2.1	126.3	
97	礫器	Ⅱ2②イ	ホルンフェルス	[7.7]	4.5	1.6	75.7	
98	磨石	Ⅰ1-2①ア	安山岩	11.6	11.3	4.3	835.4	表裏面一部赤色化

截竹管状工具の平行沈線で施文しており、阿玉台Ⅲ式に比定されようか。

46 ～ 48は爪形文の脇に小繋ぎ状の波状沈線を施文するもので、勝坂式中段階の藤内式期に比定されよう。49は口縁部に眼鏡状把手が付き、左側に流れる蛇体の蛇行隆帯を施文する。55は内湾して開く口縁部に、細かな押引爪形文を口縁部に施文し、方形状の区画文で口縁部を区画している。円形文を施文する方形区画文は67にも施文されており、藤内式の新しい段階に比定されるものと思われる。73は半隆帯の区画に沿って細かな刻みを施すもので、地文に単節ＬＲ縄文を縦位施文する。藤内式であろう。

50 ～ 54、56、58 ～ 70は勝坂式新段階から終末段階の土器群で、大半は終末段階であろう。50は多喜窪タイプの器形を呈し、幅広の無文部が内湾し、口縁部に低平な隆帯でモチーフを描き、隆帯には交互刺突を施している。60、61も同様な器形の口縁部である。58、59は無文の口縁部が開き、頸部で括れる器形である。

62、63は多喜窪タイプの張り出した底部で、交互刺突を施す隆帯や、背割隆帯で櫛形状の区画文を施す。64は胴部破片で、地文に細密な撚糸文Ｌを施文し、押圧を施した隆帯を垂下する。

65、66、68 ～ 70は円筒形土器での胴部破片である。65は口唇部から蛇体状の隆帯を垂下させる。66は平行沈線で規矩形のモチーフを描く。68 ～ 70は刻みや押圧を施した隆帯でモチーフを描いている。68の地文は０段多条ＲＬの縦走縄文である。

71は４単位の波状口縁で頸部が括れ、胴部が張る深鉢である。口縁部に交互刺突を施す隆帯を波状に巡らし、地文に撚糸文Ｌを施文する。

72は加曽利Ｅ式の隆帯渦巻文である。地文に撚糸文Ｌを施文する。加曽利ＥⅠ式であろう。

74、75は底部破片で、74は単節ＲＬの横位施文、75は０段多条ＲＬの縦走縄文である。

76 ～ 79は口縁部の内湾する浅鉢で、78は鉢に近い。77は胴部に低平な隆帯のモチーフを有する。

土製品は80 ～ 85で、80はミニチュア土器である。「ハ」字状刻みを有する隆帯で縦位区画と円形文、三角形文を施文する。縦位区画隆帯の間には、押引刺突文を２列垂下する。

81 ～ 85は土器片を利用した土製円盤である。

石器は86 ～ 98が出土した。

86 ～ 88は石鏃である。87は先端及び脚部が幅広く、未成品の可能性がある。正面左脚部が欠けたことにより、製作途中で廃棄されたのであろうか。88は両側縁が鋸歯状で、先端が欠損している。89は石鏃の未成品である。先端と下部の欠損によ

り廃棄されたと思われる。

90、91は粗粒の石材を用いたスクレイパーである。ともに両側縁に抉りを有する。特に91は抉りが深く、大形粗製石匙の可能性もある。

92～96は打製石斧である。92は両刃で短冊形を呈する。93～95が撥形を呈し、刃部は93、95が両刃、94が片刃である。96が分銅形を呈し、刃部は両刃である。

97は礫器である。

98は磨石で、周縁には整形が施されている。

第53号住居跡（第399図～第419図）

Ⅰ・Ｊ－21・22区に位置する。西側で第54号住居跡と一部重複するが、本住居跡の方が新しい。また、第56号集石土壙、第57号集石土壙、第58号集石土壙の３基は、本住居跡の覆土中に構築されている。

住居跡の平面形は南北方向にやや長い楕円形を呈し、規模は長径6.0m、短径5.5m、深さ0.6mを測る。

壁溝は検出されず、壁は床面から皿状に緩く立ち上がる。壁の立ち上がりに沿って、小さなピットが巡る。

柱穴は壁際の小ピットを含めて32基検出された。主柱穴と思われる柱穴は、重複や集中しておよそ６箇所に分かれて存在していることから、何度かの建て替えが行われ、ほぼ北方向に主軸を有する６本主柱の住居跡であることが想定される。

柱穴は重複関係や覆土、配置などから、少なくとも２組のまとまりが想定される。

最後の住居跡である最新の住居跡の柱穴は、Ｐ10、11、１、３、４、９の６基で、６本主柱の住居跡が想定される。

さらにこれらの柱穴と重複する柱穴として、古い段階の柱穴を抽出すると、Ｐ32、12、２、３、５、８が相当する。ただし、Ｐ３が新しい住居跡と兼ねていることを前提とする。やはり６本主柱の住居跡が想定される。

新旧の柱穴群は大きくずれることなく建て替えが行われているものと思われるが、まだ組み合わない柱穴もあるため、少なくとも１回以上の建て替えがあり、２軒以上の住居跡が構築されていたと判断される。

主柱穴の深さは、Ｐ１＝66cm、Ｐ２＝64cm、Ｐ３＝87cm、Ｐ４＝60cm、Ｐ５＝61cm、Ｐ８＝50cm、Ｐ９＝66cm、Ｐ10＝67cm、Ｐ11＝80cm、Ｐ12＝70cm、Ｐ32＝60cmである。

炉跡は住居跡中央部に、重複しながら３基が検出された。いずれも地床炉であるが、最も新しい炉１は、入り口方向に推定される南側に横長の大きな礫を設置していた。勝坂式期のやや古い時期に特有な炉の形態であろうか。本遺跡の中で類例が多い。

炉の規模は、炉１が長径54cm、短径47cm、深さ11cmの隅丸方形状である。炉２は長径45cm、短径32cm、深さ10cmの楕円形である。炉３は長径40cm、短径34cm、深さ９cmのほぼ円形である。

埋甕は検出されなかった。

遺物は覆土中層から上層にかけて、復元される土器群が、いわゆる吹上パターン状態で多量に出土した。

住居跡付属の土器がないため時期を決めかねるが、本住居跡は覆土中の土器群から勝坂式の中段階期から新段階期にかけての所産と推定される。

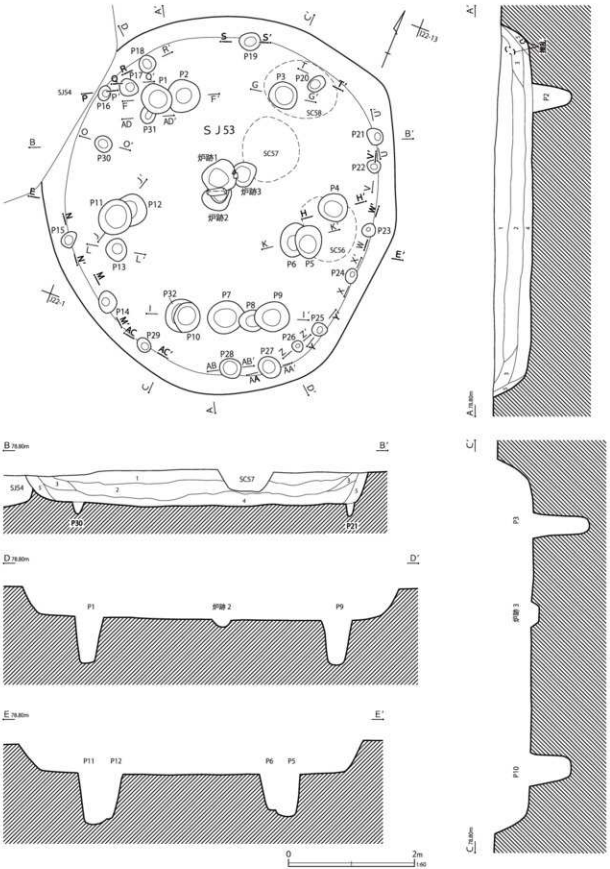
遺物は第406図１～第419図115の土器類、石器類が出土した。

土器は１～83である。

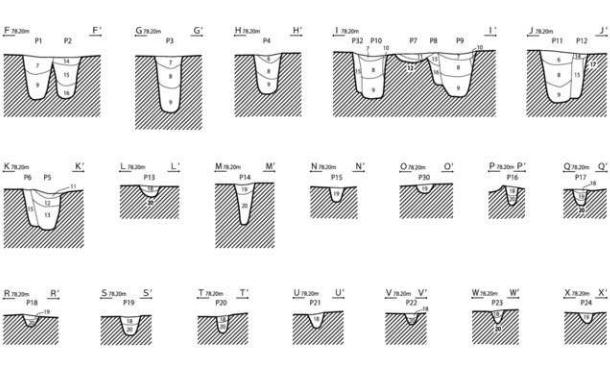
破片では、45、46はＰ１、47はＰ３、48はＰ４、49はＰ６、50はＰ８、51、52はＰ12、53はＰ13、54はＰ17、55はＰ28から出土した。

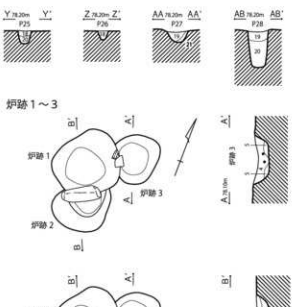
１～６は内湾する口縁部が開き、頸部で括れるキャリパー形深鉢土器で、口縁部文様帯を有する土器群である。

１は口唇部に大きな山形の眼鏡状把手を有し、



第399図　第53号住居跡（1）



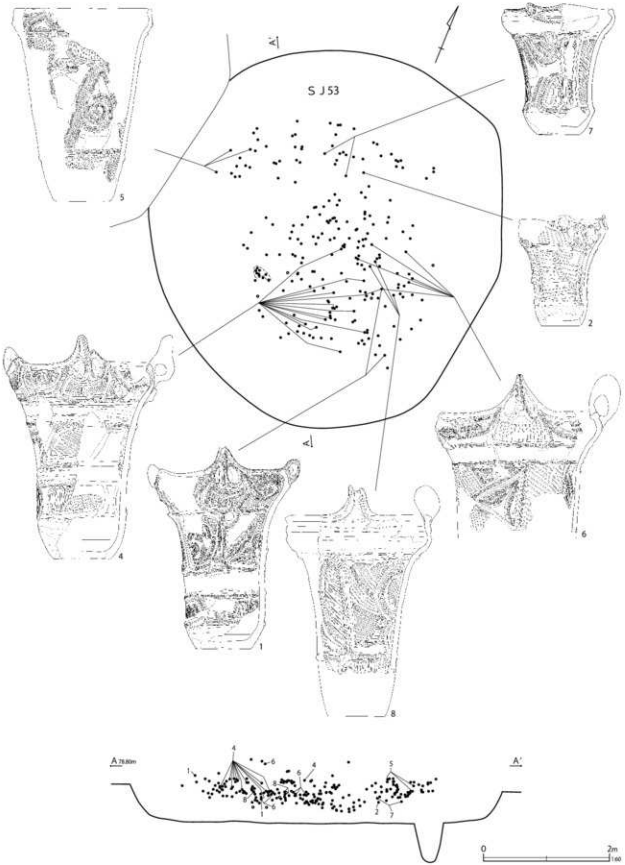


S J 53
1 暗褐色土　ローム粒子少量　炭化物微量
2 暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物少量　焼土粒子微量
3 暗褐色土　ローム粒子・ソフトローム多量　炭化物少量　焼土粒子微量
4 暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物少量　焼土粒子微量
5 褐色土　ローム小ブロック微量　ソフトローム多量
　ソフトローム主体　ローム粒子多量　炭化物焼土粒子微量

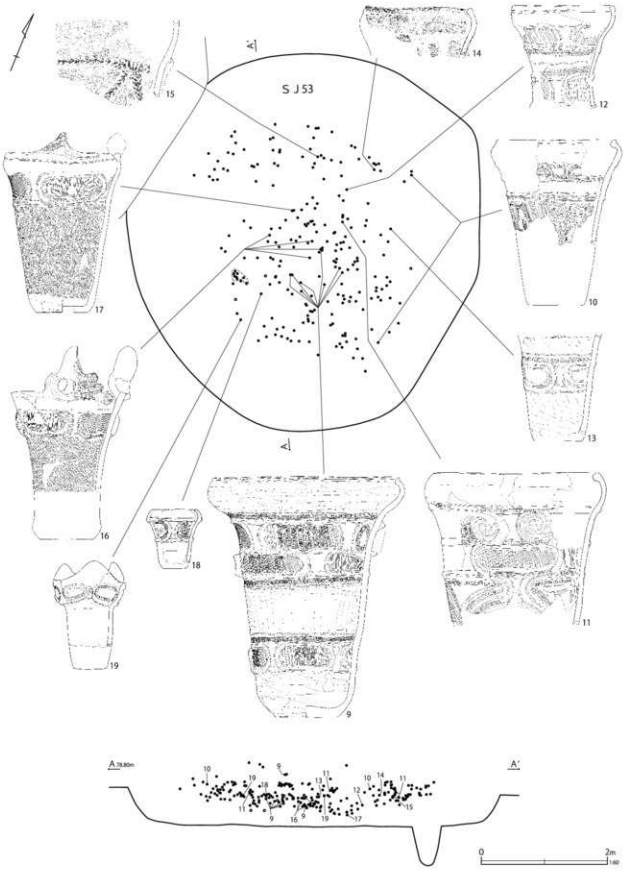
S J 53 ピット
6 黒褐色土　ローム粒子・炭化物少量　焼土粒子微量
　ブロック状の暗褐色土少量
7 暗褐色土　ローム粒子多量　ローム小ブロック微量
8 暗褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック少量
9 暗褐色土　ローム粒子多量　粘性あり
10 暗褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック多量
11 暗褐色土　ローム粒子多量　ローム小ブロック・炭化物微量
12 暗褐色土　ローム粒子・ロームブロック多量（埋戻し）
13 暗褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・ソフトローム多量（埋戻し）
14 暗褐色土　ローム粒子・ソフトローム多量
　ローム小ブロック少量　炭化物微量
15 暗褐色土　ローム粒子多量　ローム小ブロック・炭化物微量
16 暗褐色土　ローム粒子・ソフトローム多量　粘性あり
17 暗黄褐色土　ローム粒子・小ブロック多量
18 暗褐色土　ローム粒子多量　ローム小ブロック少量
19 暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物少量
20 暗褐色土　ローム粒子・ソフトローム多量
21 褐色土　ソフトローム主体　ローム粒子多量　炭化物少量

S J 53 炉跡
1 暗褐色土　ローム粒子・焼土粒子少量　炭化物微量
2 暗褐色土　ローム粒子・焼土粒子多量　炭化物少量
3 暗褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック多量
4 暗褐色土　被熱したロームブロックを充填している
5 黄褐色土　被熱したロームブロックを多く含む

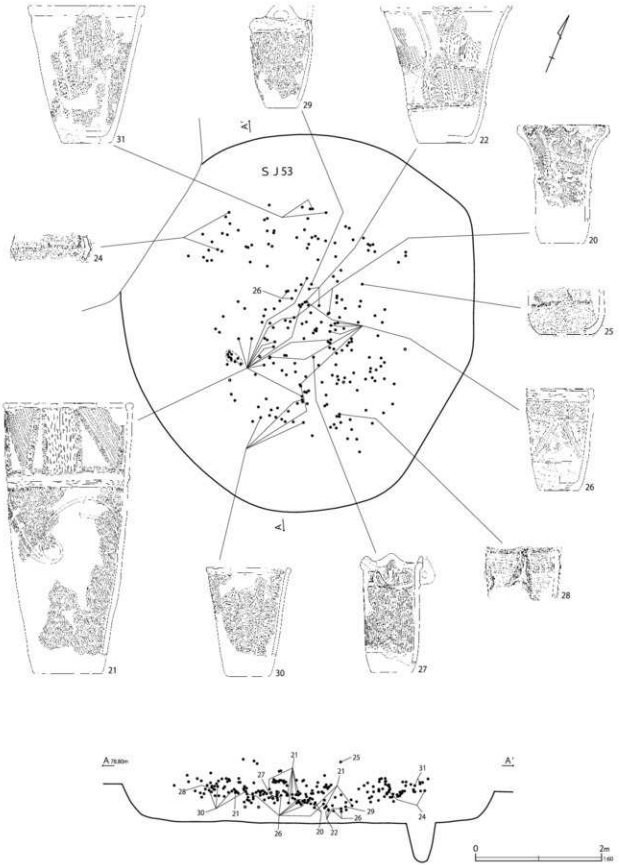
第400図　第53号住居跡（2）



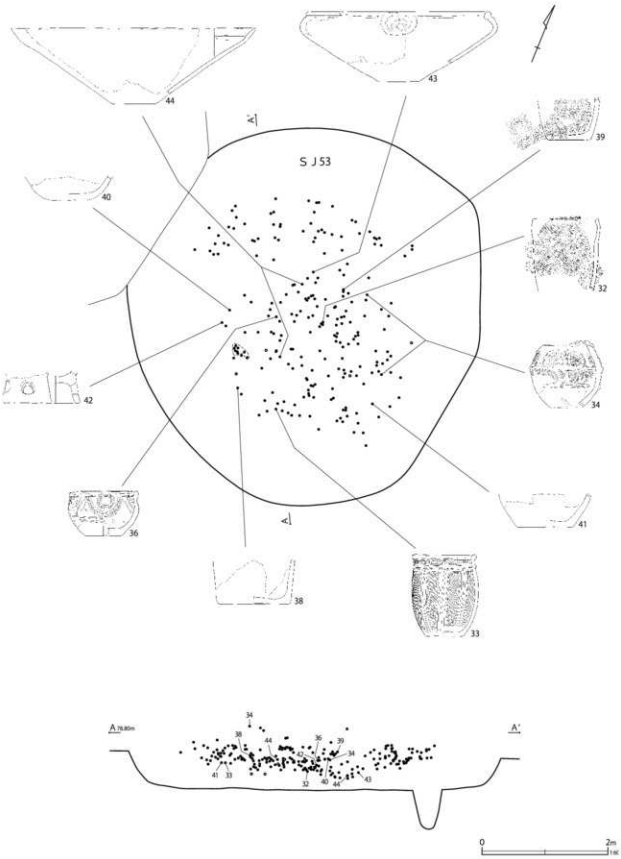
第401図　第53号住居跡遺物出土状況（1）



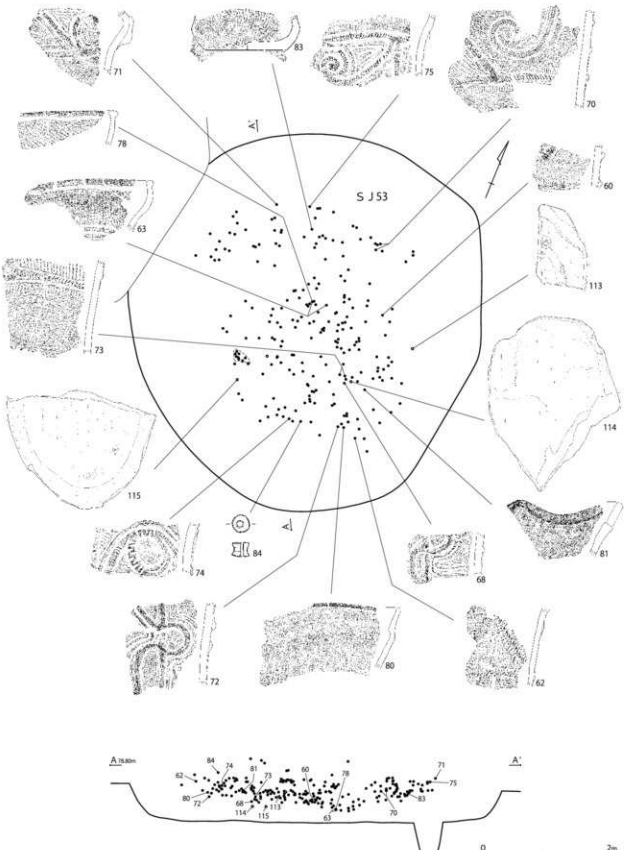
第402図　第53号住居跡遺物出土状況（2）



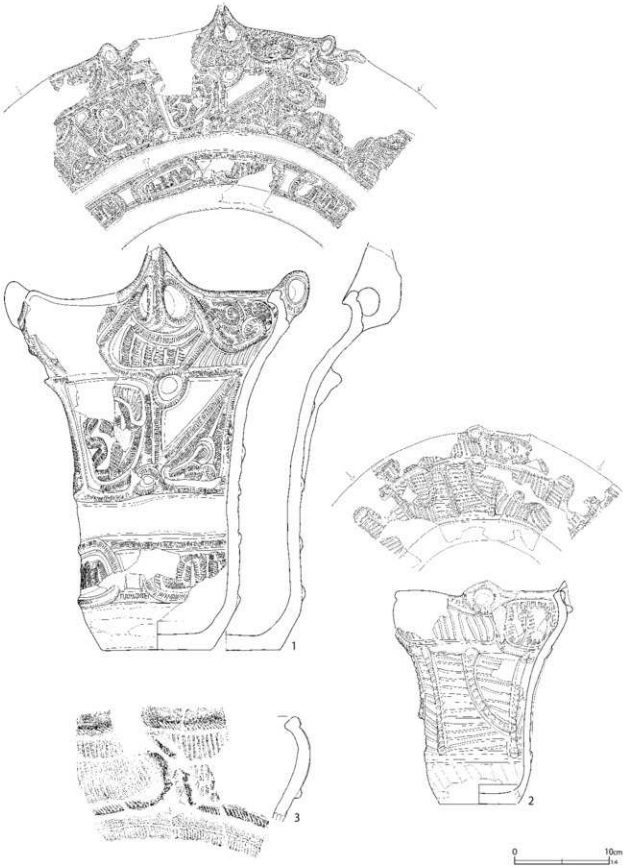
第403図　第53号住居跡遺物出土状況（3）



第404図　第53号住居跡遺物出土状況（4）

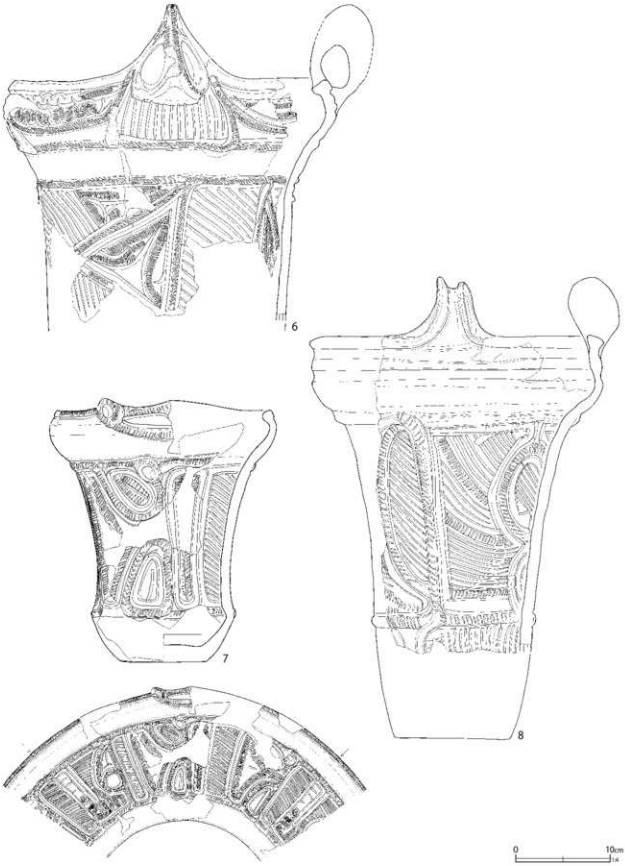


第405図　第53号住居跡遺物出土状況（5）

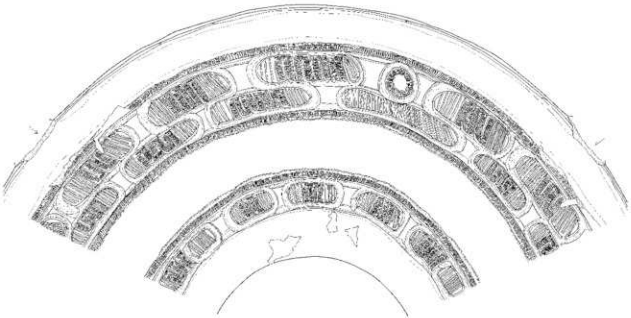


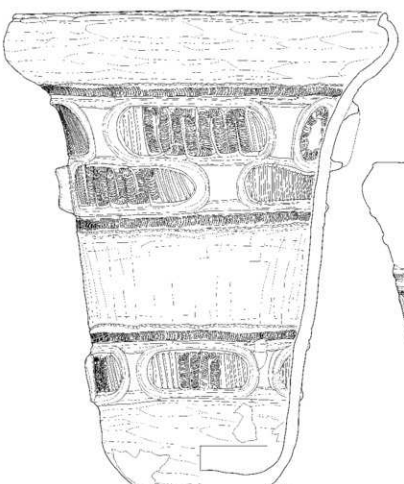
第406図　第53号住居跡出土遺物（1）

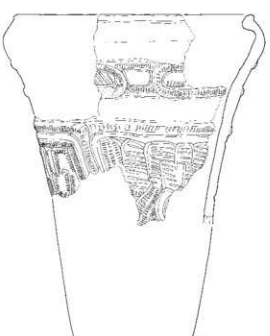
第407図　第53号住居跡出土遺物（2）



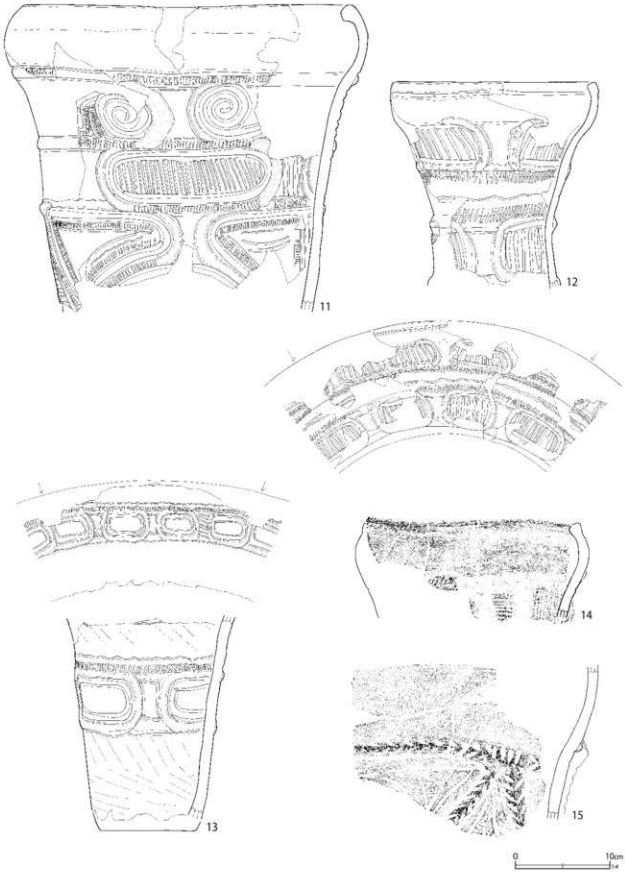
第408図　第53号住居跡出土遺物（3）



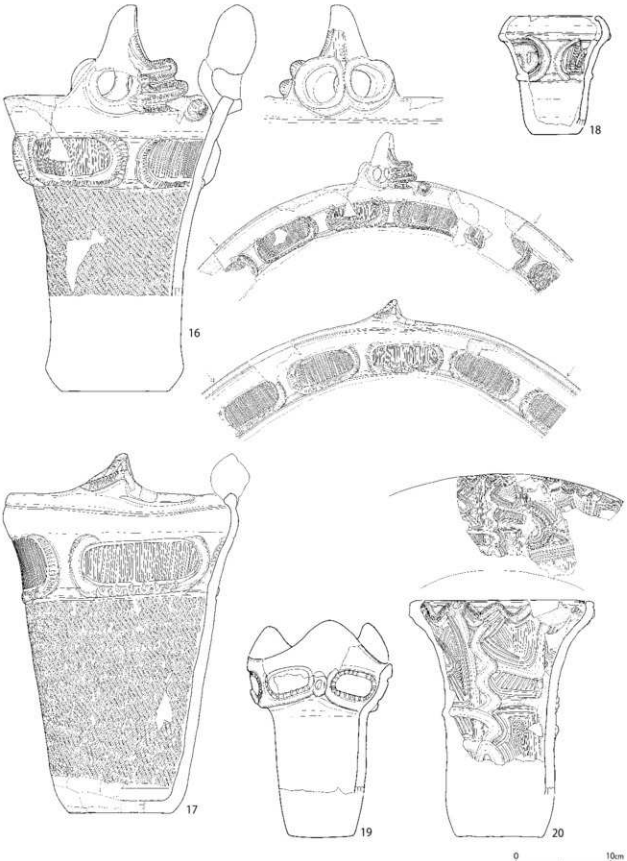




第409図　第53号住居跡出土遺物（4）

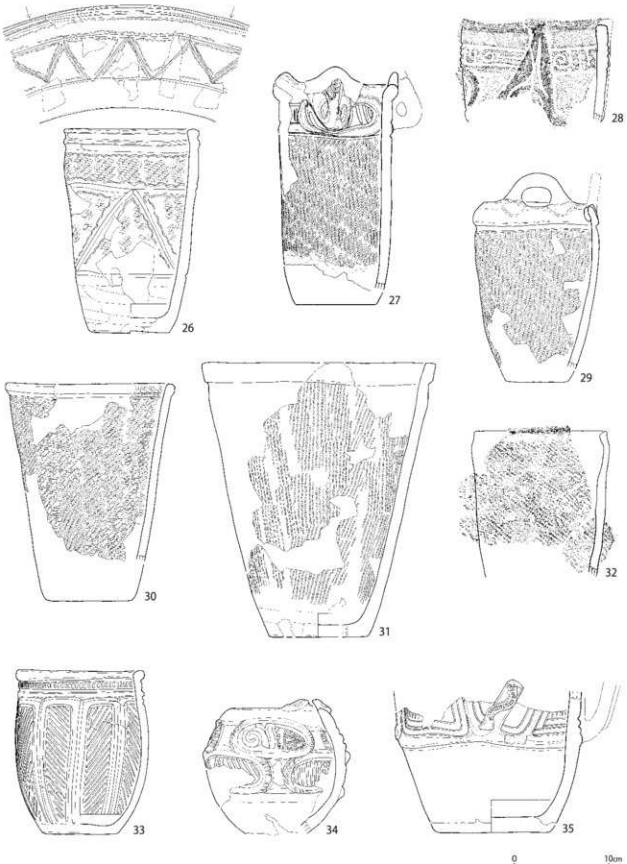


第410図　第53号住居跡出土遺物（5）

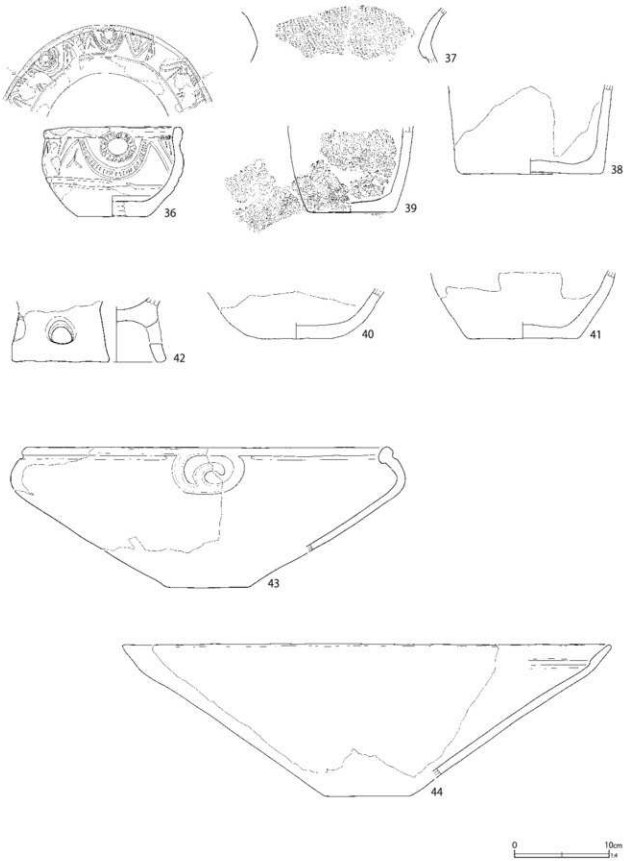


第411図　第53号住居跡出土遺物（6）

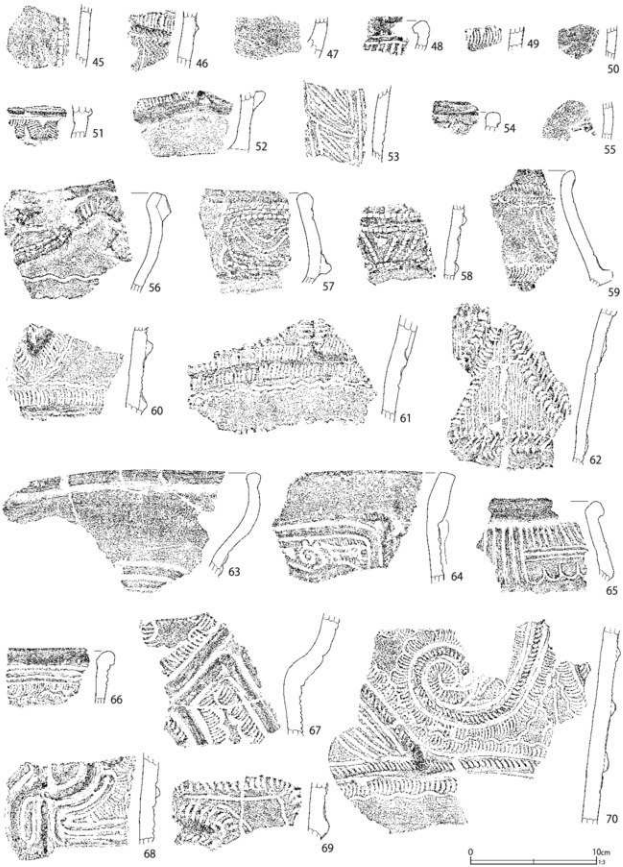
第412図　第53号住居跡出土遺物（7）



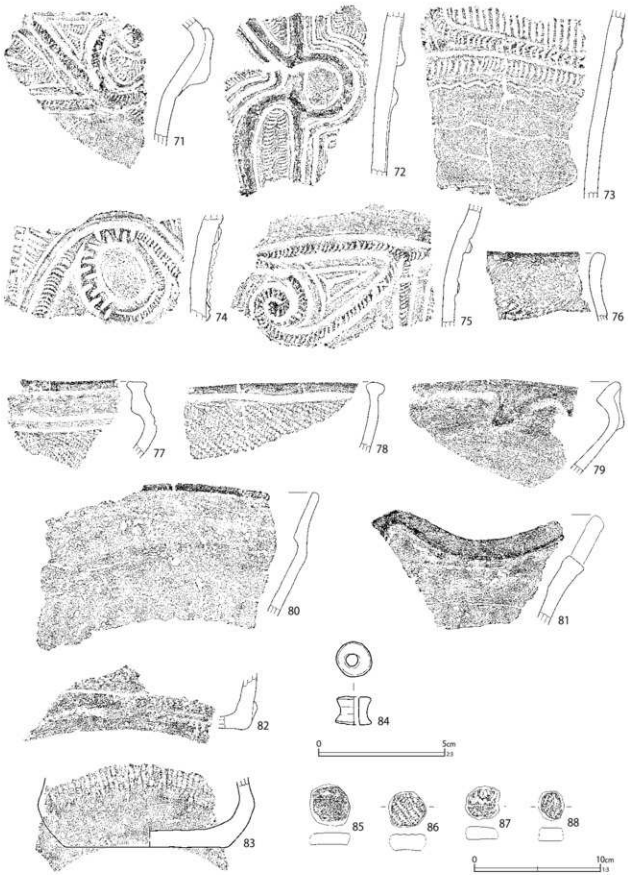
第413図　第53号住居跡出土遺物（8）



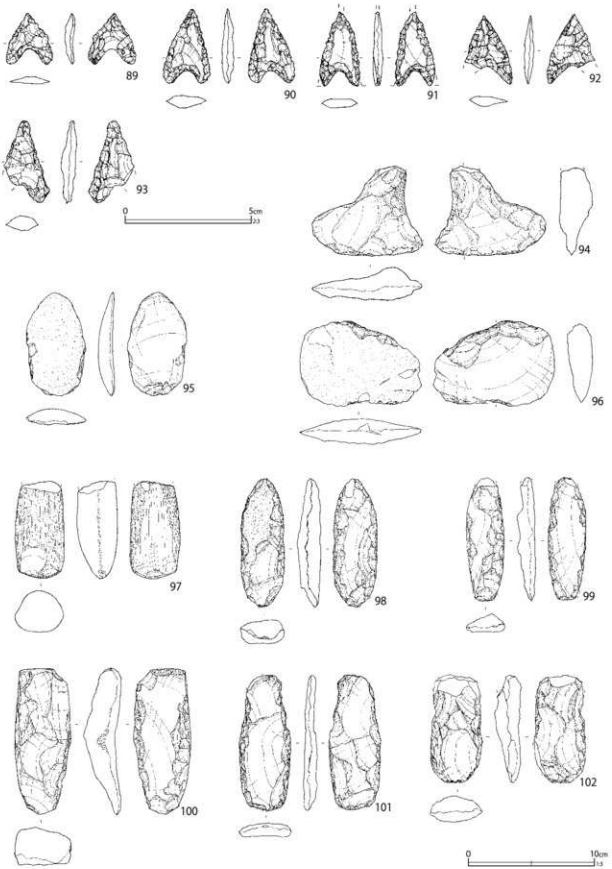
第414図　第53号住居跡出土遺物（9）



第415図　第53号住居跡出土遺物（10）

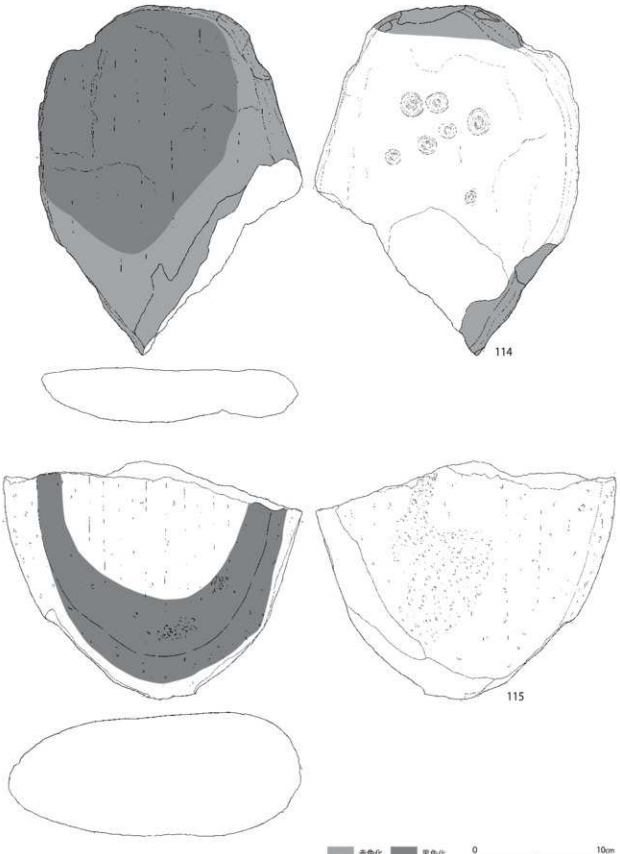


第416図　第53号住居跡出土遺物（11）



第417図　第53号住居跡出土遺物（12）

第418図　第53号住居跡出土遺物（13）



第419図　第53号住居跡出土遺物（14）

第167表　第53号住居跡柱穴計測表（第399・400図）

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P 1	50.0	66.0	P 2	52.0	64.0	P 3	45.0	87.0	P 4	46.0	60.0	P 5	52.0	61.0
P 6	53.0	56.0	P 7	60.0	14.0	P 8	34.0	50.0	P 9	62.0	66.0	P 10	48.0	67.0
P 11	55.0	80.0	P 12	50.0	70.0	P 13	35.0	16.0	P 14	33.0	62.0	P 15	27.0	21.0
P 16	24.0	29.0	P 17	31.0	25.0	P 18	27.0	15.0	P 19	33.0	29.0	P 20	29.0	27.0
P 21	27.0	22.0	P 22	21.0	17.0	P 23	24.0	20.0	P 24	20.0	15.0	P 25	24.0	19.0
P 26	18.0	13.0	P 27	38.0	15.0	P 28	33.0	55.0	P 29	24.0	17.0	P 30	27.0	14.0
P 31	28.0	17.0	P 32	52.0	60.0									

第168表　第53号住居跡出土復元土器観察表（第406～414図）

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
406-1	42.5	26.8	－	11.4	70%
2	[22.5]	(16.0)	－	(8.4)	70%
3	[11.1]	－	－	－	20%
407-4	47.3	(28.4)	－	11.8	60%
5	[36.7]	(28.6)	(29.2)	－	40%
408-6	[33.5]	(33.0)	(35.4)	－	40%
7	27.9	22.6	－	7.8	80%
8	[39.8]	(31.0)	－	－	70%
409-9	51.0	38.4	－	12.8	完形
10	[22.3]	(24.8)	(27.6)	－	30%
410-11	[32.4]	(34.6)	－	－	30%
12	[21.6]	(21.4)	－	－	60%
13	[21.4]	－	17.8	－	50%
14	[10.1]	(22.4)	－	－	20%
15	[15.8]	－	－	－	20%
411-16	[28.2]	24.2	－	－	60%
17	38.1	23.6	－	10.8	完形
18	[11.6]	(9.2)	(11.6)	－	40%
19	[15.7]	(15.2)	－	－	60%
20	[17.4]	(19.4)	－	－	50%
412-21	[53.3]	(27.4)	－	－	50%
22	[29.0]	－	(27.9)	11.2	40%
412-23	[5.5]	－	(20.9)	－	10%
24	[5.8]	－	(17.0)	－	10%
25	[9.4]	(15.9)	－	(10.9)	20%
413-26	21.6	14.2	－	8.4	90%
27	22.9	(13.2)	－	－	70%
28	[10.9]	(15.4)	－	－	10%
29	[17.8]	11.6	－	－	80%
30	[18.7]	(17.9)	－	－	70%
31	29.1	(24.7)	－	10.4	40%
32	[15.5]	(13.8)	－	－	20%
33	17.3	13.4	－	7.8	50%
34	[14.4]	(9.4)	－	－	50%
35	[15.1]	－	(19.6)	(11.8)	40%
414-36	9.5	14.6	－	7.4	80%
37	[5.8]	－	(21.7)	－	10%
38	[9.5]	(17.3)	－	(15.2)	20%
39	[9.1]	(13.2)	－	(9.0)	20%
40	[5.3]	(18.6)	－	(7.6)	10%
41	[7.0]	(19.5)	－	(11.6)	20%
42	[6.8]	－	－	－	30%
43	[11.1]	(37.8)	－	－	30%
44	[16.0]	(51.6)	－	(9.0)	70%

両横に「α」状の非対称の突起を付けているが、後面にどのような把手が付くかは不明である。口縁部文様帯、胴部文様帯、胴部無文帯、底部文様帯の４帯構成の文様帯を有する。口縁部文様帯には、山形把手下に台形状の区画を施し、把手や突起から派生して垂下する渦巻文を横位に連ねるモチーフを刻み隆帯で４単位構成に描いている。モチーフの余白には爪形文を伴う三叉文や集合沈線文、渦巻文等を充填施文する。胴部文様帯は幅広と幅狭合わせて６単位に分割し、渦巻文を中心としてそれぞれ異なった文様を充填している。底部文様帯は４単位の楕円区画文を配し、区画内には蛇行する爪形文を施文する。

２は欠損部が多く、口縁部の文様構成を把握しきれないが、楕円区画文と爪形文を伴う区画文を４単位に配するものと思われる。胴部は垂下隆帯で４単位に区画し、「U」字状や斜行する隆帯を施文しており、区画内には横位、縦位の集合沈線を施文する。比較的簡素な文様構成である。

３は口縁部に楕円区画文を配し、半截竹管状工具の平行沈線を充填施文する。頸部は小波状沈線文を伴う幅広の爪形文で区画している。口縁部や区画隆帯に細かな刻みを施している。

４は１と類似しているが、頸部に幅狭な無文帯

が加わっている。口縁部は山形の眼鏡状把手１箇所と、「α」状突起を対に施文し、台形状と半円形の区画文を連ねる構成と思われる。胴部文様帯は菱形状の区画を中心として6単位に区画し、渦巻文と集合沈線文を交互に施文しているようである。

５は口縁部文様帯、頸部文様帯、胴部文様帯、底部文様帯の４文様帯構成で、無文帯を挟まない構成である。口縁部文様帯は幅狭に区画して渦巻文を繋ぐモチーフを構成すると思われ、頸部文様帯には楕円区画文を配している。胴部文様帯は幅広に区画し、刻み隆帯の鋸歯状区画を施している。この鋸歯状区画隆帯の中央部から隆帯渦巻文を派生させている。サンショウウオ文の胴部文様の構成に通じるものがある。描出隆帯には波状沈線を伴う爪形文が沿う。底部文様帯には楕円区画文を配している。底部を欠損する。

６は頸部無文帯を有するキャリパー形土器で、山形の眼鏡状把手を有し、把手を中心として下部に台形区画、両脇に半弧状の区画文を施している。区画内には列状の爪形文や、コンパス文状の爪形文を施文する。胴部には刻み隆帯で縦位区画を施し、規矩形や三角形状の区画文を施文する。区画内には集合沈線や、爪形文を伴う三叉文を施文する。胴下半部を欠損する。

７～17は無文の内湾する口縁部が開くキャリパー形深鉢で、口唇部に把手を付けるものが多い。

７は欠損部が多く不明な点があるものの、口縁部の大把手から続く「α」状突起を付け、胴部にパネル文状区画を施しているものと思われる。パネル文状区画は刻み隆帯と並行沈線で施文しており、蓮華状文が伴う区画もある。区画隆帯には部分的に「ハ」字状刻みを施している。

８は下膨れ状を呈する口縁部無文帯に山形状の眼鏡状把手を付け、胴部に楕円形状や「B」字状を呈する大柄な区画文を構成し、底部文様帯に楕円区画文を配している。充填文は全て集合沈線である。底部を欠損する。

９はほぼ完形品である。無文の口縁部が強く開き、筒状の胴部へと移行するキャリパー形深鉢である。口縁部無文帯、頸部文様帯、胴部無文帯、底部文様帯の４帯構成で、頸部文様帯を２帯に分割している。それぞれの文様帯は小波状沈線を伴う爪形文を沿わせる隆帯で区画しており、波状沈線は小繋状を呈する。文様帯は上下で半分ずらす楕円区画文帯であり、頸部文様帯は幅狭な２帯の楕円区画文帯に分かれている。上段は横長の楕円区画文４単位、円形区画文１単位の計５単位構成である。下段は横長の楕円区画文３単位、さらに長い長楕円区画文１単位の計４単位構成である。それぞれの楕円区画文は半分ずれる構成になっており、上段で５単位目となる円形区画文の下部に、下段の長楕円区画文を配しており、単位数と重なりのバランスをとっているようである。また、底部文様帯は独立の楕円区画３単位と、２区画の融合した長楕円区画文１単位の計４単位で構成しており、融合区画を２単位とすれば、合計５単位構成となる。いずれも、４単位の中に５単位性が隠れており、偶数と奇数の調整をはかりつつも、対称性構造を崩していることが理解される。なお、頸部文様帯としたものは、実際は胴部上半の文様帯であるが、頸部文様帯と胴部文様帯が融合した文様帯でもある。楕円区画内には蛇行する爪形文列や集合沈線文を充填施文するが、頸部の円形区画文のみ蓮華状文を施文している。正面観を示しているのであろうか。

10は頸部の括れが弱く、５に類似する器形で、頸部に無文帯を有する。この無文帯の位置は、９の頸部文様帯の下段部分に相当するものと思われるが、文様帯の有様が多彩である。頸部の文様帯には幅狭な楕円区画文を配し、胴部の幅広の文様帯には交互に入り組む沈線文のモチーフを描いている。沈線文には爪形文を沿わせている。

11は胴部上半部の文様帯を２帯に分割し、上段に渦巻文を中心としたモチーフを、下段に楕円区

第169表　第53号住居跡出土石器観察表（第417～419図）

番　号	器　種	分類	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
417 － 89	石鏃	Ⅰ2①	黒曜石	2.0	1.8	0.4	0.9	
90	石鏃	Ⅰ2①	チャート	2.9	1.9	0.5	2.1	
91	石鏃	Ⅰ2①	チャート	[3.9]	[1.6]	0.4	1.6	
92	石鏃	Ⅰ2②	黒曜石	2.7	[1.9]	0.4	1.2	
93	石鏃	Ⅰ2②	チャート	3.2	[1.8]	0.6	2.0	
94	大形粗製石匙	Ⅰ1②ア	ホルンフェルス	[7.0]	8.6	2.7	118.3	
95	スクレイパー	Ⅱ2①ア	砂岩	8.2	4.7	1.3	53.2	
96	スクレイパー	Ⅱ1①イ	砂岩	6.8	9.6	2.0	136.8	
97	磨製石斧	Ⅰ②ア	砂岩	[7.8]	4.0	3.3	149.8	
98	打製石斧	Ⅰ①イ	ホルンフェルス	10.2	3.4	1.9	85.0	
99	打製石斧	Ⅰ2②イ	緑色岩	[9.7]	3.0	1.4	51.4	
100	打製石斧	Ⅱ2①イ	ホルンフェルス	11.6	4.5	3.0	161.4	
101	打製石斧	Ⅱ2①ア	頁岩	10.7	4.1	1.1	51.6	
102	打製石斧	Ⅱ2②イ	頁岩	8.5	4.1	2.1	81.6	
418 － 103	打製石斧	Ⅲ2①ア	ホルンフェルス	12.5	6.0	2.3	206.8	
104	打製石斧	Ⅲ2①イ	砂岩	10.8	4.5	1.9	127.4	
105	打製石斧	Ⅲ1①ア	頁岩	11.3	6.7	2.8	227.5	
106	打製石斧	Ⅲ2①ア	頁岩	8.4	4.2	1.8	64.5	
107	打製石斧	Ⅲ2①イ	ホルンフェルス	8.9	5.8	2.1	92.8	
108	打製石斧	Ⅲ1②ア	砂岩	[10.4]	5.9	2.7	206.8	
109	打製石斧	Ⅱ2②ア	ホルンフェルス	[9.1]	4.6	2.4	113.4	
110	敲石	Ⅳ1-3①イ	砂岩	10.1	5.1	2.9	190.1	
111	磨石	Ⅰ1-3②ア	砂岩	[5.8]	[4.2]	[5.0]	142.1	
112	磨石	Ⅱ1-3①イ	閃緑岩	13.5	7.5	3.5	620.1	
113	石皿	Ⅲ2②ア	緑泥片岩	[13.5]	[8.2]	[3.6]	526.8	
419 － 114	石皿	Ⅲ2②ア	緑泥片岩	[27.6]	[21.0]	4.6	3287.8	
115	石皿	Ⅱ2②ア	閃緑岩	[18.8]	[23.8]	10.0	5586.4	表面一部黒色化

画文を配する構成をとり、胴部の幅広文様帯には円形文を中心としたモチーフを描くものと思われる。

12は括れる頸部と底部に楕円区画文帯を有し、胴部を無文帯とする。胴部無文帯の区画隆帯には刻み状の爪形文を施文する。楕円区画内には集合沈線を施文する。口縁部文様帯は４単位に分割できる変形の３単位、底部には３単位に区画文を配する構成である。

13は口縁部と底部を欠損するが、胴部に隆帯で４単位の楕円区画文を施文する。文様帯の区画には波状沈線の沿う爪形文を施文している。

14は口縁部の、15は胴部の破片である。

16は無文の口縁部が開く器形で、口唇部に大きな山形眼鏡状把手１個を有し、把手右側に蛇体を表す蛇行隆帯文が垂下する。頸部には４単位で構成する楕円区画文帯を設け、胴部に単節ＲＬ縄文を横位施文する。

17は口縁部が内湾する器形であるが、16と同様の文様帯構成で、頸部に４単位の楕円文を配する。区画隆帯の一部には、交互刺突文を施している。胴部は単節ＲＬ縄文の横位施文である。

18は小形の深鉢で、口縁部が内折する器形である。頸部に幅広１段の楕円区画文帯を巡らす。

19は３単位の波状口縁を呈する阿玉台式系の器形で、波頂部を中心に対向する楕円区画文を施文する。阿玉台Ⅲ式に比定されようか。

20は若干内湾する口縁部が開く器形で、口縁部に鋸歯状の隆帯文を巡らせ、肥厚する垂下隆帯の頭に渦巻文を施文する。隆帯で区画される胴部は、蛇行状やクランク状のモチーフを組み合わせ

て、複雑な文様を展開している。区画内の地文に条線文を施文する。

21は大形の細長い円筒形土器であり、半截竹管状工具の平行沈線で口縁部に「M」字状区画を施し、蓮華状文を沿わせる。胴部には横位の単節ＲＬ縄文上に幅広の爪形文でサンショウウオ文を３単位に連ねるモチーフ構成をとる。

22は胴部に２段の楕円区画文帯を設けるもので、区画文の間には単節ＲＬ縄文を充填施文する。

23は底部付近であるが、縦位のパネル状区画文を施文している。24、25も底部破片である。

26は円筒形土器で、地文に単節ＲＬ縄文を縦位施文し、幅広沈線で鋸歯状区画文を施文する。区画沈線には小波状沈線を沿わせている。

27はほぼ筒形の器形で、口縁部に眼鏡状把手を付ける。口縁部は幅狭の楕円区画帯となっている。胴部地文は０段多条ＲＬの縦走縄文である。

28は円筒形土器で、低平な隆帯で渦巻文と剣先状文を一体化するモチーフを描いている。

29 ～ 32は地文のみの深鉢で、29は口縁部に環状把手が付くようである。地文は０段多条ＲＬの縦走縄文である。30、31は口縁部が直線的に開く器形で、30は０段多条ＲＬの縦位施文、31は撚糸文Ｌである。32は口縁部がやや内湾し、胴部に単節ＲＬ縄文を横位施文する。

33は胴部の張る小形の樽形土器で、規矩形のパネル状区画文を施している。

34は小形で球形状の壺形土器で、口唇部に突起を付け、胴部に２段の楕円区画文帯を設けている。上段の区画文内には渦巻文と三叉文を組み合わせたモチーフを施文する。

35は器種不明であるが、胴部から蛇行隆帯の付く棒状の把手が付く。胴部は半截竹管状工具による３本平行沈線で区画文を施文する。

36はキャリパー形土器の底部が独立したような小形の鉢で、波状文間に円形文を配するモチーフを施文する。

37は０段多条ＲＬの縦走縄文を施文する胴部の括れ部分である。

38 ～ 41は底部で、39は撚糸文Ｌを施文し、他は無文である。

42は台付土器の脚部である。円孔が空く。

43、44は浅鉢である。43は口縁部が内湾する器形で、低平隆帯で渦巻文を施文している。44は直線的に口縁部が開く浅鉢である。口縁内面に稜を有する。

破片では、56、57は雲母を含み、２列の押引文を施文する阿玉台Ⅱ式並行期の土器群で、58は角押文を施文する勝坂式古段階の土器である。

59 ～ 62は幅広の爪形文やキャタピラ文の脇に小波状沈線を施文するもので、勝坂式中段階の藤内式段階に比定されよう。63 ～ 75は隆帯脇に沈線を施文し、それに沿って爪形文と小波状沈線文を沿わせるものや、蓮華状文を沿わせるものがある。隆帯には刻みや、交互刺突文を施すもの、半隆帯状のものなどがある。

76 ～ 78は縄文を施文する深鉢の口縁部破片で、76は無節Ｌ、77、78は単節ＲＬ縄文を横位施文する。82、83は張り出す底部で、０段多条ＲＬの縦走縄文を施文する。

79 ～ 81は浅鉢で、79は口縁部が内湾し、文様を有するもの、80、81は口縁部の開く浅鉢で、波状口縁を呈するものである。

土製品では、84が小形の耳飾りで、鼓状を呈する。

85 ～ 88は土器片を利用した土製円盤である。

石器は89 ～ 115が出土した。

89 ～ 93は石鏃である。このうち、91は両側縁が鋸歯状で、先端が僅かに欠けている。この他、92、93は正面左脚部が欠損している。

94は粗粒の石材を素材として用いた横型の大形粗製石匙である。

95、96も粗粒の石材を利用しており、摘まみ部がないことから、スクレイパーと判断した。

97は乳棒状磨製石斧の刃部片である。

98 ～ 109は打製石斧である。98 ～ 102は短冊形を呈する。刃部は98、100が片刃、99、101、102が両刃である。103 ～ 108は撥形を呈する。片刃の103を除いて、すべて刃部が両刃である。109は基部片である。

110は自然礫を用いた敲石である。

111、112が磨石で、111は周縁に整形が施されている。また、正面及び裏面の中央に敲打痕が集中している。

113 ～ 115は石皿の破片である。114は裏面に凹痕を有する。

第54号住居跡（第420図～第424図）

Ⅰ－21区に位置する。東側で第53号住居跡と重複するが、本住居跡の方が古い。また、中央部で第114号土壙と重複し、炉を含めた中央部が大きく壊されている。

住居跡の平面形は北東方向に細長い楕円形で、規模は長径5.8m、短径5.5m、深さ0.7mである。

壁溝は検出されず、壁は皿状に緩く立ち上がる

柱穴は合計23基が検出された。壁際に小ピットが巡り、主柱穴と思われる柱穴は５基検出された。柱穴の規模、深さ、配置などから主柱穴と思われる柱穴はＰ２、３、４、５、１の５基であることは明らかである。

主柱穴の深さは、Ｐ１＝83㎝、Ｐ２＝64㎝、Ｐ３＝73㎝、Ｐ４＝90㎝、Ｐ５＝86㎝である。

炉跡は不明で、重複する第114号土壙によって壊されているものと思われる。

埋甕は検出されなかった。

住居跡の覆土からは復元されるような個体や大形破片はほとんど出土していない。しかし、重複する第114号土壙からは復元可能な勝坂式中段階の、およそ藤内式に比定される土器群が出土している。したがって、住居跡はほぼ同時期か、それ以前の時期の所産であると推定される。

遺物は第421図１～第424図62の土器類、石器類が出土した。

土器類は１～44である。

第422図６、７はＰ２から、８はＰ３から、９はＰ６から出土した。

１は波頂部から「U」字状隆帯を垂下し、波頂下を相対する枠状文を区画し、複列の結節沈線を施文する。阿玉台Ⅱ式に比定されよう。

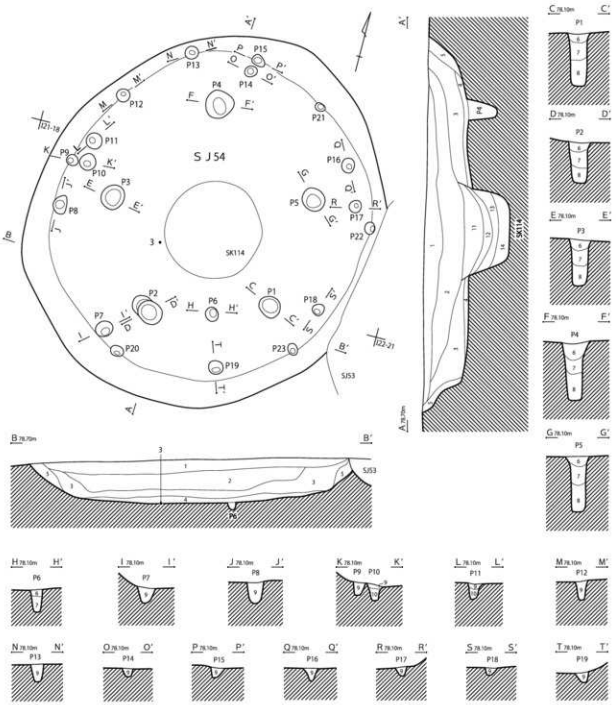
２は下膨れ状の口縁部に多段の幅狭楕円区画文を施文し、キャタピラ文状の押引文を施文する。口唇上から端部で渦を巻く蛇行隆帯を斜めに垂下する。新道式であろうか。

３は頸部で括れ、口縁部が開く器形で、口縁部にキャタピラ文で三角形区画文を連ねるものである。区画内は抉りの入る三叉文を施文する。頸部から胴部にかけては、半截竹管状工具による平行沈線で長方形状のパネル区画文を施文し、頸部では区画内に三叉文、区画の縁辺に刻みを施している。胴部では区画文に沿ってキャタピラ文を施文し、区画内に集合結節沈線を施文する。新道式新段階から藤内式古段階にかけての段階であろう。

４は円筒形土器で、口縁部から円形文を繋ぐ隆帯を斜位に垂下する。胴部のパネル区画文内には単節ＲＬ縄文を横位施文し、区画の縁辺に刻みを施している。

５は頸部から胴部にかけて３段の括れを有する甕形土器で、外反する短い口縁部に斜位の結節沈線、１段目の膨らみに単節ＲＬ縄文、２段目の膨らみに三角押文の鋸歯状区画を施している。括れ部の区画は細かなペン先状工具の三角押文で行っている。新道式の新段階から藤内式古段階に比定されよう。

10 ～ 25は平行する角押文を施文する土器群で、大半は阿玉台Ⅱ式並行期の土器群である。11は波状口縁、10、12 ～ 15は平口縁である。11は波頂部下で相対する楕円状の区画文を長く押し引く２列の押引文で施文する。12、13は口縁部の楕



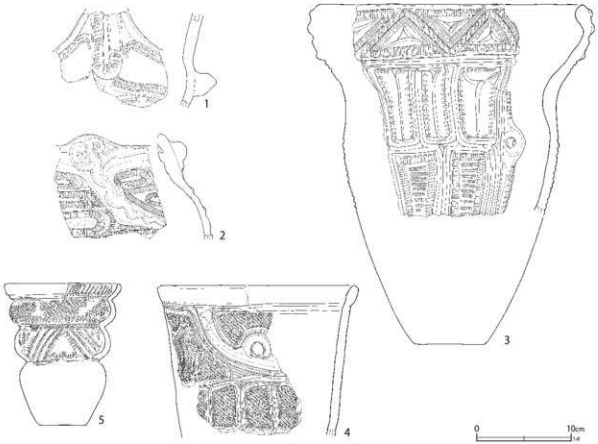
SJ54
1　暗褐色土　ローム粒子少量　炭化物微量
2　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物少量　焼土粒子微量
　　遺物が多量に出土　しまり良い
3　褐色土　ローム粒子多量　炭化物・ローム小ブロック微量　しまり良い
4　褐色土　ローム粒子多量　炭化物・ローム小ブロック少量　しまり良い
5　褐色土　ソフトローム主体　ローム粒子多量　炭化物微量

SJ54ピット
6　褐色土　ローム粒子多量　炭化物少量　ローム小ブロック微量
7　褐色土　ローム粒子少量　炭化物微量
8　暗褐色土　ローム粒子・ソフトローム多量　粘性あり
9　褐色土　ローム粒子多量　炭化物・ローム小ブロック微量
10　暗褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック多量

SK114
11　暗褐色土　ローム粒子・炭化物多量　焼土粒子少量
　　ローム小ブロック微量
12　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物・ローム小ブロック少量
　　焼土粒子微量
13　褐色土　ローム粒子・ソフトローム多量
　　ローム小ブロック少量　炭化物微量
14　純黒褐色土　ソフトロームとロームブロックで構成される
　　ローム粒子・ローム小ブロック多量　炭化物微量

0　2m
1:60

第420図　第54号住居跡



第421図　第54号住居跡出土遺物（1）

第170表　第54号住居跡柱穴計測表（第420図）

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P 1	35.0	83.0	P 2	52.0	64.0	P 3	38.0	73.0	P 4	45.0	90.0	P 5	40.0	86.0
P 6	22.0	35.0	P 7	30.0	25.0	P 8	30.0	33.0	P 9	20.0	23.0	P 10	27.0	25.0
P 11	25.0	25.0	P 12	22.0	30.0	P 13	23.0	28.0	P 14	20.0	12.0	P 15	22.0	13.0
P 16	25.0	20.0	P 17	20.0	15.0	P 18	20.0	11.0	P 19	24.0	15.0	P 20	22.0	40.0
P 21	18.0	35.0	P 22	20.0	35.0	P 23	20.0	15.0						

第171表　第54号住居跡出土復元土器観察表（第421図）

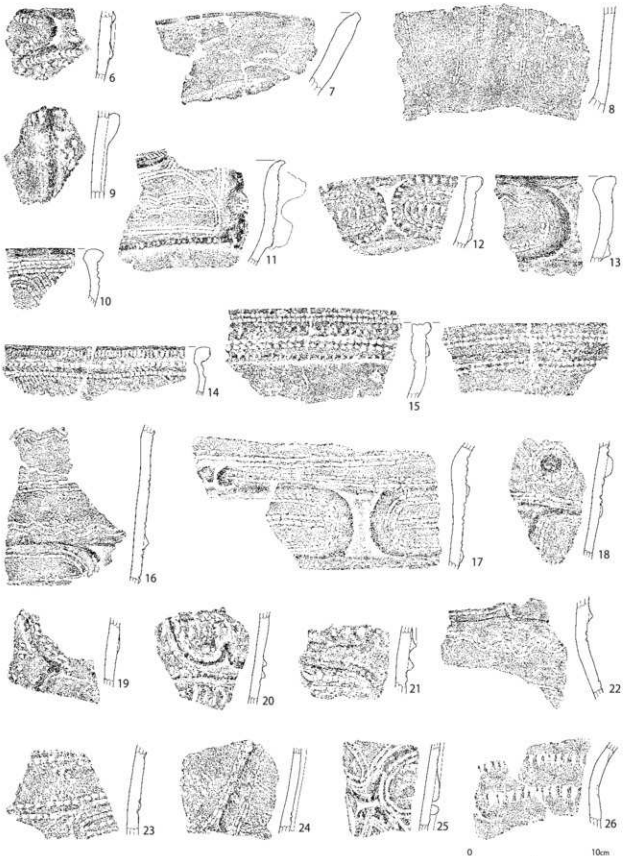
番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備　考
421-1	[10.1]	－	－	－	10%
2	[11.0]	－	－	－	20%
3	[22.5]	(27.7)	－	－	40%
421-4	[15.6]	(19.8)	－	－	30%
5	[8.7]	(12.4)	－	－	30%

円区画に沿って２列の角押文を施文し、10、14、15は口縁部区画に施文する。14は２種類の角押文で区画し、地文に無節縄文Lを縦位施文しているようである。15は角頭状の幅広い口唇部を有し、口縁部裏面に２列の平行角押文を施文する。

16～25は断面三角形状の隆帯で区画及びモチーフを描き、平行角押文を施文するものである。大半が雲母を含むが、16、22は含まない。20には粗い襞状整形痕が残る。

26は胴部に爪形文状の刻みを施すもので、襞状整形痕を模したような施文である。

27は環状把手の付く山形状の波状口縁である。環状把手から蛇行隆帯が垂下する。雲母を含んでいる。



第422図　第54号住居跡出土遺物（2）